
いちばんうしろの
大魔王
水城正太郎

HJ BUNKO


いちばんうしろの
大魔王
モッファアアアアア



そが
曽我けーな
落ちこぼれな天然少女。
阿九斗と偶然出会って
懐いてしまう。
さいあくと
紗伊阿九斗
大魔王(予定)の主人公
このへん


ころね
政府から送られてきたリラダンと呼ばれる人造人間。常に阿九斗に付き添い護衛と監視を行なう。
服部絢子
はっとりじゅんこ
真面目なクラス委員。阿九斗に裏切られたと思い込み、阿九斗を目の敵にしている。


「あ、ご、ごめん……！」
阿九斗はけーなにのしかかっていることに気づき、立ち上がろうとした。
「きゃ！　だ、駄目！」

いちばんうしろの大魔王

水城正太郎

HJ文庫

口絵・本文イラスト　伊藤宗一

目次

誰もが眠(ねむ)り込んでいる深夜二時。
夜の空を小さな光が駆(か)けていった。
それを見上げた者がこの世界の住人であれば、それが何かすぐにわかったはずだ。流星でも鳥でも飛行機械でもない。それは魔法使(まほうつか)いの飛翔(ひしょう)魔法(まほう)によるマナの発光だ。
凍(い)てつくような空気を切(き)り裂(さ)いて飛んでいるのは、豪奢(ごうしゃ)なロングコートをまとった黒髪(くろかみ)の女だった。強ばった顔の頬(ほお)に汗(あせ)が流れて後方に霧(きり)となって飛んだところを見ると、その表情の緊張(きんちょう)は夜の冷気のせいばかりではないらしい。
ロングコートの胸元に輝(かがや)く銀色のシンボルは、二重の十字にからみつく蛇(へび)がリンゴをくわえた意匠(いしょう)で、この大陸の黒魔(ま)術師(じゅつし)と呼ばれる者が好んで身につけるものだ。
と、そのシンボルにじゃれつく小さい手がコートの内側から現れた。彼女は赤(あか)ん坊(ぼう)を抱(だ)きかかえていたのだ。
彼女は片手で赤ん坊をあやしながら後方を振(ふ)り返った。マナをかき乱さずに飛翔(ひしょう)することは不可能だから、追っ手があるならば気配を感じることができるはずだった。が、その気配は今はない。もっとも飛翔中の彼女は周囲のマナをひどくかき乱しているということでもある。遠くからでも位置が特定されているはずだ。
「この子の居場所だけはわからないようにしないと……」

彼女はつぶやくと、気配を消すために目的地の手前で地上に降り、光の魔法すら使わずに暗闇の中を歩く。林の中の細い道の先に小さな町があることは上空から確認していた。彼女にとっては知らない土地だが、それでも町の建物の配置と町の正面にある門に刻まれたシンボルから、この町が彼女の目的にかなうであろうことは確かだった。

町は静まりかえっている。住人は数百ほどだろうが、入り口近くにある教会はそれなりの大きさで、洗礼の設備も整っていると思えた。この子には是が非でも洗礼を受けてもらわなくてはならないのだ。幸いにもここの主神はコ＝ロ神――慈愛が主要教義だ。子を預けるには最適である。

預ける……。そう考えて、ようやく安堵にも似た感情が彼女に芽生えた。そうだ、我らの子を、悲願の子を、日の当たる人々の下に預けるのだ。

「健やかに。そして自分の運命に気づく日には強くありますように」

古典的な祈りの言葉を唱えながら彼女はロングコートを脱ぎ、それに赤ん坊をくるむと扉の前に優しく横たえた。

「我らの希望の子……」

そして彼女は走り去るとき、赤ん坊を振り返った。母親が子を心配するときの目をしていた。が――

「！」

彼女は自らの失敗を瞬時にさとったかのような顔になると、すぐに正面に目を戻した。

彼女が失敗と感じた原因は、暗闇の中でもはっきりと見えたその赤ん坊の目にあった。

赤ん坊は泣くでもなく、じっと彼女を見返していた。その目には0歳（さい）児の年齢（ねんれい）に似合わぬはっきりとしたある色が浮（う）かんでいた。拗（す）ねたような、あきらめたような、それは気弱な二十代の男が女に振られたときに見せる瞳（ひとみ）の色だった。

――そりゃあしょうがない、自分が悪いんだからさ……。

赤ん坊の目は雄弁（ゆうべん）にそう語っていた。

「予想とは違（ちが）う運命になるかもしれない……いや、それこそが我々の求めたものかも……」

不安を打ち消すように独り言をつぶやき、彼女は林の中へと消えた。

取り残された、そのおそろしくひねた赤ん坊は、どうしたものかと考え込むように夜の空を見ていた。

そして十年の年月が過ぎた。

星を見上げていた赤ん坊は、今では昼間の空をぼんやりと眺（なが）めているような少年に成長していた。阿九斗（あくと）と名付けられた彼は難儀（なんぎ）な性格だった。精神的なピークを五歳のときに迎（むか）えてしまったと自覚しているような達観した子供で、五歳のとき孤児院（こじいん）の先生が子供達の一日の過ごし方の予定表を確認しているのを横から見て、「それにしたがわないとおこられるのですか？　それは僕たちが弱いものだからかんりされるのですか？」と問いかけて先生を困惑（こんわく）させたり、遠足で景色のよい山に登り、いつもよりも豪華（ごうか）な弁当を出されてそれを食べているとき、「ここにいるかぎりはこれがもっともぜいたくなことだ。自分

がなにもしていないのに誰かがよくしてくれる幸福はありがたいが、これ以上のことは自分がなにか他人のために働かないかぎりはありえないのだ」と突然にさとって涙を流しはじめたりしていた。

　そんな阿九斗であるから、孤児院ではおとなしく過ごした。扱いづらい子供ではあったが、迷惑をかけぬようにしよう、良い人間になろうという思いが強かったようで、時折、突飛な行動をとることはあったが、それも大事件に結びつくことはなかった。ただ、小学校の半ば頃——十歳だった——に里親が見つかって孤児院を出るとき、ちょっとした騒動を起こすことになった。ほぼ同じ年齢なのに入れ替わりで孤児院にやってきた少女がいたのだった。

　両親が死んで身よりもなく孤児院にやってくる子供は誰でもそうだが、彼女は泣いてばかりいた。それを見て、阿九斗は立ちつくしていた。自分の晴れの日だというのに孤児院の玄関に誰も見送りに来ていない原因が彼女に先生たちがかかり切りになっていたことにあったと気づいたからだ。孤児院の先生達はいつも通りに少女を慰めていた。マニュアルがあるわけでもないが、一番傷つけずに済む方法は同じようなものになるため、やり方は手慣れたものになっていた。優しい言葉をかけてぬいぐるみ等で遊んでみせる。心をこめてやるよりも、通り一遍の言葉のほうがうまくいくことは多い。阿九斗はいくつかの経験でとうにそんなことは知っていたが、彼の性格上、そのことを不快に思わずにはいられなかった。そんな先生の対応で深く悲しんでいたはずの孤児達の誰もが笑顔になってしまうことはさらに不快だった。が、やがて彼女が普通の存在でないことに阿九斗は気づいた。彼女はおもちゃのアクセサリーをもらっても、少し興味を示しただけで結局いつまでも泣きやまなかったのだ。

阿九斗は彼女の涙を止めることに決めた。受け入れ先に荷物を置いた後に孤児院に返却することになっている大きなスーツケースを玄関先に放置し、町の中心にある商店街に歩いていくと、町で唯一、宝飾を売っている小物店に入り、今後の当座の生活費として渡されていた金——大人数ヶ月分の生活費——をはたいて宝石入りの髪飾りを買うと孤児院に戻った。まだ少女は泣いており、先生達はおろおろしていた。

阿九斗は先生達の間をすり抜けて、しゃがんでいる彼女の前に立ち、その少女の髪の毛をぐいとつかんで顔をあげさせた。先生達は驚いて阿九斗の行動をとがめたが、阿九斗は無言で髪飾りを少女の目の前に突き出した。

何が起こっているのかに気づくまでには相当時間がかかったようだったが、少女は異常な事態にともかく泣くことはやめた。泣きはらした丸い目で阿九斗を見返し、ぼんやりとした顔でいる。

丸い瞳に丸い顔。丸っこい手で目の横をこするたび、頭で何本かの房になって立っている癖っ毛が揺れていた。その毛の色は燃えるような赤で、まるで炎が揺れているかのように見えるのが印象的だった。その年齢の女の子ならば誰であれ可愛い印象があるものだが、この少女の顔立ちは成長しても幼いままなのだろうと思わせる。

阿九斗は少女から顔をそらして、その手に強引に髪飾りを握らせた。少女は抵抗しなかったが、その小鳥を模した銀の髪飾りの瞳に埋め込まれた宝石に気づくと、怯えたような顔を阿九斗に向けた。子供でも本物かどうかはわかる。もちろん子供には過ぎた代物だ。阿九斗は少女に一度も目をやらぬまま、先

生達に向かって、高いものだが彼女のものだから誰かが盗んだりしないように、そして先生達が一時的にこれを預かったりしないように、と言い放った。
「あ、ありがとう」
　少女は、ぼんやりとした声で言い、阿九斗と髪飾りを交互に見た。まるで爆発物を両手に乗せているかのような態度だった。
「僕はこれから働くつもりだから、もらったお金なんていらないんだ。君はこれを孤児院を出るときにお金にかえてもいいし、持っていてもいい。これは君のものだよ。でも、結局、ものをもらうなんて単純なことで人間は泣きやんじゃうんだってことは憶えておいて欲しいな。とはいっても、君は高いものじゃないと泣きやまなかったんだから、すごい子なのかもしれないけど。魔王とだって張り合えそうだ」
　阿九斗はそう言ってスーツケースのところまで戻ると、ようやく引きずらずに着られるようになったあのロングコートを改めて羽織り直した。
「どこへ行くの？」
　少女が聞いた。
「ここを出るんだよ」
「待ってよ。仲良くなれるかもしれないのに」
「それは残念だった。でも君なら孤児院には数年しかいなくて済むと思うよ。その髪飾りを捨てないでいたら、僕が君のことを覚えていられるから、いつかはまた会えるんじゃないかな。それじゃあ」

そして阿九斗は少女の答えを聞かず、孤児院の外に一歩踏み出したのだった。

それからさらに五年が過ぎた。

受け入れ先の家は、ごく普通の騎士の家庭だった。騎士は孤児を引き取ることが普通なので、阿九斗への対応も事務的だった。その事務的なところは阿九斗にとっては過ごしやすいものであったが、同時に里親への相談事はしにくい環境であることにも気づいていた。そんな環境と阿九斗の性格が重なったため、阿九斗の五年間の生活は苦しいものになった。朝は夜明け前に起きて牛乳を配達、学校が終わってからは喫茶店で働き、夜は独学で入試のための勉強をするというのが彼の日々のスケジュールだった。その頃、阿九斗は同世代の女の子なら誰もが注目せずにはいられない美少年に成長していたが、その生活態度と性格はいかんともしがたく、中学校に進んでも女の子と恋愛関係になることはおろか、親しい友達もまったくいなかった。顔に惹かれて近寄ってくる女の子に「分け隔てなく付き合うのが人間としてのあるべき姿であって、誰かと特別な関係になるということは、なんらかの差別を生み出しているわけだ。かといって誰とでも仲良くするということはできないし、特に綺麗な女の子が誰かと仲良くしているのを見るのは、どういうわけか悔しい。でも、その悔しさを消すためだけに自分も綺麗な女の子と仲良くすることはやはり間違っていると思う。君はどう思うかな?」などと言って悩んでしまう少年を、中学生の女の子が好きになるのはかなり難しいだろうし、女の子にそんな態度をとる男を友人には持ちたくないと男の子だって考えるだろう。

性格のことはともかく、阿九斗がそんな生活をしていたのには理由がある。阿九斗は高校は奨学金の出る国立の名門『コンスタン魔術学院』へ行き、魔術師の国家資格をとるつもりなのだ。友達もおらず、暗黒の時代を過ごすことになり、その性格がさらに悪化してしまったとしても、魔術師の国家資格は目指すべき価値があるのだった。

国家一級魔術師——この日本という国を動かしているのは間違いなく彼らだった。西暦で言えば三千年をやや過ぎたこの社会では、国家一級魔術師が行政の中核を担っている。社会に奉仕するため魔術の使用について一切の制限を受けないのは彼らのみであり、様々な分野で活躍していた。

阿九斗は純粋に人々に奉仕するため、社会の役に立つために国家魔術師を目指していた。理屈っぽいが本質的には善人であることに加えて、孤児であるという生まれが〝他人の役に立たなければならない〟という強い思いを抱かせていたのだった。

そしてようやく合格の日が来た。阿九斗は飛び上がらんばかりに喜んだ。合格すれば学園寮に入ることができるし、奨学金ももとっていたため、これで誰かに養ってもらう生活からは完全に脱却することとなった。

阿九斗はこれで自分が完全に生まれ変われると思っていたし、事実そうなったのだった。

ただし、それは彼が想像もしていなかった形で訪れたのだったが。

1　魔王が誕生しちゃった

　阿九斗は細長い鯨のような形の長距離弾丸列車が到着した白いプラットホームに降り、列車運行専門の魔術師が眼前の空間にマナのスクリーンを開いて時刻を確認している横をスーツケースを引きずって通り過ぎた。駅の人混みはかなりのもので、人種も立場も様々だ。帝都名産の長ネギの形をしたお菓子の屋台や、本屋などが構内に並んでおり、ちょっとした市場のようなにぎわいだ。それでも、もめごとなどは起こっていないらしく、コンコースの中央では青い制服の警備魔術師が退屈そうに腰の衝撃警棒を揺らしていた。

　――帝都はすごいな。たくさんの人間がそれぞれ勝手に動いていても混乱しないんだな。人が動きになれているのか……いや、それぞれみんなが欲しいものや見たいものや行きたい場所に向かっているんだし、立ち止まっている人もいるから、それだけじゃないよな。そうか、もしかしたら駅そのものの構造をデザインした人が、みんなの欲しいものや見たいものを知っていて、欲望に従って動くと駅で人が流れていくようにデザインされているんだ。一級魔術師の力ってのはすごいものだな。

　そんな生真面目すぎることを考えながら、阿九斗は上空に浮かんだマナスクリーンの表示に従って『コンスタン魔術学院』直行の飛行バス停留所に向かう。空に面した停留所は数十メートルもの高さがある

帝都中央駅の最上階に作られている。順路の最後は長い階段だった。阿九斗が階段をのぼりはじめるとすぐに、階段中央辺りで一人のお婆さんが難渋しているのが見て取れた。

お婆さんは着物姿で大きめの鞄を重そうに抱えていた。

――着物姿ということは、スハラ神の洗礼を受けた人かな。

阿九斗は階段を急ぎ足でのぼり、お婆さんに後ろから声をかけた。

「お荷物、お持ちしましょうか？」

振り返ったお婆さんは、一瞬だけ驚いた顔をしたが「じゃあお世話になりましょうか」と応じた。

お婆さんが驚いた顔をしたのにも、阿九斗がお婆さんの信仰を類推したのにも理由がある。誰もが信仰を持つことがあたりまえなこの社会において、信仰を表面に出すことは、その教義に頑なであることを示している。そして一般にスハラ信者はひどく付き合いにくいと思われていた。国防を担う集団である彼らは、良い言い方をすれば誇り高いが、悪い言い方をすれば傲慢なのである。

「私の家は公儀の家系でしてね。街ではあまり助けてはくれないんですよ」

お婆さんはそう言って、珍しいものを見るように阿九斗を見た。

「重いものを持っている人は助けるのが当然だと思って。ところで、公儀と言いますと？」

聞き慣れない言葉に阿九斗は聞き返す。

「スハラ神さんのとこにおける公務員という意味ですよ。他では騎士とか、爵位を持っている方のことかしら？」

穏(おだ)やかにお婆さんは答えた。

「そうでしたか」

「ところで、あなたは魔術(まじゅつ)学院の学生さん？」

「そうです」

阿九斗がうなずくと、お婆さんは照れたように微笑(ほほえ)んだ。

「その荷物は孫の忘れ物でねぇ。孫も同じ学院の学生だよ。休みに実家に帰ったのに、荷物一式を家に忘れてねぇ」

「荷物全部ですか？」

「変でしょう？　普段(ふだん)のように学校に行くつもりで軽装で行ってしまったんでしょうね」

お婆さんと阿九斗は声を出して笑った。と、その笑い声を聞きつけたのか、階段の上に人影(ひとかげ)が現れた。

「お婆様！　声が聞こえてまさかと思いましたけど！」

そう言ったのは阿九斗と同年代の少女だった。驚いた表情で、お婆さんと阿九斗を交互(こうご)に見ている。

『コンスタン魔術学院』の制服を着ていた。

「忘れ物だよ」

お婆さんは笑いかけた。

「え？　忘れ物？　まさか……って、ええ！」

驚きに丸くなった目をさらに見開いて、その少女は口に手を当てた。艶のある髪に切れ長の目、やや怖いくらいの印象まである美貌の持ち主だが、その表情はいきすぎなほど素直に感情を表に出していた。

――カバン全部忘れて〝忘れ物？　まさか〟もあるまいに。

阿九斗は驚く。冷徹な美少女という印象の少女であるのに、彼女には相当にとぼけたところがあるらしい。

「お婆様、そちらの方は？」

と、阿九斗の顔を見た少女が、さっと顔を赤くして、咳払いをした。

「いえね。重いカバンを持ってくれたんだよ。いまどき珍しい子だよ。同じ学校らしいから、面倒を見てあげ。いや、お前が見られるほうかねぇ」

子供みたいにお婆さんは笑った。

「馬鹿っ、お婆様！」

からかわれた子がするような反射的な言葉を返した少女だったが、阿九斗の視線に気づくとすぐに顔を引き締めて咳払いをした。

「ごほん……学校の……見かけない顔というと編入生だな。よろしく、A組のクラス委員をやっている服部絢子だ。お婆様がお世話になった。礼を言う」

絢子は、侍めいたたたずまいで一礼した。先ほどまでとは違って、外見通りクールな印象がある振る舞いだった。

「礼なんてそんな」

阿九斗はあわてて否定した。

「まぁ、この子ったら気張っちゃって。それでは帰りますよ」

お婆さんは阿九斗に頭を下げて階段を下りていった。

絢子と阿九斗は飛行バス停留所に残された。

微妙に気まずい時間が流れるが、先に絢子が口を開いた。

「……高校からの編入生とは珍しい」

「僕と同時に入る人が何人かいるとは聞いているけど。ここは一貫教育が基本だから事情がないと編入は認められないらしいね」

「ああ。帰国子女や海外研修生でないと滅多に認められないな。国はどこだ？」

「いや、奨学生なんだ。試験でね」

「ほう」

感心したように絢子は言う。

「試験は年に合格者ゼロ人ということもあると聞いている。優秀なのだな」

阿九斗は照れて頬をゆるめた。

「ありがとう。失礼でなかったらいいのだけれど、服部さんはやっぱり国家魔術師に？」

「うむ。やはり家のために、そして国防のために尽（つ）くさなくてはならないからな」
　絢子の顔からはドジな印象は今はまるで消えていた。まさに有能な委員長であり、スハラ信者特有の頑固（がんこ）、高潔というイメージそのままの姿がそこにある。
　――同じクラスだといいな。
　そんな風に阿九斗は思った。これまで自分と対等の友人を持ったことがなかった。国のことを考えて魔術師になろうなんて者は、彼の田舎にはいなかったのだから、それは一概（いちがい）に阿九斗だけのせいではなかったのだが、ともかく、この学園には彼と同じような志の者が集まっていることは絢子の姿を見ればわかる。これからの生活に阿九斗はときめくものがあった。
　飛行バスがやってきた。乗客は阿九斗ら二人だけだった。中央のボックス席に向かい合って座る。
「編入生は他にはいないのかい？　僕一人じゃないはずじゃあ？」
「留学生たちはもう少し早くに学園に到着（とうちゃく）しているはずだ。君とは身体測定からの合流だろう」
「そうだったのか。……あ」
　阿九斗は窓の向こうの光景に声をあげた。
　飛行バスが飛び上がり、眼下に帝都（ていと）を、遥（はる）かに『コンスタン魔術（まじゅつ）学院』の全景が見渡（みわた）せたからだ。
　学園は広大な森の中にいくつかの建物が点在している構造で、特に壮麗（そうれい）な尖塔（せんとう）を二つ持つ本校舎は白く輝（かがや）いていた。

「説明するまでもないとは思うが、学園は百年前の魔王との大戦時の要塞を生かして作られている。旧校舎はそのまま要塞だし、地下の全長数十キロに及ぶ通路もそのまま生きている。今は地下迷宮のようになっているがな。失踪者も出るくらいだから注意したまえ」

「注意するよ。とはいえ危険なところに行く必要のない生活を送るつもりだしね。勉強をしに行くのだから。僕は世界を良い方向に変革するつもりだし、そのために最高の場所で勉強したいんだ」

「世界を変革する？」

　絢子は興味ありげに目を光らせた。

「つまりは社会をデザインできる大司祭になるってことさ」

　阿九斗が言うと、ほう、と絢子は感心のため息をついた。

「言い切った人間をはじめて見た。神にそむく行いはすべて神が見ているとはいえ、誰もそれによって罰則は受けない。ただ、そう、大司祭となると……どの宗派であれ厳密に禁忌を破ることは許されない」

「知ってるさ」

　こともなげに阿九斗が答えたので、目を見開いて絢子が阿九斗の顔を見返した。阿九斗の表情が冗談を言っているのでないことを見て取ったか、絢子は大きくうなずいた。

「ゴミを路上に捨てることすら大司祭になるための障害になるのだそうだ。大変な覚悟だぞ。どの信者か知らぬが、本当にそれを目指しているのであれば、私は君に協力しよう」

「協力してくれるならありがたいな。学園生活では何かと困ったこともありそうだ」

――価値観が似ている相手とは初対面でも妙に気が合うということがあるらしいな。男女でもそうなのか。

阿九斗は握手の手を差し伸べた。すると、絢子はそれを拒否するように手を立てたが、微笑んで制服の内側から小刀を抜き出した。



「私たちの宗派では対等の友情を結ぶちょっとした儀式がある。小刀をともに握り、鍔を鳴らすのだ」
「良い習慣だね」
「そうかな？　裏切ったら斬られても仕方なしと確認し合う意味だ」
「僕は、そういう緊張感も好きだな」
　阿九斗と絢子は手を取り合って小刀を握った。絢子がもう片方の手で柄を握り上下させると、鍔が乾いた音を立てた。
「最も軽い友情の印だが、男では君がはじめてだ」
　絢子が言った。
「光栄だね。僕も君のような人に会ったのははじめてだ。どこか高貴なものを感じる」
　阿九斗は本心からそう答えた。
「そう褒められると照れる。昨今、真面目な生徒も減っていて、正義や他人のためというと笑う者も多いから、そうでない我々は通じ合うものがあったということだろう」
「学園に不真面目な者がいるとはね」
「自由な校風なのでな。それ自体は悪いことではないさ。将来に役立つ体験もできるだろう。だが、地下や森の化け物退治を学園生活に必要な仕事と正当化したり、実験と称して魔術を遊戯に使う生徒もいるということだ。私も含め、各クラス委員は大変だ。寮での管理の仕事もある。長期休暇の際にしか気が休まるときがない」

疲(つか)れたように言う絢子に阿九斗は意地悪な笑みを見せた。

「それで忘れ物を？」

「馬鹿(ばか)っ、からかうな」

絢子は顔を赤くして、ぴしゃりと言った。が、不意にもじもじして、上目遣(うわめづか)いで阿九斗を見た。

「その……。学校の皆(みな)には……秘密……だぞ。私は厳しい委員長で通っているのだ」

「もちろん裏切ったりしないさ」

飛行バスは本校舎の屋上に滑(すべ)り込んだ。

バスを降りると、芝(しば)の感触(かんしょく)が足に触(ふ)れた。広大な屋上は一面が緑で、バスの発着所の他に運動場と休憩所(きゅうけいじょ)を兼(か)ねているらしかった。屋上広場の端(はし)に校舎へ降りる入り口が見えた。鳥と桜の意匠(いしょう)の大きな門だ。

「飛んで屋上から入る者も多いからな。こちらにも正門がある」

絢子が門を指し示した。

「誰もいないから私が言おう。ようこそ『コンスタン魔術(まじゅつ)学院』へ」

○

風が吹き抜ける中を歩いて校内へと入った。石造りの階段が靴音を高く反響させ、阿九斗の心は躍った。

「君は保健室に行くことになっているのだろう？　私は教室に行くのでここでお別れだ。もし配属されたクラスが違っても、明日にでも連絡してくれ」

絢子はそう言って内ポケットから生徒手帳を出した。

「生徒手帳がもらえたら、最後のページを開くとマナ通信のコンソールを出すことができる。念話にはコツがいるが、すぐに憶えるさ。私の名を検索してくれ」

開いた生徒手帳の最後のページは当初は黒一色だったが、絢子が指でなでると光る文字が浮かんできた。その文字を指で弾くようにすると通信相手のリストが浮かび上がった。

「慣れると操作も念じるだけでできるようになるが、道具を媒介にしないとマナをかき回してしまうから念話を盗み聞きされることはある。注意してくれ。では、後で」

簡単に説明をして絢子は階段を下りていった。

——恋というのとは違うのだろうけれど、彼女のことは気持ちの良い人だと感じるな。これまでの苦労が報われた気分だ。僕の言葉が通じたような気がするのもはじめてだし、対等の友情が結べたのもはじめてだ。やっと僕にも風が吹いてきたに違いない。

阿九斗はそんな風に考えながら、編入生用の順路に沿って廊下を行き、やがて十数人が固まっている保健室前に到着した。

「紗伊阿九斗くんね」
阿九斗の姿を認めて声をあげたのは、十数人の中央にいたスーツの上に白衣を羽織った女性だった。大きな丸い眼鏡に阿九斗のデータを投影し、手元のメモにペンでチェックを入れている。
「時間通りね。これで編入生は全員揃ったことになるわ。わたしは鳥井美津子。校医をしています。教師でもあるから、今後授業をすることになる人もいるかもね。そうでない人は体調が悪かったら会うことになるわ。あら、そうなると、なるべく会わない方がいいってことかしらね？」
背が高くて癖っ毛の美津子先生は、そう言って笑うと無邪気な印象があった。気さくで物事にこだわらない風に見える。
「とはいっても、この学校だと大怪我は多くてね。すぐにわかると思うけれど、外に比べたらここは冒険の地としか言いようがないかもね。勉強のためというより、魔術研究のために、この世のわけのわからないものを詰め込んだようなところだから。みんなも冒険したくなるときもあるだろうけれど、治癒だって大変なんだから、無茶はしないようによろしくお願いするわ」
美津子先生は保健室の扉を開け、中に全員を迎え入れた。
阿九斗の他は外国人ばかりだった。肌の色が阿九斗たちに近いところを見ると大陸中央からの者が多いようだ。他は黒い肌のものも、金髪碧眼のものもいる。学園全体では外国人の数は十五パーセントほどになると阿九斗は以前にもらった資料で読んだことがあった。

保健室は、阿九斗がかつて通っていた中学のそれよりもかなり大きい。体育館ほどのスペースがいくつものブースで区切られ、ベッドが並んでいる部屋、手術が行われる部屋などに区切られている。現在も他の校医により治療中の者もいるようだ。痛みにうめいている者もいるようだが、美津子先生は、そんな彼らの様子を横目に説明をはじめた。

「死亡者は過去に数えるほどにも出ていないんだから大丈夫よ。さて、身体測定だけど、呼んだ順からあの椅子に座って」

美津子先生が指し示したのは、部屋の隅に置いてある大きめの木製の椅子だった。標準体型の人間ならすっぽりとはまってしまうほどに背もたれと肘掛けが高い。その椅子の脇には、やはり背の高い筒状のガラスの器が置いてある。そのガラス筒はぼんやりと発光していた。

「あれには人工精霊が入っていて、健康状態をチェックしてくれるわ。すぐに済むし痛みはないから。だけど、それより大事なのは、将来の職業を精霊は予知してくれるわ」

阿九斗もそうだったが、留学生たちも不思議そうな顔をした。

美津子先生は自慢げに鼻を鳴らした。

「これぞ帝国の魔術技術の結晶よ。みんなの性格やこれまでの生活態度、知力や体力を総合して、どんな職業につくべきか判定してくれるの。この学校に来るからには、みんなは国にとって重要な職業につくことを希望していると思うけれど、そんな中でもどのポジションにつくべきかがわかるってわけね。占いじゃないわ。性格や能力からどの職業につくべきかのアドバイスみたいなものね。ちなみに予測通りの職業に就かな

かった人はこれまで一人もいないの。緊張する？　でも大丈夫。この学校に来れたってだけで優秀だし、基本的には希望の職業に就けているもの、みんな」

美津子先生が言うと、留学生たちも安心したようだった。

――そうか、この学校に入った時点で公務についたようなものなんだな。

阿九斗はそう納得した。

「じゃあ、はじめるわ」

美津子先生が最初の生徒の名前を呼んだ。

緊張した面持ちの彼が椅子に座ると、ガラス筒の中にカラスのような黒い鳥の姿が浮かんだ。鳥が口を開くと、落ち着いた男性の声が響く。

「ようこそ。私は人工精霊ヤタガラス。契約により皆の個人情報を取得し、将来のアドバイスを行う。編入番号００１ヨウ・ランリー。健康異常なし。将来の職業……軍人」

軍人と言われた彼の顔が輝いた。志望と一致したのだろう。

それから順番に留学生たちはヤタガラスからの診断を受け続けた。誰も不満そうな顔をする者はいなかった。医師、外交官、技師……　それらは社会的に要職と考えられている職業ばかりであったし、それに憧れて留学してきた者である。まさに未来を約束されたがごとき宣言に等しいのであるから、彼らの表情は一様に明るかった。

いよいよ阿九斗の名が呼ばれた。椅子に腰掛（こしか）け、ガラス筒の中を見た。人工精霊ヤタガラスは、阿九斗の顔を見て口を開いた。

「編入番号０２１紗伊阿九斗。健康異常なし。将来の職業……」

阿九斗の周囲の留学生たちが興味津々（きょうみしんしん）の視線を阿九斗に向けていた。これから学友になる者がどのような職に就くと診断されるのかは興味を惹（ひ）くものだし、阿九斗はこの中では唯一（ゆいいつ）の帝国臣民の編入生である。皆、ヤタガラスの言葉を期待して待っていた。

ヤタガラスの言葉はこれまでと変わらぬ調子だったが、皆には予想外に重々しく響いた。

その言葉は、これまでにない異様なものだったからだ。

「魔王（まおう）」

疑問符（ぎもんふ）が周囲の全員の顔に浮かんでいた。

阿九斗も例外ではない。何を言われたかわからずに、椅子に座ったまま動けずにいた。

美津子先生がヤタガラスに不審（ふしん）の目を向けた。

「なんと言ったの？」

「将来の職業、魔王」

ヤタガラスはもう一度言った。人工精霊であるから、特に感情は言葉に込められていない。一方、慌（あわ）てたのは美津子先生だった。立ち上がってガラス筒に歩み寄る。

「もう一度お願い」

「魔王だ。魔物（まもの）の王の俗称（ぞくしょう）。職業においての魔王とは、この場合は社会に対する最も強力な破壊者（はかいしゃ）という意味だ」

「は……はぁ？」

　ヤタガラスの冷静な言葉で、はじめて阿九斗は自分が何を言われたか理解した。

　さすがに冗談（じょうだん）としか思えない。

「あ、あなたは座ってて。もう一度、もう一度診断して」

　美津子先生は阿九斗を制しておいて、ヤタガラスに迫（せま）った。

「診断は正確だ。彼は、魔王になる。素質から言っても、能力から言っても」

　人工精霊は慌てない。美津子先生は右手の親指を右の耳に入れた。魔術師（まじゅつし）がする念話である。声は出していなかったが、美津子先生がこのシステムの専門家と連絡（れんらく）をとっているのであろうことは阿九斗にも理解できた。

　しばらく後、美津子先生が指を耳から外した。

「た、多分、再検査になるけれど、大丈夫、安心して。再検査すれば、普通（ふつう）の結果が出るわよ。み、みんなも心配しないで。今日はこれで解散。明日の始業式、遅（おく）れないでね」

　美津子先生は留学生たちを追い出した。とはいえ、留学生達はこの事態にざわめいている。後に残された阿九斗は、これはまずいことになった、と強い不安に襲（おそ）われた。

――これでは噂が広まるに決まっている。非常にまずい。どうなってるんだ？　悪い冗談に違いない。ヤタガラスがおかしくなっただけのことじゃないのか？　いや、それでも噂だけは広まるだろう。ナントカしないと……。

　そんな考えがぐるぐると頭を回る。

　と、美津子先生が硬直した表情を阿九斗に向けた。

「とりあえず、学長には連絡は入れたわ。連絡があるまで、わたしの執務室にいて」

○

　阿九斗としては悪い夢だと思う他はなかった。だが、保健室の並びにある美津子先生の執務室に座って気まずい時間を過ごしていると、やがて入ってきた連絡はまたもとんでもないものだった。

　デスクの上にマナのスクリーンがいきなり開き、そこに浮かび上がったのは、白い髭に覆われた老人の姿だった。樹齢千年以上の老木から白い毛玉が生えたとしか思えぬ外見で、もはや年齢がいくつかもわからない。その老人は、気さくな声でいきなりこう言ったのだった。

「どうやら、君は魔王になるらしいの」

「え？」

　阿九斗は相手が学長であるということも忘れてぶしつけに聞き返していた。

「魔王になるらしいんじゃよ。魔王。百年前に戦争を起こしたあれじゃな。いやー、あれんときは大変じゃった」

　カカカ、と枯(か)れた声で学長は笑った。

「事情を知っているなら教えてください。魔王って何なのですか？」

「世界を崩壊(ほうかい)させることを目的として反乱する男じゃな」

　こともなげに学長は言った。

「それは……職業ではないでしょう？　どうして僕がそれになると言われなくてはならないんですか？　それにわかっているなら、対策があったはずでしょう」

　必死になって阿九斗は食い下がるが、学長はもう一度枯れた笑い声を漏(も)らした。

「それこそ百年前の教訓でな。魔術(まじゅつ)の発達により人の運命がわかったときに対策を取るかどうかが問題になった際、わしらは取らないことを決めた。いや、正確には誰かに害を為(な)す人間も生かしておくことに決めた。監視(かんし)はするが、その後のことは自由意志に任せたのじゃ。犯罪を起こすまではな。だから君は将来的に大犯罪者になるであろうし、戦争の原因になるかもしれんし、周囲の人間を虐殺(ぎゃくさつ)するようになるかもしれんが、そうなるまでは君はここの生徒じゃし、誰もがそうならんように努力すべきだとは思うが、結果がどうなるかは誰にもわからんのじゃな」

　外見とは似合わぬ多弁である。が、陽気な口調ではあるものの、その内容は重い。おそらくは他人に危害を加える人間になるだろうが、実際にそうなるまでは何もやりようがないと言っているだけなのだ。

「そんな……」
阿九斗としても絶句するしかないが、理屈ではどうしてそうなるのかは理解できる。というか、自分のことでなければそれで納得していただろう。
「性格も能力も君は魔王にぴったりというわけじゃな。ただ、これからトラブルはそれなりにあるじゃろう」
学長が面白そうに言うそのトラブルという言葉が阿九斗には気になった。
「トラブルというのは……？」
「うちの生徒には血の気が多いのが多くてな。まぁ、いきなり襲われるとか、そういうこととか」
「冗談じゃないですよ」
阿九斗はぞっとする。しかも生徒たちは魔法で襲ってくるに決まっているわけだ。
そんな阿九斗の表情を見て、学長も思うところがあったらしい。
「そうじゃな。うむ、君が望むなら学園生活において君には護衛をつけるように政府に上申しよう」
「護衛？」
「護衛じゃが、監視員でもある。学生となって君のそばにいるようになる。あくまで君が希望すれば、じゃが」
――なるほど、そりゃそういう風になるよな……。でも、それじゃ四六時中監視されているってことに……。

「希望しない場合は？」
「学園として最大限の努力はするが、普通（ふつう）の学園生活は送れまいな」
「脅（おど）されているような気がしますが……」
「そうとるのならば、しばらくは君の希望通りにしてみるがええじゃろう。必要になったらその時に言ってくれればええ」
「そうしてみます」
阿九斗は答えた。
スクリーンが消えると、美津子先生が阿九斗を見据（みす）えて腰（こし）に手を当ててため息をついた。
「どうして君が魔王になると判断されたかのデータをヤタガラスからもらったのだけど、データが膨大（ぼうだい）すぎて人工精霊（せいれい）しか処理できない感じなのよね。それももしかしたら正確なデータじゃないかもしれないし……」
美津子先生がいきなり阿九斗の手を握（にぎ）った。
阿九斗はどきりとした。美津子先生の眼鏡の向こうの目が真剣（しんけん）だったからだ。
――そうか、心配してくれているんだな。
そう感動していると、美津子先生が真摯（しんし）な声でこう続けた。

「これから苦しいこともきっとあるわ。もう噂になっているでしょうから、あなたは特別な存在として注目されることになるでしょう。嫌がらせとかもきっとあるでしょう。それはもう死にたくなるような厳しいいじめもあるかもしれないし、正義感に燃えた生徒が暗殺を仕掛けてくることもあるかもしれないわ！　何しろ魔王になる者なんだから、殺してもかまわないと考えてもおかしくないわ。でも、直接に殺したら犯罪ですものね、そうよ、それはもう神様でも判断に困るような巧妙な殺人が行われるに違いないわ。あなたが死んでもかまわないという前提のつらい冒険をあなたに課すとか、あなたの持ち物を隠したり、あなたの恥ずかしい写真をとって世界に広めたりして自殺を促したり……」

　熱のこもった口調は段々と妙な方向に向かっている。美津子先生の目も凄まじい熱を帯びてきている。

「あの……どうしてそんなに殺されるとか自殺とかに話を……」

「大丈夫！　死んだらすぐに死霊術を使って死霊化してあげるから！　そうなるとあなたの人格は写像にすぎないものになるとしても、あなたのデータは後世に残るもの！　魔王になるべくして生まれた者のデータを完全解析するなんて、研究者としては素敵なことじゃないかしら？　ああ、もちろん死なないとデータが日々変動して困るとか、そんなことは微塵も考えていないし、死んで欲しいなんてまさかそんなこと考えてもいないから。だから大丈夫！　死にたくなったら相談してね！」

　――ここまで熱心なのも困りものだ……。

　美津子先生はかなり裏表のない性格なのだろう、と阿九斗は思った。しかし、どうやら苦難はどこまでも続くとしか思えなかった。現状ではいかにも味方に乏しいということになりそうだ。

なにやら未練がありそうな美津子先生を振り切り、幸いなことに誰もいなかった本校舎を出て、編入時にもらった書類の指示通りに学生寮へ向かう。

学生寮は本校舎に引けを取らぬ大きな建物であり、まるでひとつの城のように見える。もちろん過去には実際に城塞だったわけだから、騎士たちの駐留施設をそのまま宿舎にしたというわけだ。全寮制であるから、生徒のほぼすべてが寮にいることになる。城は東と西に別れており、それぞれ男子寮、女子寮だ。門より中に入ると、すぐ横に寮母さんの部屋があり、受付の窓口が用意されていた。どうやらまだ噂は広まっていないのか、かなり歳のいった寮母さんから部屋の鍵をもらって説明を受けただけで、誰にも会わずに個室に逃げ込むことができた。編入生であるから、一階の一番端の部屋だったのである。

ベッドと机とクローゼット、高い位置に収納スペースがあるだけの簡素な部屋だが、暮らすのに不自由はないだろう。机の上には生徒手帳と畳んだ制服が置かれていた。

ベッドに腰掛け、ため息をつく。

「魔王ね……」

まだ信じられなかった。魔王という言葉のイメージとは裏腹に、それが実在の人物であり、社会を転覆しようとした極悪人であることは、いわば常識のようなものだった。正体は不明だが、魔物を率いて戦争を仕掛けてきた凶暴な魔術師、とは政府の発表である。

魔物は現在でも存在は確認されているが、人間に率いられる程度の知能があるものがいるとはとても思えず、その当時の魔物がどんな生き物だったのかは阿九斗もほとんど知らない。ただおとぎ話的に悪魔

のような存在がいたとだけ聞いている。その件があって以降、学長の言うとおりに社会の〝何か〟が変わったのだそうだが、なにぶん百年も前のことであるから、実感としては何もない。

　とはいえ魔王の印象が薄（うす）れたり多様化しているということは絶対にあるまい。とくにこの学園においては、生徒達は魔術（まじゅつ）を学びに来ているのだから、悪の魔術の象徴（しょうちょう）ともいえる魔王については複雑な思いがあるはずだ。

　となると美津子先生の指摘（してき）も、彼女がデータを欲しがっていたからだけではなく、現実的なことではあるのだろう。いじめられるというよりは、恐（おそ）れられ、敵対されるという形で表現されるに違いない。

――しかし、僕は昔から善をなそうとしているのだし、事実、自己意識として悪いことをしたことはない。となると、やはり魔王となるはずもないのだし、きちんと行動すればみんなもわかってくれるはずだ。そうすると、やはり最初の印象が大事だろう。昔のクラスメイトでも人気のあった奴（やつ）は気さくな冗談（じょうだん）や軽い会話が得意だった。挨拶（あいさつ）次第では、そんな挨拶をする魔王がいるはずがない、と思ってもらえるだろう。

　阿九斗はシミュレーションを開始した。

――はじめまして。みんなも噂に聞いていると思うけど、将来は魔王になるって言われたんだ。だけど、むしろ魔王って言うよりはマゾになりたいって言うか……。

――駄目（だめ）だ……。

——馬鹿にもほどがある……というか、僕にはこういう冗談は向いていない……。そもそも、真面目が過ぎるのが僕だ……。高校からはじけようとしてもそれは無理なんだ……。

——では、どうしたらいい？　それなら真面目を活かすしかあるまい。心情を吐露し、学園のために積極的に働くことにしよう。そうだ、清掃委員にでも立候補すればいいのではないだろうか？　そんな面倒な仕事はどこでも嫌がられるものだ。真面目にすれば先生の覚えも良いだろう……。

脳内で一人会話を終え、安心した阿九斗だった。と、寮内に放送がかかる。

《食事の時間です。食堂に集合してください》

食堂に入った阿九斗だったが、どうやらこの短時間に思っていたよりも事態は早く、しかも微妙な方向に推移していることがすぐに理解できた。食堂は長テーブルがみっつあり、二百人は座れるほどの広さであったが、集まってきたたくさんの生徒達は、その誰もが牽制し合うように見慣れぬ生徒——つまり編入生——の姿を探していた。どこでも新人が入ってくる環境ではそういうものだ、といえるような雰囲気ではない。喩えて言うなら、殺人が起きた雪山の洋館で誰が犯人かわからないといった空気である。

——これは、まずい……。

阿九斗は平静を装って食堂のテーブルの端に座った。洋館の殺人事件と違うのは、あの場にいた留学生は誰が魔王になる者かを知っているということだ。段々と寮生達も留学生たちの視線で誰がそれなのか気づきはじめたらしい。

「荒くれ者には見えないが……」

「いや、知性派の方が残忍だろう……」
「切れ者には見えるな……」
　ひそひそと話す声は阿九斗にも聞こえてきた。これは阿九斗にとってはショックであり、我慢ならないことであった。しかし、そこで落ち込むような性格を彼はしていなかった。全員が着席したのを見てから、テーブルを叩いて立ち上がったのだった。
「これから同級生になる皆さん、そして先輩方、自己紹介させていただきたい。僕は紗伊阿九斗。噂の通りヤタガラスより魔王になる適正ありと診断された編入生です！」
　いきなりのことに加え、その噂を全肯定する内容に食堂に集まった寮生一同はざわめいた。阿九斗は声を張り上げていたが、広い食堂のことであるから声は遠くまでは届きにくい。と、阿九斗の近くに座っていた利発そうな、しかし、いかにも悪ガキといった印象の少年が、素早く右手をあげて「スピーカー！」と呼ばわった。するとカメラに羽の生えたような人工生物が食堂の入り口から飛んできて阿九斗の頭上に静止した。
　その人工生物が顔――羽根の方向からしてそうだろうと阿九斗は思った――を阿九斗に向けた。そこにはカメラのレンズ状のものが見える。一方、尻の方にも同様のレンズ状の装置が付いており、それが光ると阿九斗の姿が食堂の天井近くに大写しになった。
　阿九斗がその悪ガキっぽい生徒の方を見ると、彼はにやりとして親指を立てた。

「僕は確かに魔王になると予言されたようなものです。かの適正診断というのは外れたことがないらしい！」

　阿九斗が話を続けると、音声も増幅されて食堂に響いた。

――後先を考えなかったかもしれないぞ……。

　少し後悔したが、こうなってはもう遅い。ここで話をうやむやにしてしまう方が後の印象が悪いだろう。それに言いたいことは言ってしまわないと収まりが悪いのが彼の性格なのである。ままよ、と阿九斗は話を続ける。

「しかしながら、僕はその検査そのものに疑問を呈したい。人の運命は決められているものなのでしょうか？　ただ予言を聞いた後で自分の進路を決めてしまっているのではないでしょうか？　確かに人の性格とこれまでの人生を神が見ており、そのデータからの判断でなされる予言です。だが人間の可能性はきっとひとつではない！　その先入観から逃れることが必要なのではないでしょうか？　そうでなければ我々の世界に進歩などありえません！」

　準備無しではじめた演説にしては整っている、と聴衆達も感じはじめたのか、当初はヤジも飛んでいたものの、段々と食堂は静まりかえって阿九斗の言葉に耳を傾けはじめていた。さらに阿九斗は声を張り上げる。

「僕に向けられる好奇の目は受け入れましょう。しかしながら、誰一人真相を確かめようとしなかったことをこそ、つまり僕に直接に話を聞く者がいなかったことをこそ、僕は糾弾したい！　それは内なる恐怖

心に負けた結果ではないのですか？　本当に魔王となるべき者だったらどうするのか？　それと関係を持つことは不都合になるのではないか？　まだ確かめもせぬうちから避けることは、一方的な差別に繋がるでしょう！　その恐怖心こそ恥じ入るべきです。市民たちの中には魔術を学ぶ者は優性種だという思いを抱いている人々がいる。それは人間の優劣を決定するものではないはずなのに。だが、あなたが自分をエリートだと思いこんでいる限り、その過ちは続くでしょう！　まして、職業適性検査のごときものが横行している限りは……！」

阿九斗は勢いでそう口走ってしまってから、内心で「あれ……？」と思いはじめていた。

——これって、学園の制度そのものを、国の魔術政策そのものを非難していないか？

生徒達も、さすがに一流の学園に入学した者達だけあって、そこに気づかぬ者がいないはずがなかった。中には過去の魔王の資料にある程度触れたことがある者もいるらしく、「あれって百年前の戦争時の魔王の宣戦布告文にそっくりじゃないか？」などとささやきあっている。

——な、なんてことだ……！

勢いに任せたとはいえ正直な気持ちを述べたまでである。それがこんな結果になるとは思ってもみなかった。さらには即興で言葉がすらすら出てきたことも悪影響をもたらしていた。「台本無しでの演説にしちゃ見事すぎる」「一瞬、心が動いて彼が正しいと思ったが……それが体制批判となると危険すぎる」「魔王の才能……」「魔王の再来……」。そんなざわめきが阿九斗にもはっきりと聞こえてきた。

――危険だ。きわめて僕は危険な状態にある……。いつもこうだ。僕は思うままに正義を成し遂げようというだけなのに、どうしてなのか……。

阿九斗は悔やんでいるが、それが彼の無駄に切れ者に見える美形ぶりと、理屈っぽい性格と根拠のない自信から生まれる説得力のなせる技なのだとは本人も気づいていない。さらには密かにええかっこしいであるところも手伝って、この期に及んでまだ演説をやめるということには考えが及ばないのであった。

「確かに体制は批判した。だが、それは破壊を志向してのことではない！　僕は内部から体制を変えるためにこの学園に入ったのだ！　僕はそれをもって僕が魔王にならない証明としたい！　協力者は申し出て欲しい！　敵対者がいたとしても、僕はこれと対立するものではない。ただ話し合い、共存しさえすれば、やがて結論は出るはずだからだ！」

いつのまにか敬語も完全に消えて、完全に独裁者の演説のそれになっていた。阿九斗は手を振りかざし、髪を振り乱して熱弁していた。聞いていた生徒達の中にも、一瞬、魅入られていた者までいたようで、言葉が途切れた瞬間に、あわてて自分を正気に戻すように首を振ったり、頬を叩いたりしていた。

しかし、インパクトを受けた者ほど、その言葉の意味も深く心に刻みつけたわけで、より正確に阿九斗の演説を解釈すると、こういうことになる。

これから魔王になるかどうかはわからないが自分の考えをひろめるために学園内の秩序に自分が中心となって挑戦していくつもりだ

もちろん、結果的にそんなことを言ってしまったことは阿九斗本人も理解してた。
――これで僕はこれからこの学園でやっていけるのか……？　だが、ここで気弱になってはさらに最悪なことになる……。
「僕のいいたいことは以上です。お騒がせして申し訳なかった。食事をはじめましょう」
阿九斗は精一杯穏やかに言った。だが、その仕草は周囲の者には悪徳貴族の余裕ある態度と映っていた。
「編入生……しかも一年生であの態度……」
「ただ者じゃないんじゃないか、やっぱり……」
「どうするんだ？　学園内を分ける争いになるかもしれないぞ……」
「あいつの陣営に付く奴がいるってか？　まさか……」
「いや、彼に魔法の才能があればあるいは……」
食堂のざわめきは収まる気配がなかった。注目の対象である阿九斗自身は不安を抱きながらも精一杯背筋を伸ばしてマナー通りに食事を続けるしかなかった。もちろん何を食べたか、どんな味だったかはまるで憶えていなかった。

○

翌朝。
ほとんど眠れぬ夜を過ごした阿九斗だった。朝食は奇妙なほど静かで緊張したものになったが、とにもかくにもやり過ごし、始業式前のクラスごとのホームルームへと足を運んだ。五分前に教室に入った阿九斗だったが、彼が扉から中に入るなり、女子たちの好奇の目線が彼に集中した。
——そうか、女子もいるんだった……。
噂は当然ながら女子にも流れている。もしかしたら、あの『スピーカー』の映像も女子寮に流出していたかもしれない。いや、阿九斗の顔を彼女らがすぐに認識したのだからそうだろう。
——ここは余裕で笑い返さないと……。
「おはよう」
阿九斗は言った。
嬌声とも嫌悪ともつかない声がひとしきりあがった。実際、好感を抱いていた者と嫌悪感を抱いていた者と半々といったところか。
しかし、阿九斗の目は一人の女子生徒に釘付けになった。艶のある髪に切れ長の瞳の一際目立つ美形の少女——絢子だった。今になって阿九斗は自分がどのクラスに配属されたかを思い出す。
——A組だ……。彼女に連絡するって約束してたのも忘れていた……。

絢子は阿九斗とは意図的に目を合わせようとはしていないらしかった。クラスの生徒の誰も絢子に阿九斗のことを質問している様子がないということは、絢子は阿九斗とのことをクラスの者には秘密にしているらしい。

――まいったな……。

阿九斗は絢子に迷惑（めいわく）をかけぬように素知らぬふりをするしかなかった。誰とも目を合わせずに、用意されていた一番後ろの席に着いたとき、教室の前のドアが開いた。入ってきたのは美津子先生だった。

「はい。それじゃ席について。今年も担任はわたし、鳥井美津子です。よろしく。といっても、大半は中学のときと同じね。出席は適当にやります。欠席は……あら、また曽我（そが）さんは来てないのね。毎度のことだけど、どっかで寝（ね）てるのかしらねー。誰か呼んでおいて」

美津子先生は適当な口調で言うと、出席簿（しゅっせきぼ）を閉じて絢子の方を見た。

「出席の後は、本来ならクラス委員を決めなきゃいけないんだけど、だいたい顔ぶれも同じだし、服部絢子さんにお願いしちゃっていいわよね……」

と、美津子先生が確認し、絢子がうなずこうとしたとき、いきなり声が割り込んできた。

「先生！　無選挙でのクラス委員選出は学園の独裁を招き、進歩を阻害（そがい）するものです！」

阿九斗はその声に嫌（いや）な予感をおぼえる。まさに自分の口調をコピーしたかのような物言いだ。声の方向を見ると予感は的中した。『スピーカー』を呼んだあの男子生徒が、斜（なな）め前（まえ）の席で、悪ガキの表情で阿九斗に親指を立てていた。

「僕は紗伊阿九斗君をクラス委員に推薦します！　みんなも彼の演説を聴いたと思うけれど、彼が魔王にならないことを証明する近道は、クラス委員になってみんなの役に立つことだと思うんです！」
　クラスがざわめく。
「はい、静かにー」
　美津子先生は手を叩いた。
　阿九斗は思わず絢子の方を見た。絢子は目をそらしたが、一瞬だけその表情は伺えた。怒りというよりは、底知れぬ屈辱を与えられ、それに必死に耐えている顔だった。
――スハラ信者は役職に誇りを感じているし、それ以上に信義を重んじるから……。
　阿九斗は慌てた。もはや何重にも絢子を裏切っている。はじめてできた友達なのに。
「先生、僕の意志は考慮されないのですか？　僕は辞退します。その……代わりに清掃委員にでもなりたいです。あるのならば」
　手を挙げて阿九斗は言った。
　と、それまで気楽だった美津子先生の顔がいきなり硬直した。
　クラスの空気も一変する。それまでも異常な雰囲気ではあったが、阿九斗の発言でまさに空気が氷点下にまで一気に低下したかのようだった。
「ちょ……紗伊君……」

やっとのことで美津子先生が口を開いた。
「知ってて言っているの？」
「はい？」
阿九斗は何がなんだかわからないでいた。どうしてこんなにも教室の空気が緊張したのか想像もできない。
すると、口にするのも汚らわしい、というように美津子先生が告げた。
「清掃委員というのは、他国や魔物との戦争が起こって、学園の機密を守らなければならなくなったとき、学園の機密ごと学園や生徒を〝清掃〟……つまり爆破したり殺害したりする委員のことなの……。戦前や戦後すぐには置かれていたけれど、今は名目だけ存在する忌まわしい委員なの。それを口にするなんて……」
――なんだ、そりゃあ……！
阿九斗はさすがに自らの不運に驚く。知らなかったとはいえ、ピンポイントにそんな単語を引き当ててしまうとは。
「いや、委員にはそれ以外なりたくなかったですし……」
思わず言った言葉で、さらにクラス内が凍り付く。
「いや、そういう意味では……」
と言いかけたが、もはやその言葉は誰にも届かなかった。

　絢子が絶叫（ぜっきょう）に近い叫（さけ）び声（ごえ）をあげて立ち上がったからだ。
「紗伊阿九斗ぉ！　私の心を弄（もてあそ）んだな！」
　髪（かみ）を振（ふ）り乱（みだ）した鬼気（きき）迫（せま）る表情で絢子は阿九斗をにらむ。
　怒（おこ）るのは当然だ、と阿九斗も思ったが……。
　――いかにもその言い方はまずい。
　妙（みょう）に阿九斗は冷静になっていた。その危惧（きぐ）通り、クラスの全員が何かを誤解したかのように阿九斗と絢子の顔を交互（こうご）に見ている。
「私たちの誓（ちか）いは互（たが）いを裏切った時には血を以て報いると言ったはず！」
　絢子が机の脇（わき）から木刀を抜（ぬ）き取（と）った。
　――誓いなんて言われたらクラスの皆に男女の仲だって誤解されるじゃないか……。それは頭が冷えた後になってみれば、服部さんのためにも良くないだろう……。
「誓いというけれど、添（そ）い遂（と）げるとかそういうことではないだろ。男女間のこととはいえ、誰もいないバスの中でした、あくまで仲良しの遊びみたいなものじゃないか」
　阿九斗は言った。
　クラス全員が妙に納得した顔になった。
　――やばい。

その時点でようやく自分の過ちに阿九斗は気づいたが、後の祭りだった。

絢子は全身から真っ赤なオーラを噴き出すほどに逆上し、阿九斗に木刀の切っ先を向けた。木刀は魔法の品――アーティファクト――であるらしく、その木刀がまとっている光はイメージではなくマナの奔流だ。

「な、な、なんたる屈辱か！　貴様に決闘を申し込む！　今、ここでだ！」

絢子はもう一本の木刀を机の横から抜き取った（机の横にさげた袋に大量に確保されているのだ）。柄を阿九斗の方に向けて放る。阿九斗は思わずそれを受け取ってしまったが、どうしていいかわからずに美津子先生の方を見ることしかできなかった。

「彼女スハラ信者でしょう？　信者の決闘は認められているの。校則で」

美津子先生は冷たい表情で言った。どうやら先生も阿九斗を女の敵だと思っている風だった。

「勝った方がクラス委員だ！」

と、阿九斗の後ろの席の悪ガキがわくわくした表情で勝手に宣言する。彼は阿九斗の肩を叩き、阿九斗に尊敬のまなざしを向けて小声で言った。

「あっしは三輪寛。ヒロシと呼んでくれ！　そして、あっしはあんたを兄貴と呼ばせてもらう！　兄貴！あんたはすごいよ！　あっしはここじゃ成績も悪くて不良扱いだけど、兄貴の理想には共鳴したんだ！あっしでもなんとかなるんじゃないかって！」

――大半はこいつのせいなんじゃないか？

阿九斗はそう思ったが、そちらにかまけている余裕(よゆう)はなかった。
「ちぇすとぉおおおお！」
気合いとともに、いきなり絢子の一撃(いちげき)が阿九斗に討ち込まれた。
「うわっ！」
阿九斗は座ったままの姿勢だったが、椅子(いす)ごと後ろに倒(たお)れてなんとかそれをかわす。配達の仕事で鍛(きた)えた身体と反射神経はそれなりのものにはなっていたらしい。
「はい、危ないから離(はな)れて離れて」
美津子先生が皆(みな)に指示して、ぱんぱんと二回手を叩いた。絢子と阿九斗を除くクラスの全員が教室の壁際(かべぎわ)に寄る。美津子先生がさらに手を叩くと、マナのフィールドが絢子と阿九斗を包んだ。先生の魔術(まじゅつ)のようだった。これで暴れても被害(ひがい)が外には及(およ)ばないということらしい。
——これで絶体絶命だ。なんとか状況(じょうきょう)を打開しないと……。ここは服部さんに落ち着いてもらうしか……。
阿九斗は絢子の顔を見やった。目が真っ赤に燃えていて、話を聞いてくれる雰囲気(ふんいき)ではない。
「ちぇえいい！」
二撃目が襲(おそ)ってきた。これは後方に飛び退いて避(さ)ける。
「兄貴頑張(がんば)れ！」

外からヒロシの声援が聞こえてくる。
どうにも阿九斗はうんざりしてきた。
――服部さんを落ち着かせるためには……。
阿九斗は考えた。だが、どうにも単純な手しか浮かんでこなかった。
――こうするしかないか。
「りゃあああ！」
三撃目。絢子が討ってくるのに合わせて、何を思ったか阿九斗は前進した。
振り降ろされる木刀の軌道上に阿九斗の頭が突き出される。頭が砕かれるかと見えた刹那、阿九斗はその身体をひねって木刀をかわし、さらに前進していた。絢子の木刀の鍔下に阿九斗は入り込む。
「何だと！」
驚きに絢子の目から怒りが消える。
クラスの皆の視線が絢子と阿九斗に釘付けになった。
地鳴りのようなどよめきが教室を覆う。
なんと阿九斗は絢子の身体を正面から抱きしめていた。それは二人の容姿と相まって、愛し合っていた二人の長い別離の後の再会の抱擁のように見えた。
「落ち着いて……」
絢子の耳元で阿九斗はささやく。

「あ……！」
くすぐったいのに弱いのか、それともそのものずばりの反応なのか、絢子の腰が砕けるように後ろに反らされた。それを支えるために阿九斗の腕は絢子の腰に回され、さながらキスを迫るかのような格好になる。
「な、何をする……放せ……」
うめくように絢子は言った。
「誤解を解くまでは放せない」
阿九斗は真剣な表情で言った。
「何が誤解だ……。こんなにも……そして今も私を辱めてどうしようと……。なんたる屈辱か……！」
「全部誤解なんだよ。僕は悪意でやってるわけじゃないし、辱めるつもりもない」
「そ、そうなのか……？」
絢子はやや落ち着いてきたのか、阿九斗の言葉に耳を傾ける余裕ができたようだった。
阿九斗もやや安心して絢子に優しく言葉をかける。
「そうだよ。だから、僕と改めてここで関係を結んでくれ。僕も君が気に入ったから関係を結んだわけだし、あのときのこともいい加減な気持ちじゃないから……」
しかし、その言葉は、もちろんクラス全員が聞いていた。
絢子も阿九斗もここでようやく自らの現在の姿勢を客観的に再認識した。

「すげぇ……さすが魔王（まおう）だ……」

「全クラス委員最強と言われるカタブツの服部絢子を破った……というか落とした……」

「落としたというか、すでに落としていた……」

　クラスの皆（みな）が口々につぶやく。

　一瞬（いっしゅん）にして絢子の顔が真っ赤になった。

「だからそれが辱めだと言っているのだ！　どこまで私に屈辱を与（あた）えようと言うのか！」

　絢子は絶叫（ぜっきょう）した。身をよじって阿九斗から離（はな）れ、渾身（こんしん）の一撃（いちげき）を阿九斗に向けて振（ふ）り下ろす。阿九斗はそれをかわすには体勢が十分ではなかった。

「危ない！」

　阿九斗はかわせないと見て取ると、握（にぎ）っていた自らの木刀を振り上げた。かわせないまでも受け止めることはできる。衝撃（しょうげき）に備えて木刀を握った手に思い切り力を込めた。

　……すると！

　ドン！

　阿九斗自身も想像もできなかったような力が、右腕（みぎうで）の中に生まれていた。熱のこもった塊（かたまり）が腕から木刀へと注がれていく感触（かんしょく）があった。

　――いけない！

反射的にそう思ったが、ほとばしるそれは止めることができなかった。熱さが木刀を伝って放出される、と思った瞬間、光が絢子の木刀と阿九斗の木刀の間で爆発していた。

教室の中央が真っ白な光に満たされていく。光の爆発は、美津子先生の張ったマナのフィールドを易々と突き破って外に流れ出た。

「伏せて!」

美津子先生は驚愕の表情で叫んでいた。

爆風と爆音が同時に教室を満たした。

怪我人は奇跡的にゼロ。だが、教室の壁は四方のすべてが吹き飛んでいた。灰と瓦礫にまみれた生徒達の中央で、絢子と阿九斗が呆然と立ちつくしていた。

この事件は瞬く間に全校生徒の知るところとなった。全校生徒が阿九斗に抱くイメージはこれで完全に決定づけられてしまったのだった。

2　おかしな監視員(かんしいん)

「ええと、あなたに落ち度はないわ。決闘(けっとう)を挑まれて、反撃(はんげき)したってことになるわけだから」
　美津子(みつこ)先生は保健室で阿九斗(あくと)を目の前にしてそう告げた。
「僕は反撃したわけではないんですが……」
「形式上の話よ。でないと教室の再建費用があなたに請求(せいきゅう)されるわよ。ええと、実際、何もわかってないでしょ?」
　困ったように美津子先生は言った。阿九斗はその言葉通り、まるで何が起こったかわかっていなかった。
　阿九斗の困惑顔(こんわくがお)に頭をかきながら美津子先生は続ける。
「マナは空間に満ちていて、それを動かすことで効果を生み出す。エネルギーは帝都(ていと)中央の発電設備から地球そのものに流し込まれ、マナはそれに共振(きょうしん)している。だから見かけ上はマナがエネルギーだってことになる……と、ここまでは魔術(まじゅつ)の常識ね」
　そこまでは阿九斗も知っていた。
「だけど、そこから先は、この学園で学ぶことだから、あなたは知らないはず。マナは生物の体内にも蓄積(ちくせき)できて、そこからエネルギーを取り出すことができるわ。純粋(じゅんすい)にカロリーを消費するわけね。そのマナの蓄(ちく)

積量は個人によって違うの。体内のマナが多いと、大気中のマナを使っても大きな効果を出しやすいわ。人間の意志が脳内の電気に伝わり、その電気によって体内のマナが操作され、外のマナが共振する。これが魔術の仕組みよ。魔術が才能の問題なのもそこが原因ね。脳内電気を制御できる強い意志と体内のマナ蓄積量が才能の正体よ。秘匿されている情報じゃないけど、一般人はあまり知らないで過ごしているわね」

「じゃあ、僕があの爆発を？」

「察しが良いわね。あの木刀はマナを集めて硬度を高めるようになっているんだけれど、あなたが集めたマナが大きすぎて、爆発として外に放出されたの」

「それは、つまり、僕が規格外の……武術用の木刀に想定されていなかったくらいのマナを操ったってことですか？」

「そういうこと。ついでに言うと、わたしのフィールドも破られたってことは付け加えておかないと。伊達にここの教職やってないんでね、わたしだって昔は十年に一人の才能と言われたもんよ……生徒に負けるなんてあり得なかったんだけど……ま、仕方ないわ。規格外だもの、あなた」

　美津子先生がへらへらと笑っているのは、彼女の性格のせいばかりではないようだった。本当にあり得ないほどの力を阿九斗が持っているということのようだ。

「誰も怪我をしなかったのも驚異的なことでね。どうやら、あなたがエネルギーの放出を無意識のうちに制御したかららしいんだけれど……」

「次もうまくいくとは限らない、ということですか」

阿九斗は言葉を継いでため息をついた。

「そういうこと。うちの生徒はよく喧嘩するしね……。で、あなたが喧嘩すると、どうなるかってこと」

「喧嘩しません……ってわけにもいきませんね、多分」

阿九斗がそうしたくなくとも、誰かが喧嘩を売ってくるだろう。特に絢子は。阿九斗は気が重くなる。

「無理でしょうね。修行して魔力の制御を覚えるのと平行して、人間としての成長もしてもらわないと……」

美津子先生は阿九斗に返答を期待しているかのように沈黙した。それが何かを察して阿九斗はうなずいた。

「わかりました。監視員を呼んでください」

ため息混じりに言った。学園長が言っていた学生として阿九斗を監視する者。生活を監視されるが、阿九斗を警護する者でもあるらしい。

——こんなはずじゃなかったがなぁ……いろいろと。

阿九斗はため息をついた。

美津子先生が連絡をとってくれたところによると、明日にはもう監視員はやってくるのだそうだ。

「まぁ、こういう言い方もひどいけれど、その人が来るまではおとなしくしてることね。それまでは何かあったらすぐに先生に連絡して」

美津子先生は阿九斗の生徒手帳に連絡先を入力した。
「あと……さ」
突然に目を輝かせて美津子先生は付け加えた。
「やっぱり、死んだらわたしの研究に遺体を提供する契約してくれないかなぁ」
「それは嫌です」

○

やれやれと思いながら寮に帰った阿九斗だったが、寮とて気が休まる場所ではなくなっていた。入るなりヒロシが駆け寄ってきて、靴でも舐める気かというくらいに身を低くして出迎えたのだった。
「ちょ、ちょっと三輪君……」
「いやだなぁ、兄貴！　ヒロシでいいっすよ！」
ヒロシは勝手に阿九斗の露払いを勤め、寮の中に迎え入れる。
「こらぁ！　将来の魔王のお通りだ！」
ヒロシは注目している寮生達を威嚇している。
——こ、こいつをなんとかしないと……。

「おい、やめてくれないか」
　そう言うと、心底驚いた、というようにヒロシが振り向く。
「な、なんでです、兄貴！」
「怖がられてどうするんだよ」
「そ、そうか！　恐怖によって統治するのかと思ったら違うんですね！　さすがだ！　段々と寮生達の心を掌握していくつもりなんですね！」
　――本当にそうだったとしてもみんなの前で言ってどうしようというのだろう……。
「そ、そうじゃない。ともかく、僕のことを特別扱いするのはやめてくれ」
「あくまで他の生徒と同じ条件からはじめてこの学園をしめようと言うんですね！」
　ヒロシの目は輝いている。鼻息も荒い。
　――しめるってなんだろう……。
　阿九斗は疑問に思いつつも、そんなことはおくびにも出さず、「ともかく」とヒロシに向かって語気を強めた。
「僕は普通に暮らそうと思っているんだから、僕には普通に接してくれないと困る。それに、僕はただでさえ目立っているのだし、周囲を威嚇するようなことはやめないと……」
　そう阿九斗が言いかけたとき、いきなり廊下の奥から大声が聞こえてきた。

「今日、校舎を破壊したってのはお前か？」
二人の寮生が阿九斗の方に歩いて来た。その二人を見てヒロシの顔色が変わったのを阿九斗は視界の端に認めた。
――だから余計なことはやめろって言おうとしたんだ……。
二人は大柄で、エリート学園の不良らしく表情にひねくれたところが色濃く出ている。いかにも性格が悪そうに見えるが、表情にひねくれたところがあるのは阿九斗も人後に落ちないわけで、他人のことは言えない。
「お騒がせしたのは申し訳ない。事故でしたが」
阿九斗が言うと、二人は馬鹿にしたような笑い声をあげた。
「〝お騒がせしたのは申し訳ない〟？」
声真似らしき言い方をして、二人は阿九斗の顔を覗き込んだ。
「教室爆発させるくらい、ちょいと気の利いた奴ならできるんだよ。だからいい気になってるんじゃねぇぞ」
――ああ、こういうのが面倒くさいんだ。どうしてそんな風につまらないメンツにこだわるのだろう。なんでこんなに馬鹿な人が生きているんだろう？　自らが呼吸をしていることを恥ずかしいと思ったことがないのだろうか？

阿九斗は本心からそう思う。そして苛立(いらだ)つとつい後先を考えずに格好をつけてしまうのが阿九斗である。

「なら明日から爆発比べでもやってくれ。ただし僕は静かに勉強したいから遠くでやってもらいたいが」

ひるまない阿九斗に少し狼狽(ろうばい)した風の見えた二人だったが、それでも嘲笑(ちょうしょう)混じりの言葉を返してくる。

「静かに勉強したい奴が騒動(そうどう)を起こすってのは、どういうことだ？」

「人気があるんでほっとかれないんだ。お二方もそうだろう？　サインが欲しいってのに素直に言い出せなくって喧嘩(けんか)を売ってくるってタイプが多くてね」

阿九斗の皮肉に二人は顔色を変えた。

「生意気なこと言ってるんじゃねぇぞ。てめぇそんな態度とってると、どうなるかわかってるんだろうな？」

「さてね。二人組なんだから漫才(まんざい)でもしてくれるってのか？」

「てめぇ……！」

二人は気色ばんだが、阿九斗が軽く手を上げると、びくりとして態度を変えた。

「と、ともかく大きな顔するんじゃねぇってことだ」

二人はそう言うといきなりきびすを返して歩き去っていった。

――エリート校でもこんなのが大きな顔をしているのか？　自分が何をしたいのかすらわかっていない態度じゃないか。こんな奴ら誰かに支配されるだけの悲しい人格だ。僕が支配する気になったらどうしよ

うっていうんだこいつらは。

阿九斗はそう考えてから、それが危険な思想であることに自分でも気づいた。現実的な思考に引き戻(もど)してくれたのは、ヒロシの一言だった。

「すげぇや兄貴！」

「だから、やめようって、そういうの……」

「え？　だって上級生ですよ、あの二人？」

「だから、そういうのにこだわることがつまらないことだと思うんだけどね。一年先に生まれただけだろうに。礼儀(れいぎ)は必要だと思うけどさ」

思わずそう言ってから「しまった！」と思ってヒロシの顔を見る。ヒロシの顔は紅潮して阿九斗を尊敬のまなざしで見つめている。

――なるほど……つまり僕は同じ年齢(ねんれい)の学生を責任感や社会性がないと心底から軽蔑(けいべつ)していて、その態度が表に出たとき、それが尊敬されてしまうことがあるわけだ……。今は暴力が自分に伴(ともな)っているからなおさら……。

冷静に自己分析(ぶんせき)をする阿九斗だが、わかったからといってどうしたものかは見当もつかない。

――田舎で仕事と勉強ばっかりやってたのがいけなかったんだな……。

「いや……まぁ、とにかく今は独りにさせてもらうよ。食事までは部屋にいるから……」

阿九斗はそう言って逃(に)げだそうとした。

「え？　そりゃないっすよ、兄貴。これから寮とか学校を案内しようかと思っていたのに」
　ヒロシが残念そうに言った。それを聞いて、阿九斗は考えを改める。
——いや、自分の欠点がわかったなら、服部さんに謝ることができるんじゃないだろうか？　服部さんは責任感と社会性のかたまりみたいなものだ。そこを気に入ったのだしな。僕の性格も説明すればいいんだな、しっかりと。
　様々な意味でずれたことを考え、阿九斗はヒロシに言った。
「それなら、女子寮に入る方法を教えてもらえないかな？　手続きとかいると思うんだけど。服部さんに謝ってないから」
　ヒロシは嬉しそうに手を叩いた。
「さすがに兄貴はすげぇ！　女子寮なら案内しますよ。手続きとかそんなの必要ないっすから！」
「ありがとう」
「こりゃ盛り上がってきたなぁ！」
——盛り上がって？　女子寮に行くだけなのに？
　阿九斗は遠足前みたいに騒ぐヒロシにやや呆れながらも、彼の先導で歩きはじめた。
　ヒロシは寮から外に出て、外壁に沿って回り出す。周囲は林になっており、道こそあるものの普段は使われていないのか外灯もなくやや薄暗い中を先へ進んでいく。
「渡り廊下があったと思ったけど」

男子寮と女子寮は対になった城塞を利用したものだから、間は橋で結ばれていたはずだ。

「委員長の部屋に行くんでしょう？　外からの方がいいですよ」

ヒロシはニヤニヤしながら請け合う。

「どうして？」

「二階の壁際の部屋ですから」

ヒロシは生徒手帳を出して、ページを開く。スクリーンに女子寮の部屋割り図が映し出された。

「女子寮の部屋割りって配布されているの？」

「女子には」

「え？」

「苦労して手に入れたんですよ。もう、わかってるでしょうに。あっしの情報は男子の間じゃ評判なんすから」

――何を言っているのかわからないな……。

阿九斗は首をひねるが、十分近くも林の中を歩くと、外からうかがえる寮の雰囲気が変わった。女子寮の区画に入ったのだろう。

「ここからは慎重に……」

ヒロシが声をひそめて身をかがめた。

「やましいことはいけな……」

「シッ!」
　ヒロシが指を口に当てて警告した。
「潜り込むなんて頼んでないぞ」
　阿九斗は慌てた。
「いや、だって委員長に会うんでしょう？　正面から行ったら騒ぎになりますよ!」
　ヒロシは〝気が利くだろ？〟というようににやりとした。
「うん……違いない」
　阿九斗は納得した。確かに皆の前では絢子も謝罪を受け入れてくれないような気がする。
「それに、寮で女子が男子と会うときは、男子が女子の窓に行くってのが定番でして」
「なるほど、正面よりは迷惑じゃないかもな、その方が」
「ええ、まぁ……。さて、あそこの窓です」
　ヒロシが上を指さした。窓が見える。窓の周囲に張り出しがあり、壁も煉瓦が突き出している部分が多く登るのに不自由はなさそうだったが……。
「登れっていうの？」
「そうですよ。だって兄貴、『飛翔魔法』まででしょう？」
　ヒロシが当然のことのように答える。
「女子のところに行くときは、窓を短くカカカッと三回、次にカンカンカンと長く三回の決まりっす」

「そういう風になってるのか」
阿九斗がうなずくと、ヒロシは阿九斗の背中を叩く。
「じゃあ、うまくやってください兄貴！」
「え？　ああ……」
阿九斗は戸惑(とまど)ったが、ヒロシは「じゃ」とさわやかに手を振(ふ)って走り去った。
――なんだろうね、まったく……ま、そういう習慣ならそうするさ。
阿九斗は壁にとりついた。二階であるから、さして苦労なく窓までは登れる。中を覗(のぞ)き込もうとして、ためらった。
――着替(きが)え中だったりしたら失礼だな……。
そこで阿九斗は手だけ出して、窓を叩(たた)く。
カカカッ。カンカンカン。
すると、ややあって、バン、と激しく窓が開いた。風圧が窓の脇(わき)にいた阿九斗にもかかるくらいの勢いだ。傍(はた)から見ていても窓の開け方に殺意が感じられる。
――そりゃ怒(おこ)ってるだろうな。真摯(しんし)に謝るしかない……。
そう思った阿九斗だったが、憤怒(ふんぬ)の形相で顔を突き出した絢子を見て、さすがにまだそこまで怒っているのか、と驚(おどろ)かずにいられなかった。

「なんたる屈辱か！　貴様！　どこまで私を辱めれば！」
　怒りを通り越して号泣しているかのような声を絢子は出していた。
「ちょっと待ってくれ！　謝りに来たんだよ！」
「謝りに来る者が恋人の夜這いのサインとは何事か！」
　――三回、三回ってのは……！
　阿九斗は察した。
「ま、まってくれ、正式な作法だって騙されたんだ！」
「周囲が私たちを誤解してるってことだろうが！　負けて！　からかわれて！　ええい、そうならば私にできることはひとつしかない！　貴様を倒してすべての誤解を解く！」
　絢子は木刀を突き出してきた。
「ご、ごめん、本当に悪かった……！　僕はそんなつもりじゃ……」
「どんなつもりだ、この魔王が！」
　絢子が突き出す木刀を避けながら阿九斗は女子寮の壁を這う。
「だから、僕は魔王なんかじゃないって……！」
「魔王じゃないことを証明するなら、私に打ち倒されろ！　負ければその程度の力の者は魔王じゃないことになる！」
　一理あるような気もするが、阿九斗としても殺意のある木刀で打ちのめされるわけにはいかない。

「だから誤解なんだってば！　僕は君が気に入ってるし……」

「その言い方をやめろと言っている！」

絢子が絶叫（ぜっきょう）すると、さすがに周囲も騒（さわ）ぎを聞きつけて、次々にバタンバタンと女子寮の窓が開きはじめた。

「あ、あれがあの編入生ね！」

「あ……絢子と痴話喧嘩（ちわげんか）？」

「教室で心中しようとしたってホント？」

窓越（まどご）しにうわさ話をはじめる女子たち。阿九斗もさすがに、これはまずい、と壁を伝って下へ。

「だ、だから誤解だから……落ち着いたらまた謝りに来るから……！」

そう言いながら振り返って窓を見上げた阿九斗の視界に飛び込んできたのは、純白の下着……しかもスハラ信者でも生粋（きっすい）の者しか身につけない白の下帯だった。

もちろん絢子がスカートが翻（ひるがえ）るのも気にせずに窓から跳（と）び降りてきたのだ。

「きぃえええええ！」

「うわぁ！」

阿九斗はすんでのところで上空からの一撃（いちげき）をかわし、背後の林に転がり込んだ。

「お、落ち着いて……！」

背後からの斬撃をかわしながら阿九斗は走る。

「問答無用！」
絢子の振り回す木刀には確かな殺意がある。
――これじゃどっちかが怪我（けが）してしまう……。
阿九斗は、ここで先生の言葉を思い出した。緊急（きんきゅう）事態には連絡（れんらく）してくれ、と。
生徒手帳を取り出し、素早く先生のアドレスを指で押（お）してから頬（ほお）に当てる。
「……ん？　どうやらトラブル？」
「そ、そうです、先生！　服部さんに襲（おそ）われてます！」
「どうして服部さんに会ったのよ」
と、呆（あき）れたように美津子先生。
「なんとかなると思ったんですよ！」
「……まぁいいわ。生徒手帳離（はな）さないでね。ちょうど到着（とうちゃく）したのよ、監視員（かんしいん）が。生徒手帳があれば、あなたのマナをトレースできるからそこに向かわせるわ」
「助かった！」
息を切らしながら阿九斗は背後を振（ふ）り返った。
絢子は鍛（きた）えているのか、元気に阿九斗についてくる。阿九斗も配達で鍛えた健脚（けんきゃく）なのであるから絢子のスタミナは相当なものだ。

「……どのくらいで到着します？」
「さぁ……。すぐだとは思うけどね。気が利いた監視員なら瞬間移動くらいするでしょ」
美津子先生がそう言って、念話を打ち切った。
「せ、先生……」
阿九斗がそう呼びかけたとき、足下の感触が不意になくなった。
「え？」
いきなりの浮遊感と落下感。
林にありがちなことだが、木々のせいで崖が見えなくなっていたのだ。
ガサガサと木が鳴る音が響いて、その音ごとに身体に衝撃がはしる。やがて、ドン、と最大の衝撃が背中に。一瞬、呼吸が止まり、身体の感覚が無くなる。それから全身に鈍い痛みが襲ってくる。
「う……くはぁ……」
うめきながら息を吸い込み、阿九斗は状況を把握しようと周囲を見回した。どうやらここは竹藪のようだ。崖の上がブナか何かの林で、そこが途切れて竹が群生しているということのようだ。
——竹が切られていたら刺さっていたかもしれないな。幸運だった。それに服部さんから逃げられたのも助かった。後は待っていれば監視員が来るってことか……。
とはいえ、この場に留まっているとすぐに絢子に発見されることになりそうだ。阿九斗は手足の傷に深いものがないか確認しながら、竹藪を奥に進んだ。

——やれやれ。それほど大事にはなってない。監視員が来ないと僕に味方はいないって状況は厳しいな。

阿九斗は内心ぼやきながらあてもなく歩を進める。

ふと人影(ひとかげ)を認めた。夕日が視界の先にあるからシルエットしかわからない。

一瞬、身構えたが、突進(とっしん)してくるわけではないのだから絢子ではないようだ。安心して息をつくと、その人影は阿九斗に気づいたらしい。

「あたしのところを訪ねてきたのは誰？」

「いや、君こそ誰？　まさか監視員？」

少女の声だった。やたらとのんびりしている。

そんなはずはあるまい、と思って言ったのだが、返ってきたのは肯定(こうてい)だった。

「そう。あたしは監視員なのです」

「そりゃ助かった。僕のところに来たのでしょう？」

阿九斗が言うと、弾(はず)んだ声が竹藪に響く。

「そう。あなたが来たのかあたしが来たのかはわからないものですよね。そう、それは運命のようなもの！あなたは王子様？　素敵なお顔や身体に擦(す)り傷(きず)があるのはあたしに会うためにイバラの森を越(こ)えてきたからかしら？」

——面白い表現を使うものだな、監視員というのは。確かにイバラの森みたいなものだな、僕にとってのあの学園は。

「確かにその通りだな。いろいろ大変だった。君を待ってたんだ。声からすると女の子みたいだけれど、監視員というからには僕を守ってくれるんでしょう？」

「守って欲しいの？　そうね、王子様を守るのも最近の女の子の勤め。それに監視員ですものね！　あたしは、この学園を、この世界を監視（かんし）しているの。季節の移り変わりを、人々の変化を！　ねぇ、歴史の流れはうっとりするほど素敵でしょう？」

「監視員が詩的である必要があるのかい？」

――どうも妙（みょう）だな……。

「ええ、あたしは監視員。あなたの監視員」

　歌うような調子で、というか本当に歌いながら阿九斗の前に監視員が歩み出てきた。

　長い髪（かみ）が阿九斗の目の前で翻（ひるがえ）った。夕日がそのまま抜（ぬ）け出てきたのかと阿九斗は思った。彼女は見事な赤毛の持ち主で、さらには、まるで炎（ほのお）が燃えているかのように数房（ふさ）ほど立った髪が頭頂部でゆらゆらと揺（ゆ）れていたからだ。

「さて、王子様、いかがいたしましょうか？」

　彼女は学園の制服を着ていた。そのスカートをちょっと持ち上げて挨拶（あいさつ）をする。

「いや、その王子様ってのはやめてくれ。それに今、ちょっと危ない。事情は知ってるだろう？」

「事情といってもいろいろとあるわ。あたしが知ってることは、あなたが傷だらけでいきなりやって来たってこと。それだけでも危険だってことはもちろんわかってるわ」

ぐぐっ、と拳を握って彼女は顔をあげた。

気合いを入れている割りには締まりのない顔だった。はっきりした顔立ちなのに優しい雰囲気。美少女というにはやや緩すぎるが、その分、安心感と好感が醸し出されている。見ているだけで眠たくなるような顔だ。

「そりゃ危険だってわかっているならいいけど……」

言いかけた阿九斗の声を、長く尾を引く絶叫が遮った。

「見つけたぞ、貴様ぁあああああ！」

阿九斗は身構えた。

「あらあら……」

赤毛の少女がのんびりとした声をあげ、阿九斗の表情と竹藪の中に現れた絢子の姿をそれぞれ見比べた。そして、とてもユルい笑顔を阿九斗に向けた。



「あれが危険ですね。守ってあげます、それならば」
――へぇ、余裕なんだな。
それまでは、どうもおかしい、とは思っていたが、その態度で彼女が監視員なのだと阿九斗は信じてみる気になった。
少女が絢子の前に歩み出た。自信満々に。勇ましく魔法のステッキまで構えている。
「どけっ！　馬鹿がっ！　何をやっている！」
絢子が赤毛の少女を罵倒した。
赤毛の少女は大きく腕を広げて毅然とした態度で応じた。
「どきません！　この人はあたしの大切な人！」
まさに恋人を守るかのような真剣な声だった。
元々逆上していた絢子の顔の色が赤からどす黒い色に変わる。阿九斗の方に目を向けて、叫んだ。
「貴様！　どんな女にでもすぐに手を出すのか！」
「そりゃ、誤解だ！　今、ここではじめて会ったんだ！」
「そんなことはわかっている！　だから初対面の女でも口説くのかと言っている！」
絢子は木刀を振って構えると、阿九斗に向かって前進する。が、その進路に赤毛の少女が割って入った。
「どけっ！」

「どきません！」
右に動いても左に動いても絢子の前に赤毛の少女の顔が。苛立（いらだ）ったらしい絢子は、一度後方に跳（と）び退ると、木刀を縦に構えて眼前にかざす。
「ならばお前をすり抜けて後ろに回るまで！」
絢子が一瞬（いっしゅん）、目を閉じて精神を集中させ、次に見開いた瞬間（しゅんかん）のことだった。絢子の身体が驚（おどろ）くべきことにふたつに分かれた。
阿九斗は目を疑った。絢子が二人出現した、としか見えなかった。その二人の動きはばらばらで、双子（ふたご）が目の前で別々の動きをしているかのようだ。
「これぞ我が家に伝わる魔術（まじゅつ）！　どちらかが偽体（ぎたい）だが、その偽体とて実体としての攻撃力（こうげきりょく）を持っているのだ！」
二人の絢子が左右に分かれて赤毛の少女を回り込むように走る。
阿九斗は判断に迷う。赤毛の少女がどう動くかわからなかったからだ。左右の絢子のどちらかは赤毛の少女をすり抜けてくるだろうが、それがどちらかわからなければ対処できない。阿九斗は絢子を目で追いつつも、視界の端（はし）に赤毛の少女をとらえた。
——監視員が戦闘（せんとう）のプロなら、先に動いてくれるはず……って、え？
「え？　え？」
赤毛の少女は左右にオタオタと首を回していた。

二人の絢子はあっという間に赤毛の少女の両脇をすり抜けた。そして、二人同時にサイドステップを決めて阿九斗の両側に等距離をとって展開。まったく同じタイミングであるため避けられない同時攻撃を仕掛けるつもりだ。

「ちぇええええい！」「だぁああああ！」

　気合いが左右から阿九斗に迫ってきた。

――え？　やっぱり監視員じゃないってことか？　それじゃ、僕がなんとかしないといけないのか？

　そう決意して阿九斗は身構えた。左右から同時攻撃とはいえ、右を避けて左を受けると決めると、絢子の動きは逆上しているだけに単純で、どうやら討ちかかってくる軌道は予測できそうだ。

それなら、右を避けて……左は腕で防ぐ……！

――タイミングさえ計れば避けられ……っうわ！

　タイミングを計っていた阿九斗の足がいきなりすくわれた。思わぬ方向からの〝攻撃〟だった。赤毛の少女がいきなりタックルのように阿九斗に抱きついてきたのだ。

「あたしが守るから！」

「ええええ！」

　思わぬ行動に阿九斗は驚くが、咄嗟のことでどうにもできず、阿九斗は押し倒されて地面に赤毛の少女とともに転がる。

抱き合うような形で倒れている二人に、容赦(ようしゃ)なく絢子の木刀が左右から振り下ろされてくる。もはや避けることはできない。引きはがそうにも赤毛の少女は必死に阿九斗にしがみついてくる。

――受け止めるしかない……。でも、僕が受け止められないと彼女に当たるから……。完全に受け止めるためには……。木刀を折るしかない。

阿九斗はそう判断した。腕で木刀を折る。それを思いついたのは、以前のあの感覚が腕に残っていたからだった。木刀を握(にぎ)ったときの、熱い塊(かたまり)が腕を登ってくるあの感覚だ。それが木刀なしでも出来そうな気がしていた。

――力を制御(せいぎょ)して爆発(ばくはつ)させれば……。

阿九斗は瞬間、精神を集中した。

――あのときは木刀から入ってきた力を、今は何もない空間から取り出す！

木刀が左右から同時に振り下ろされる。

「ふっ！」

阿九斗は気合いとともに両腕(りょううで)を振り上げた。腕の中に熱い塊が流れ込んでくる感覚がある。阿九斗は、それを固定して腕(うで)の中心で爆発させる。

激しい力の流れが腕からあふれ出る。

「ひー！」「え！」

阿九斗の腕から発した光に木刀が押し返(かえ)され、二人の絢子が同時に驚きの声をあげた。

さらに力を込めると、輝(かがや)きを増した腕からの光が木刀をへし折り、阿九斗は一瞬顔をほころばせた。

――うまく出来た……。

だが……。

――え……！　と、止まらない……！

阿九斗は慌(あわ)てた。力が制御できなくなっていた。

教室のときと同じ、いや、それ以上の爆発が阿九斗の腕を中心に巻き起こる。

「きゃあああああ！」

絢子が悲鳴をあげた。一人分の声だ。分身の方は爆発に巻き込まれてバラバラに分解、消滅(しょうめつ)していく。

膨(ふく)れる光の球。やや遅(おく)れて、ドン！　という爆発音(ばくはつおん)。

遠くからでも熱によってわき起こった雲が見えたに違(ちが)いない。

真っ白になっていた視界が開けてみると、阿九斗の前に拡がっていた光景は、戦地か隕石(いんせき)の落下点かという惨状(さんじょう)だった。

阿九斗を中心に半径五メートルほどのクレーターが生じており、そこの縁(ふち)の竹も外側になぎ倒(たお)されていた。クレーターの中に絢子が倒れている。絢子の制服はひどく破れており、絢子自身ももちろん怪我(けが)をしているようだった。

「しまった……」

阿九斗はつぶやいた。どうやら以前と違うことには、木刀を折ることにこだわったあまり、絢子を爆発に巻き込んでしまったらしい。後悔（こうかい）の念が押し寄（よ）せてくる。

　身体を起こそうとして、阿九斗はまだ赤毛の少女が自分の上に乗っていることに気づいた。衝撃（しょうげき）のせいでぼんやりしていたようだが、阿九斗の動きで目覚めたのか、はっとして周囲を見回す。

「こ、これは……！」

　赤毛の少女は怯（おび）えた表情になる。

「ああ、ご、ごめ……」

　とにかくも赤毛の少女を落ち着かせようと阿九斗は口を開いたが、彼女の反応は阿九斗の予想とはまるで違った激烈（げきれつ）なものだった。

「す、すいません！　ああっ！　なんてことでしょう！　あたしの眠（ねむ）っていた力が目覚めてしまったのね！　危機に瀕（ひん）して凶暴（きょうぼう）な力が目覚めてしまったんだわ！」

　まさに悲劇の主人公といった表情で、頬（ほお）に手を当ててイヤイヤと首を横に振（ふ）る赤毛の少女を、阿九斗は呆然（ぼうぜん）として見上げた。

「あ……あの……それは、違うと……」

「ああ！　慰（なぐさ）めなんて……！　ありがとう優しい人！　でも、あたしは人を傷つけてしまったみたい！　この上はコ＝ロ神に仕える聖職者として一生を終えるほかないのかしら……この罪は一生かけて償（つぐな）わなければいけないのかも……」

「ま、まだ死んだわけじゃ……って、助けに行かないと！」

阿九斗がそう言って慌てたとき、いきなり異変が起こった。

二人が転がっているその数メートル横の空間に、かげろうのようなゆらぎが見えたかと思うと、そのゆらぎがみるみるうちに形をとりはじめた。四角く透明(とうめい)な物体として空気が固形化したように見えた。まるでガラス板が空気中に現れたかのようだった。

と、その〝ガラス板〟がまるでドアであるかのように〝開いた〟。そして驚(おどろ)いたことに、その〝中〟から、ぬう、と手が現れたのだ。

手は小さくて柔(やわ)らかそうな少女のものだった。そしてその手に続いて「よっこらしょ」と、狭(せま)いドアをくぐるようにして出現したのは、可愛(かわい)らしい細身の少女だった。

透明な空間から強引に身体を抜(ぬ)き出したかのように、つまりは何もない空間にいきなり、その少女は出現したわけだ。

年齢(ねんれい)は阿九斗たちと同じくらいか。細身の身体を学園の制服に包んでいる。目に付くのは緑色の髪(かみ)の毛と、同じ色の瞳(ひとみ)。整った顔立ちは美しいが表情というものが伺(うかが)えない。彼女が人間でないことは阿九斗にもすぐに理解できた。

——人造人間(リラダン)！

阿九斗は驚く。上流階級の者しか所有していないという噂(うわさ)のある、リラダンと呼ばれる人造人間だ。マナによってその身体が構成されているということで、人間のように行動し、意志を持っているが、感情だけ

はないということだった。

「紗伊(さい)阿九斗さんですね。自分はあなたの監視員(かんしいん)、識別名は〝ころね〟です。三分前よりマークト神の指示により任務についています」

　ころねは、阿九斗に一礼した。その動きも、揺(ゆ)れる豊かな髪の毛も人間そのものだったが、顔をあげたその表情だけは人形のようで、阿九斗としても反応に困ってしまった。

　――こっちが本物の監視員……。

　戸惑(とまど)っていると、ころねは左右を見回した。

「三分以内に事態が起こったと認識します。となると、この事態について自分には責任があります。服部絢子との間の係争について、服部絢子を治療(ちりょう)後、両者より聞き取りを行います」

　そう言うと、彼女は制服の腰(こし)にさげていたポシェットに手を突っ込んだ。そこから拳銃(けんじゅう)のような形をした白い器具を取り出す。

「本人の同意はありませんが、医師法に基づいて治療を開始します」

　ころねは絢子に歩み寄ると、拳銃型の器具の先端(せんたん)を痛みにうめいている絢子に押(お)し当(あ)てた。器具はマナの光を発した。血や土の汚(よご)れは消えないが、絢子の身体の傷は段々と消失していく。

「治療完了(ちりょうかんりょう)。体内への微量(びりょう)の異物、および細菌(さいきん)の侵入(しんにゅう)を認めました。以後、発熱、倦怠感(けんたいかん)などがあると予測します。静養を忠告いたします」

　ころねはそう言って立ち上がった。

絢子の意識はどうやら戻(もど)ったようだった。だが、阿九斗の方を見ると、それまでの態度とはうって変わって、悲痛な表情になった。その切れ長の瞳から、一筋の涙(なみだ)が流れ落ちた。

「あ……！」

　阿九斗は絢子に声をかけようとしたが、絢子はぼろぼろになった服の前を素早く手で隠(かく)すと、泣きながら走り去ってしまう。

「ま、待ってくれ……！」

　立ち上がろうとした阿九斗だったが、まだ腹の上には赤毛の少女が乗っていた。再び地面に横たわり、なんとも間抜(まぬ)けな格好で天を仰(あお)ぐ。

「彼女からは後に聞き取りをすることにします。まずはあなたからです」

　ころねが阿九斗の顔を上から覗(のぞ)き込んできた。

「君が監視員……？」

「ころねとお呼びください。クラスメイトとして明日より登校し、あなたを今日のような事態より警護します。その前に、前述の通り、今回の係争について聞き取りを行います。こちらが把握(はあく)している事態は次の通りです。服部絢子はあなたとの接触(せっしょく)により興奮、いさかいとなり、あなたはここへ逃亡(とうぼう)、その後、あなたは闘争(とうそう)により服部絢子に軽傷を負わせた。ここでは闘争時のあなたの意志について確認いたします。服部絢子に傷を負わせる意志の有無です」

　ころねが冷静な口調で言った。

そのあまりに事務的な対応に阿九斗は閉口するが、これがリラダンというものなのだろうとあきらめる。

「傷を負わせる意志はなかった。木刀を折ろうと……」

そう口を開いた阿九斗だったが、いきなり横合いから、いや正確には真上から口を挟まれる。

「違うんです！　あたしの力が覚醒してしまったから……！」

赤毛の少女が、相変わらずの口調で主張する。

「ちょ、ちょっと……」

阿九斗は遮ろうとするが、赤毛の少女は聞いてはいない。

「あたしがあの爆発を起こしたんです。ああ、どうしましょう！　これは罪になるんでしょうか？　ええ、きっと罪ね！　ねぇ、どうしたら許してくれるんですか？」

「証言を聞いた後に検討します。自分は限定的ながら神と交信できるため限定的ながら行政特権を持っています」

「神と交信！　ああ、大変！　それならあなたは間違えないのね！　あたしの過ちをお許しくださいます？」

「ですから、証言の後に検討します」

真面目にころねは答えている。というか、常時真面目以外の態度はとれないのだろう。

「ああ！　あたしは彼の、王子様の監視員として彼を守ろうとしたのです！　信じてくださいませ！」

赤毛の少女は懇願した。

「だ、だから、ちょっと待って……！　君ってば思いこみが激しすぎやしないか……」

阿九斗は口を挟もうとするが、やはり効果はない。

「あたしは彼に監視員として認められて、彼を守ったんです！」

「証言と状況の食い違いが見られます。さらに紗伊阿九斗との証言とも食い違います。自分に対する証言は公式の発言として記録されます。偽証罪も適応されますので、ご注意ください」

ころねが宣告した。そして、数秒ほど目の奥をチカチカと光らせた後、こう口にした。

「照会しました。高等部一年A組曽我けーな」

「ぎ、偽証罪！　そ、そんな罪まで！　ああ、どうしていいのか、もうわからない！　爆発で委員長を傷つけた上に、そんな罪まで！　それにどうしてあたしの名前を！」

赤毛の少女――けーな――は混乱した様子だった。

阿九斗の腹の上で身をよじったので、スカートがまくれあがって下着を激しく阿九斗にこすりつけているような格好になる。

「ちょ……」

阿九斗はさすがに顔を赤らめる。

と、自分がどんな姿をしているかにけーなも気づいたらしい。

「い、いやぁああ！」

ごろん、とけーなは阿九斗の上から転がり落ちた。Mの字に派手に開脚（かいきゃく）した格好で地面に転がり、下着が丸出しになっていることに気づくと、慌（あわ）ててそれを両手で隠（かく）した。

「う……」

恥（は）ずかしさに顔を赤らめて、泣きそうな目で阿九斗を見上げる。



「ご、ごめ……」
　阿九斗は謝ろうとするが、いきなりけーなは走り出した。
「ちょ……ちょっと、ねぇ！」
　呼び止めるが止まらないので、阿九斗は走り出した。竹薮であるから、見通しが良いとは言えないが、姿を完全に隠す場所があるわけでなく、追跡は簡単なはずだった。だが、密集して生えていた竹の背後に飛び込んだけーなの姿が完全に消えてしまったことに阿九斗は気づいた。普通なら一瞬だけ竹の後ろに入ったというだけのはずだ。密集した竹の背後にも回ってみたが、やはり彼女の姿はない。
「あれ？」
　が、下を見た阿九斗は驚いた。そこには制服がワンセット放置されていたからだ。拾い上げてみると、まさにさっきまでけーなが着ていたもので、体温が残ったままだ。ふと見ると、その少し行った先の地面にブラウス、さらにその先には下着が落ちている。
　――な、なんだこれ……。
　阿九斗は戸惑う。下着の近くにまでは行ってみたものの、さすがに拾うのははばかられた。後ろに何か阿九斗の知らないキャラクターがプリントされている白い下着を眺めていると、すぐ近くで「いやっ」とつぶやくような声が聞こえた。
「え？」
　阿九斗は思わず周囲を見回す。誰もいない。

が、空中に浮遊している小さな光を見つけた。それ自体が発光しているわけでなく、夕日を反射して輝いている、虫くらいの大きさの物体だ。阿九斗の目線の少し上くらいを浮遊している。

――石？

空を小さな石が飛んでいるように阿九斗には見えたが、それも一瞬のことで、すぐにその物体は阿九斗から遠ざかるように飛んでいってしまう。

「いなくなりましたね。追跡しようと思うのですが、位置が把握できません。残念ながら曽我けーなの生徒手帳は寮に置いてあるようです」

阿九斗の背後にころねがやってきた。

「生徒手帳があれば位置が特定できるんだっけ？」

「そうです。ただマナを操って乱れを最低限にした場合にはその限りではありませんが。自分が現場に遅れた理由も、あなたがマナを操って姿を隠そうとしていたからです」

「そんなことしてないよ」

「逃げようとしていたから、無意識のうちにそうしていたのでしょう。今の曽我けーなの場合も、同じでしょう。マナがトレースできません。彼女の場合は意識的でしょうが」

「意識的？」

「彼女はマナの乱れを隠すことができるようです」

「そりやすごい。でも、なんで服が……」

「その理由はわかりません」
「ホント、なんでなんだろうな……」
　阿九斗はそう言ってから、少しの間、黙った。ころねと普通に会話していることがどこか不自然に感じられてきたのだ。
「……ねぇ？　それで、僕はどうすればいいんだい？」
　その質問へのころねの答えは明確だった。
「普通に生活してください」
「……普通に？」
「はい。自分はあなたの自由意志と安全を最大限確保するように申しつけられています。監視し、保護するとはそういうことです」
「僕が悪いことをしたら？」
「即座に相応の刑罰を与えるように命じられています」
　こともなげにころねは言った。
――恐ろしいことを言われているような気がするけれど……。
　しかし、そう感じないのはころねの外見のせいだろう。
「じゃあ、今回のことは？」

「服部絢子を傷つける意志がなかったことは確認されました。自分には、あなたの体内のマナをトレースする権利があります。あなたにより許可されました。これにより、あなたの数分前まで抱いていた感情を自分は分析することができます」

「何を考えているかわかるってこと？」

「感情のみです。あなたの感情は数分前まで当惑が主です。その他は憐憫と、性的興奮が少し」

「そ、そんなことは言わなくてもいい！」

　阿九斗は思わず語気を強めた。が、ころねは冷静なままだ。

「任務に必要な場合はその命令は受け付けません」

「……そう」

「はい。ですが、生活面においてはあなたの自由を確保するように命じられています。特に危険の排除は重要です。その観点から服部絢子との関係に注意をするように助言します。曽我けーなについては、違法行為が見られます。そちらは軽微なことなので不問にすべきとは思いますが、今後、あなたの監視員を偽ることがあれば、曽我けーなに相応の対応をすることになります」

　ころねは言ったが、阿九斗はそれにどう答えたものかわからなかった。

「……よくわからないけれど、彼女もクラスメイトなんだっけ？」

「はい。曽我けーなは出欠を検索したところ今日は出席していなかったようです。あなたと面識がなかったとすればそのせいです」

「じゃあ、明日、会えるかな？」
「その種類の予測は自分には不可能です」
「そうじゃなくて、さ……。服、届けられるかな？」
阿九斗は地面に散らばっている服を指さした。
「女子寮の管理人に届ければよいだけです。あなたにその作業が困難であるならば、自分が行いましょう」
ころねが服を拾い集めはじめた。
「では、これを届けに行きましょう。そしてあなたも寮に送り届けます」
ころねの言葉に阿九斗はうなずいたが、ややひっかかるところがあった。
——寮に送り届ける？
その疑問にはすぐに解答が与えられた。
服を女子寮に届けた後、男子寮に戻った阿九斗だったが、背後にころねがぴったりとくっついていた。
当然のように男子生徒達はざわついた。女子が堂々と入ってくることはあまりないし、まして、見たこともない美少女のリラダンが潜入してくることなどあり得ない。
また阿九斗がやらかした！　というざわめきが寮の廊下に満ちる。
「あの……つかぬことをうかがいますが、どこまでついてくるつもりですか？」
阿九斗が聞くと、ころねは周囲の視線も気にせずにこう答えた。

「逃亡の気配が見られれば、用便、入浴までも。そうでない場合はプライベートは保証しますが、基本的に同居するつもりです」

　寮生たちはその会話にさらにざわめく。と、ころねは手を挙げ『スピーカー』を呼び寄せた。ころねは寮内に響く〝放送〟を行う。

「寮内の皆様。お騒がせして申し訳ありません。自分は帝国政府より派遣された監視員です。ころね、とお呼び下さい。紗伊阿九斗を監視する任務を負っています。ご協力をお願いいたします。男子寮に女性形であることがいささか不適当ではありますが、被監視者である紗伊阿九斗に安心を与える姿形により選ばれたものです。被監視者以外のプライバシーは尊重いたしますので、ご安心ください。ただし、リラダンへの暴行はくれぐれもご注意を。自分には抵抗、あるいは即時の刑罰を与える権利が付与されています」

　ころねの放送に、今度は寮内は静まりかえる。

「……あの、プライバシーの尊重というのは、ころねさんが見たものを口外しないということですか？」

　近くにいた勇気ある男子生徒がおずおずところねに質問する。

　ころねはうなずいた。

「そうです。被監視者である紗伊阿九斗についてもプライバシーは一部保護されますので、彼についても同様です。自分と彼は同じ部屋に同居しますが、そこでの生活については口外しませんので、よろしくお願いいたします」

　その答えに、再び寮内はざわつく。

同居と言っていたが、やはり完全に阿九斗と同じ部屋に住むことになるらしい。
やっかみとも憐憫（れんびん）ともつかぬ奇妙（きみょう）な視線が阿九斗に集中する。
「や、やっぱ兄貴はすげぇや！」
肯定的（こうていてき）な意味で興奮しているのは、あわててかけつけたらしいヒロシだけだ。
「すげぇ、って……何か間違（まちが）えてないか？」
「監視員とはいえ、自分のリラダンを持ってるなんて、すげぇっすよ、兄貴！」
阿九斗は否定したが、ヒロシは興奮するばかりだった。
そうこうしているうち、食事の時間になった。食事中、ころねは阿九斗の背後に立ったまま微動（びどう）だにしない。
「あの……ころねさん？　立ったままなんですか？」
阿九斗はおずおずと聞く。さすがにどうにも気になる。
「席がありませんし、自分は食事をしませんので」
ころねが答えると、ヒロシが立ち上がり、瞬く間（またたくま）に予備の椅子（いす）を持ってきた。
「どうぞ！」
ころねはそれをじっと見て、質問する。
「座れと言うことですか？」
「そうですが？」

むしろ不思議そうにヒロシは答えた。
ころねは沈黙した。無表情なのだが、それがかえって当惑しているように周囲には見えた。数秒後、ころねが口を開いた。
「これが親切というものですね」
納得した、というようにころねが言う。
「性的な見返りを期待しての行為だと一般には分析されていますが、自分にはあなたの感情を分析する権限がないので、そうではないという前提でお礼を言います。ありがとう」
頭を下げてころねは椅子に座った。
さすがにヒロシは苦笑いを浮かべた。
「ど、どういたしまして……」
食事が終わって部屋に引き上げる阿九斗だったが、当然のようについてくるころねにはやはり気詰りな雰囲気を感じる。
「あの……さすがに部屋までは……」
「そうですか。希望であれば部屋には入りませんが」
ころねは思ったより素直にそう言った。阿九斗はほっとする。
「ああ、それなら希望するよ。別のところで休んでくれるとありがたいな。寮母さんに言って場所を用意してもらうといい」

阿九斗はドアを開けて中に入った。ころねはついてこなかった。

「じゃあ、明日」

ころねに挨拶して、ドアを閉じる。ベッドに座って息をついた。

いろいろとあったが、明日からも悩みは尽きないに違いない。

――服部さんと、曽我さんか……。

一人で頭を抱えた阿九斗だったが、不意に妙な感覚に襲われた。誰かがドアの外にいる感覚がする。しかもじっと見られているような……。

阿九斗はドアを開けた。

緑色の瞳が目に飛び込んできた。

ころねが直立不動でドアのすぐ前に立っていた。

無表情で微動だにしていない。

阿九斗はドアを閉めた。

数秒待って、また開けた。

ころねはドアのすぐ前に立っていた。まったく微動だにせずに。

ドアを閉めた。

開けた。

直立不動のころね。

閉めた。
開けた。
ころね。
「……朝までそこにいるつもり？」
阿九斗は耐(た)えきれずに自分から口を開いた。
ころねはうなずいた。
「そうです。部屋に入らずに監視(かんし)します」
こともなげに言う。
「疲(つか)れないの？」
「疲れません」
ころねは言った。
「……わかった。入って」
阿九斗は根負けした。
「では入ります」
喜ぶわけでもなく、ころねは部屋に入る。
「はぁ」
ため息をついて、阿九斗は再びベッドに座り込んだ。

そんな阿九斗の正面にころねは立ち、じっと阿九斗を見つめる。

「…………………………………………………」

「………………………………………………………………………」

「……………………………………………………………………………………」

「…………………………………………………………………………………………」

「…………………………………………………………………………………………ねぇ？」

「はい？」

「疲れないの？」

「疲れません」

「……観察対象の自由意志に思いっきり干渉（かんしょう）しているから、普通（ふつう）の同居人みたいに過ごしてくれるとありがたいな」

苦笑いとともに阿九斗が言う。

すると、ころねが考え込むように沈黙（ちんもく）する。

「…………………………………………………」

「どうしたの？」

すると、はっとしたようにころねが言う。

「……失礼しました。普通の同居人というものがどういうものかわからなかったもので」

「しょうがないか。感情がないんだっけ？」
「いいえ」
　思いがけずころねは阿九斗の言葉を否定した。
「え？」
「感情はあります。そうでなければ人間の感情を分析（ぶんせき）できません。正確には自分たちには、自我がないのです」
　ころねは言った。
「自我？」
「自分たちは、自分が何者であるかというアイデンティティを任務中しか持ちません。感情表現を行う必要があるかどうかは自我が判断するものです。任務が長くなれば自我が固着することになり、そこに至ってはじめて感情が機能します」
「な、なんか難しいことを言うね」
「慣れるまではあなたに不都合があるだろうというだけの意味です」
　ころねはうなずいた。
「慣れてくれれば、感情的に振る舞（ふま）えるってことか」
　阿九斗はそう納得した。
「そうです」

ころねは肯定した。

「ですから、まずは行動のアドバイスを願います」

「ええと……いつもは僕の椅子かベッドに座って。何もないときは寝ていていいや」

阿九斗は言った。

「わかりました」

「僕は入浴は明日の朝にして、今日は寝るから、君も寝ていいよ」

「そうですか」

阿九斗は上着だけ脱いでベッドに転がる。すると、その隣に、ごろん、ところねが転がってきた。

阿九斗が横に向けた顔のすぐ前にころねの顔がある。じっと見つめ合う二人。

ころねの身体からは、本当の女の子の香りがした。

阿九斗は一瞬、どきり、とするが、ころねの表情はまったく変わらない。



「……ねぇ」
「はい?」
「そこに寝られると、寝にくいんだ……」
「そうですか。性的な興奮を感じてしまいますか」
「か、感情を読むな!」
阿九斗が抗議（こうぎ）すると、ひょいと立ち上がったころねは阿九斗を見下ろすと、表情を変えずにこう言った。
「冗談（じょうだん）です」
「……え?」
当惑（とうわく）する阿九斗だったが、そんな彼を尻目（しりめ）にころねは部屋の天井（てんじょう）近くにある棚（たな）を見上げている。
「ああ、あそこの収納スペース、何も入っていないようですので、そこで寝ます」
ころねは器用に蓋（ふた）付きの棚に登り、するりと中に潜（もぐ）り込んだ。
――に、人間じゃないと思って油断しているといけない気がする……。
阿九斗は途方（とほう）に暮れるしかなかった。
ともかく今日の所は寝てしまえ、と、目を閉じた。
「……………………」

が、なんとなく不穏な空気を感じて目を開ける。はっとして天井近くの棚を見上げると、棚の蓋が薄く開いており、その隙間からころねの緑色の瞳がこちらをじっと見つめていた。

「……ねぇ？」

「はい？」

「……ひょっとして、からかってる？」

「やや」

「………………」

「……………………………」

「………………………………」

「…………………………………」

「…………………………………ねぇ？」

「はい？」

「楽しい？」

「やや」

「……そりゃあよかった」

「はい」

——わ、わからない……わからない……。

阿九斗は布団を頭からかぶった。

3　ちょっと怖(こわ)い先輩(せんぱい)

気になる夢をみて目覚めた朝は、どこか落ち着かないもので、阿九斗(あくと)も目覚めはしたものの、ベッドの上でぼんやりと天井を見上げていた。

昔の夢を見ていた。何か懐(なつ)かしいような、甘(あま)く切ないイメージばかりが頭に残っている。チカチカと光る小さい宝石のことが気になるのだが、夢の内容までは思い出せない。

「何だったんだっけ……？」

阿九斗はつぶやいた。昔からの習慣で朝は早い。机の上の時計を確認すると、まだ五時半だ。寝直(ねなお)すよりは、と起きあがって伸びをする。と、阿九斗の動きが止まった。

「……おはようございます」

「…………おはよう」

ころねは昨日の晩と寸分違(ちが)わぬ位置から緑色の瞳で阿九斗を見つめていた。

「……一晩中？」

「そうですが」

「……疲(つか)れない？」

「まさか」
「……いや、まぁいいや」
　阿九斗はいろいろと質問をするのはあきらめた。
　ころねが彼女の寝台である棚から降りてきた。普通の女の子ならできるはずもない見事な動きで、軽やかに床に降り立つ。
「そういえば」
　不意にころねが言う。
「何が〝何だったんだっけ……？〟ですか？」
「夢を見たんだ。昔のことを思い出そうとしても思い出せない」
「記憶を探りたいなら、おっしゃっていただければ協力しますが？　脳内から何かを探り出せるかもしれません」
「そういうのはやめておくよ。さて、風呂に入ってくるよ」
　阿九斗は支度をした。入寮時にもらった注意書きには、朝も入浴可能とあったのだ。部屋を出ると、ころねもついてきた。
「入浴なんだけど」
「わかっています」
「……ええと」

「冗談です。脱衣所の前で待っています」
　ころねは毎度の無表情で言った。
　阿九斗は、ほっとして脱衣所に入る。
　朝の入浴組も何人かはいるようで、脱衣所にはいくつかの籠に服が入っている。服を脱いで浴室に入ると、シャワーを浴びていた二人が何気なく阿九斗の方を見て、顔を強ばらせた。二人は昨日ヒロシが騒いでいるところにからんできた二人組だった。
　阿九斗としても面倒なことになったな、とは思うが、これからここでやっていくにあたってはうまくやっていくしかない。
「どうも」
　挨拶して身体を流す。二人組は穏やかでない様子で声をかけてきた。
「おい。A組の委員長をやっちまったって?」
　どう答えてよいか悩んだが、阿九斗は肩をすくめて曖昧に言う。
「事故みたいなものです」
「いや、そんなツンケンするな。こっちは親切で言ってるんだ」
「妙なことを言いますね」
　ややけんか腰だった阿九斗だが、その時点で二人組の態度が以前とやや違っていることに気づいた。

「だから、俺たちも昨日の時点じゃ気づいてなかったんだが、もし委員長をやったんだったら、いや、そんな噂が立ってるだけで十分なんだが、気をつけたほうがいい」
脅すような調子は変わらないが、その根底には彼らが何かを恐れているらしいという理由があるようだ。だから、ある意味では、それは心からの忠告であるようだ。
「やっぱり、誰か喧嘩っぱやい人が狙ってくるということですか？」
「そうじゃない」
二人組は揃って首を横に振った。
「そうじゃなくて、委員長は本当に強かったんだ。中等部の三年をしめてたわけだ」
「それのどこがそうじゃないって言うんです？　しめるとか？　喧嘩の話じゃないですか」
阿九斗が不思議に思って聞くと、二人組は交互にこの学園の意外な姿を説明してくれた。
「俺たちが言うのもなんだが、この学園は暴れる奴が多くてな」
「そのせいで暗に、生徒達には表と裏の秩序ってもんができちまった」
「表ってのは一般の学生としての秩序だが、裏ってのは、魔術による喧嘩の強さのランキングみたいなもんだ。裏だから明確に何がどうってわけじゃないが、半端者やろくでもない奴の間じゃはっきり語られてる」
――普通の学校の不良みたいな……いや、魔術ってことだから、女の子も入ってくるのか、まさか……。
そう思った阿九斗は、つい口を挟む。

「すると委員長……服部さんは？」
「ランキング二位だ。委員長自身は裏の奴ら……生徒にゃ黒魔術の信奉者や、魔術を悪事に使うことをすでに決めている者もいる。そんなのが裏だ……まぁ、そんな奴らを委員長は嫌っていた。それでも彼女が強いからなんとかなってたわけだ」
　ろくでもない話だが、阿九斗にも理解はできた。
「それじゃ、現実がどうであれ、僕は委員長よりランクが上だと思われているわけだ」
　二人組も、ようやくわかってもらえたか、というようにうなずく。
「ああ。そういう風に認識された。俺たちもお前相手にいきがるなんてできねぇよ。でも、気をつけるんだな。ランキング一位を狙ってる奴もいる」
「冗談じゃない。僕はそういうのに関わりたくない。それに、帝国政府のリラダンが監視しているんだし」
　阿九斗がそう言うと、二人組はその言葉をさえぎる。
「抜け道なんていくらでもあるさ。ともかく気をつけるんだな。あと、以前にお前が言ってたように、俺たちはお前のファンってことでいいよ。お前がいろんなもんに勝って学校しめるようになったなら、俺たちはお前につくよ」
　二人組は揃って阿九斗の裸の背中を叩いた。
「風見鶏ってことじゃないですか」
「そうだよ。悪いか」

二人組は身体を流すと、浴室を出て行こうとする。
「あ、ちょっと」
　阿九斗は二人を呼び止めた。
「何だ？」
「一位ってのは、誰なんです？　服部さんはランキング二位だって」
「それがな……」
　二人組は揃って声をひそめた。
「わからねぇんだ」
「わからない？」
「そうだ。就職でいろいろ外に出ている三年と違って、ランキングは一年と二年が対象なんだが……一位はわからねぇ。こんなのは史上初めてのことだ」
「三位の奴がボコボコにされて、そいつが正体を知っているらしいが、誰なのか口をつぐんでしまっている。その話題だとひどく怯えるらしい」
「そんな無茶苦茶な……」
　阿九斗は絶句する。
「だが、本当だ」
「まぁ詮索はしないことだ。といっても、向こうからやってくるかもしれないぞ」

二人組は笑いながら浴室のドアを閉めた。

とたんに「いやぁ見ないでぇ」という野太い男の声が外から聞こえたが、阿九斗はそれを無視した。どうせころねが脱衣所(だつい)を覗(のぞ)いたに決まっているからだ。それを裏付けるように「無表情のまま笑うなぁ！　俺のが小さいみてぇじゃないか！」という声が続いて聞こえてくる。

──無茶苦茶な学校だな……と、ともかく、僕の学校生活を平和にするためにはどうしたらいいんだろう……。服部さんと協力してなんとかするのがいいんだろうけど、この状態だしな……。それに謝るにしても、きっところねから会うことを禁止されるし……。悩(なや)むところだな。とはいえ、服部さんとうまく仲直りできない限り状況(じょうきょう)は悪くなるばかりだよな……。

阿九斗は湯船につかりながら、ふう、と長大なため息をつく。

十分湯につかってから身体を流し、下半身を慎重(しんちょう)にタオルで隠(かく)して脱衣所に入った。出口の隙間(すきま)からころねが覗いていた。

「どうして人間は陰茎(いんけい)の大きさにこだわるのですか？」

ころねの方から口を開いてきた。さすがに普通(ふつう)の男ならぎょっとする質問であろうが、阿九斗の生真面目さも堂に入ったものだ。

「その方が生殖(せいしょく)の機会が多くて子孫を大量に残せそうだと思うからさ。その子孫が自分の子孫を将来的に排除(はいじょ)するだろうと予測されるので、脅威(きょうい)に思うんだ。という話を聞いたよ」

阿九斗は真顔で言った。

「そうですか。では、あなたの陰茎を見せて下さい。他の男性のものを見るたびに比較（ひかく）してあなたの相対的な大きさを報告してあげます」

「……それは嫌（いや）だ。というか、からかってる？」

「やや」

　無表情のまま言うころねを阿九斗は脱衣所から追い出した。

○

「兄貴ぃ！　一緒（いっしょ）に学校行きましょう！」

　寮（りょう）を出る阿九斗をヒロシが追いかけてきた。

「一緒に学校って、すぐ近くじゃないか」

「嫌だなぁ、どんなに短い距離（きょり）でも兄貴についていくと決めたんですから」

　ヒロシはへらへらと答え、早くも馴染（なじ）んだのか、ころねと朝の挨拶（あいさつ）なぞを交わしたりしている。

「そういえば……学園の情報通なんだっけ？」

　阿九斗はヒロシに言った。ヒロシは阿九斗に頼（たよ）られたのが感激なのか、ジーンと目を潤（うる）ませて阿九斗の手を取る。

「なんでも聞いてくだせぇ！」

「いや……そんなかしこまった話じゃなくてさ。実は裏のランキングがあるって聞いたんだけど」
阿九斗が言うと、即座にヒロシが答える。
「ハイ！　兄貴は二位になるんすよ！　すごいっす！　まさか昨日のあれが決闘の申し込みだったなんて！　てっきり愛していると思っていたんですが、まさか目的が強い女をコマして油断させてぶっ倒すなんてことだったとは！」
――やっぱりこいつが噂を広めてそうだな……。当然といえば当然か……。
「だから、そうじゃないってば。そのことは忘れろ。そ、それで、その一位ってのは正体がわからないんだって？」
「そうなんすよ！　いやー、やっぱり兄貴は学園をしめるために立ち上がるんすね！　なんだかんだ言ってもやる気なんだなぁ！　もしかして、正体を調べてこいって話なんですか？　やりますよ！　やりますよ！」
「い、いや……危険だって話だし、やらなくていいよ。わからないってんならいいんだ」
「そ、そうなんすか？　でも何でも言ってくださいね！」
ヒロシはまだ感激した様子で、空なんかを見上げている。
「いろいろあるのですね。自分は不干渉ですが、あなたの暴力行為は罰することになりますので」
ころねが言った。
「襲われたら、やられてろってこと？」

「いいえ。先に向こうが手を出すならば問題ありません」
「そういうことね……」
　苦笑いをする阿九斗だったが、その時、周囲がざわついているのに気づいた。寮生の誰もが使う通学路であるから、注目の的になるのは理解できる。だが、そのざわめきの質が違っていた。不思議に思った阿九斗が振り返ると、そこに阿九斗も驚くほどの美少女が立っていた。
　腰よりも下に届くほどの長い髪はよく整えられており、風が吹くと音楽でも奏でそうに見える。夢見ているような瞳に、優しい微笑みをたたえている口元。完璧なお嬢様像がそこに立っているとしか形容できない。
「あ、あなた様は、この学園一のマドンナ、江藤不二子様！」
　ヒロシがわかりやすい言葉で驚いてくれたため、阿九斗にもそれが誰なのか理解できた。わからないのは彼女が自分の背後からやってきた理由だ。
「ごきげんよう」
　不二子が阿九斗に挨拶をした。不二子は頭を下げていない。襟章を見ると上級生だ。



「おはようございます」
阿九斗は頭を下げた。
「あ、あの、兄貴にどんな御用(ごよう)ですか?」
ヒロシが先に質問をする。すると、口に手を当ててころころと不二子は笑った。
「いえね、いきなりお声をかけるような失礼をしたのは、わたくしが女子寮(じょしりょう)の寮長(りょうちょう)をしているからですの」
「寮長を」
阿九斗は驚く。と同時に、昨日のことを非難されるのだな、と来訪の目的を理解した。
「はい。先日は女子寮に曽我(そが)さんの服を届けてくださったそうで」
穏(おだ)やかな声で不二子が言う。
「あ、それは、このころねが……」
自分の予想とは違(ちが)う目的に驚きながらも、阿九斗がころねを指さすと、ころねはうなずいた後、小声で阿九斗にこう説明する。
「先日、江藤寮長とお会いして、曽我けーなの服のことと、服部絢子(じゅんこ)の怪我(けが)についての諸事情を説明しました。寮長ですので事情については正確にお伝えしてあります」

――すると、江藤先輩(せんぱい)は事情を大体知っていて声をかけてくれたわけか。いい人なんだな……とても綺麗(きれい)だし。ということは服部さんの件に協力してくれるかもしれない。

阿九斗は頭を下げる。そして、少し声をひそめて言う。

「あの、今度、服部さんの件についてお話できますか？」

「服部さんの？　どういうことかしら？」

不二子は一瞬(いっしゅん)だけ「あら？」と怪訝(けげん)そうに頬(ほお)に手を当てたが、小声でそう応じた。会話はころねとヒロシにしか聞こえていまい。

「いえ……仲直りがしたいんです。ただ、僕と直接顔を合わせるとトラブルになってしまうので……」

阿九斗はちらりところねを見る。ころねはきちんとそれを聞いていて口を挟(はさ)んでくる。

「服部絢子との直接面会はお勧(すす)めできません」

「そういうことなら、わたくしにお任せになって。メッセージは仲介(ちゅうかい)いたしますわ。わたくし、あなたがどのような行動をとったか伺(うかが)っていますので、あなたが魔王(まおう)になるなんて微塵(みじん)も思っておりませんもの」

「あ、ありがとうございます！」

阿九斗は改めて頭を下げた。

「そんな頭を下げられるほどのことはしておりませんわ。それではごきげんよう」

不二子は阿九斗の脇(わき)を通り過ぎる。ヒロシもころねも、阿九斗もぼんやりと不二子の後ろ姿を見送った。

「いやー、すげぇっす！　やっぱ不二子様は優雅っす！」

ヒロシはやたらと感激している。

「まったく……」

阿九斗はそんなヒロシの様子を見てぼやくが、歩き出そうとふと手を振った瞬間、制服のポケットのところで何かが指に触れたことに気づく。

「？」

ポケットに紙が差し込まれていた。

——ここにこれを差し込むことができるのは、江藤先輩だけか……。

阿九斗はヒロシところねがそれを見ていないことを確認すると、ポケットに紙を押し込んで隠した。

「それにしても、兄貴はすげぇ！　なんにせよ不二子様から声をかけられるなんて！」

「いや、もうそれはいいから……」

ヒロシをあしらいながら学校に着く。教室に入っても、当然、阿九斗は注目の的だ。昨日の教室破壊は印象に新しいどころの騒ぎではない。今も業者がやってきて外壁を修理中だ。さらには、どうやら委員長を卑怯な手段で倒したという噂になっていて、女子の視線も冷たい。

——暗い生活だなぁ。

どうやら絢子とけーなは休みのようだ。二人の机は始業直前になっても空のままだ。

「はい、おはよー」

美津子（みつこ）先生が教室に入ってきた。

「休みは服部さんと曽我さんねー。それじゃ授業はじめるよー」

魔術（まじゅつ）の初等教育の再確認の授業は担任である美津子先生が行うようだった。阿九斗としてははじめて聞く内容であるから、とても興味深いものだった。

「精神状態を関知するマナによって魔術の効果自体を召還（しょうかん）することが可能になります。体内のマナと空気中のマナは同じものですが、体内と体外を人間は分けて認識しますから、体内のマナ制御（せいぎょ）と体外のマナ制御を得意とする人に分かれます。それで二種類の魔術の種類があるように外見上見えるわけです。

その他に、マナの動かし方の種類にも術者の性格が表れます。それが約四種類。エネルギー波、治癒（ちゆ）、死霊（しりょう）術、幻覚（げんかく）、それぞれに体内、体外の別があり、八種類となります。それをマトリックスに展開して図示した場合、どの術が得意かによって対極にある術の系統は苦手と……」

しかし、阿九斗はやはりあのメモのことが気になっていた。授業は先生の言葉をすべてノートにとることにした。言葉の意味を考えなければ何か別のことをしながらでも書き取ることはできる。そうやって手だけを動かしながら、ころねの挙動を確認した。自分のすぐ後ろの席に座っているが、動き出しそうな気配はない。

阿九斗は不二子からもらったメモをこっそりと取り出した。メモ用紙には魔術的（まじゅつてき）に文字が刻まれていた。どうやら不二子がその場で書き留めたものらしい。

《今日の夜、本校舎地下の旧作戦室に一人でいらして。リラダンを振り切る方法はカンタン。リラダンには尻尾があって、それを引っ張ると機能を停止しましてよ》

——へぇ！　そんなことが！

阿九斗は驚く。そしてその驚きをころねに見られなかったかと心配になり、すぐにメモをしまった。

——ともかく、こうなっては江藤先輩だけが頼りか。なんとか夜にはころねを振り切って、本校舎の地下に行けばいいわけだな……。

それからは授業に集中することにした。授業の合間の休憩はノートの再確認に費やし、昼休みまでは誰とも会話せずに過ごした。

昼休みになって、ヒロシが食堂に行こうと誘ってくるのを断り切れずに、阿九斗は仕方なく同行することにした。が、阿九斗は心の奥からわき上がってくるそわそわした感覚を抑えきれずにいた。

——それにしても、尻尾があって、それを引っ張ると機能停止……？

目線がどうしてもころねの尻に向かってしまう。

ころねは人間ではないわけで、体形は制作者の思い通りのはずだ。そして、作った者の好みは小振りな尻であるらしく、スカートの上からでもうかがえるふくらみは引き締まっていて、スレンダーな女性が好みでない者でも見とれてしまうような美しさを持っている。

——なんとか二人きりになれないものかな……。夜になれば二人きりになれるには決まっているけれど、もし、尻尾が江藤先輩の冗談だったらどうしよう？　いや、江藤先輩が嘘をついていなくても、ころ

ねは政府から派遣(はけん)されたリラダンだ。特別製かもしれない。夜になる前に確認をしておかないと……。人目のないところで試してみたいな。いざというときに江藤先輩のところに行けませんでした、では困るから……。

「兄貴？　どうしたんです？」

　ヒロシの言葉で、阿九斗は我に返った。

「いや……考え事を……」

「どんなことっすか？　あっしにも何でも相談してくださいよ」

「何でもないよ」

　ころねの機能停止について考えていたなんて言えるはずもない。が、その否定が怪(あや)しいとヒロシには映ったらしい。

「いや、それは何かまだ気にしてる顔っす。あっしは兄貴とのつきあい長いからわかるっす！」

「二日も経ってないと思うよ……。ああ、でも教えてもらえるなら教えて欲しいんだけど」

「何です!?」

　話をそらすために適当な質問をしようとしたのだが、ヒロシの食いつきは良すぎた。そのせいで、ふと気になっていたことを口にしてしまう。

「曽我さんって、どんな人なの？」

「気になってるんすか？」

意外そうにヒロシが言う。

「いや、気になってるというか、休みだからさ」

「いや、さすが兄貴はすげぇ！　女子を残らず全員モノにしちまおうってことっすね！」

「いや、それはもういいから……で、どんな人なんだ？」

再度そう聞くと、阿九斗はどこか照れくさいものを感じた。女の子のことを気にするという行為そのものの照れくささもあるが、けーなのことを考えると、もどかしいような、懐かしいような気持ちになることに気づいたからだ。

「いや、変な子っすよ？　兄貴が気にするほどの女じゃないっす。悪い子じゃないんですが、魔法がからっきしで、飛べる以外はなんにもできません。魔法の才能がないんすね。そんなわけで、友達がいなくて、なんか本を読んで空想ばっかりしてるような子っす」

「それで、どうやって、この学校に入ったんだろう？」

「普通の勉強は得意なんすよ。ただ、ここじゃ魔法が使えないと落ちこぼれっすから」

「そういうことなのか」

阿九斗は、けーなに親近感を覚えていた。立場は違うが、どこか似たところがありそうな気がする。そんな感慨にふけっていると、不意にヒロシが言う。

「ところで兄貴」

「ん？」

「でも、考え事をしながら見ていたのは、ころねちゃんでしたよね？　やっぱり、全部の女をモノにしちまおうって算段なんすよね？　監視員のリラダンまでモノにしちまおうって計画を立てていたわけですよね！」

　ヒロシは興奮して食堂で大声を出す。当然ながら生徒達の注目が集まり、「ああ……」「そりゃスケコマシだからしょうがない……」という表情を阿九斗に向ける。

――そうじゃない……と言っても無駄だろうな……。

　阿九斗が唇を噛みしめていると、その話を聞いていたころねがいきなり口を開いた。

「監視員である自分は監視対象と性行為をしても感情は動かないようになっていますが、何か？」

　その赤裸々な言葉に食堂の生徒達はざわめき、顔を赤らめた。

「何もないよ！　そういう冗談はやめろ！」

　阿九斗は怒鳴った。

「冗談はやめられないので、これからも続けると思いますが、笑って許してください」

　ころねは冷静だった。

「すげぇ！　なんだかわからないけど兄貴はすげぇ！」

　ヒロシは興奮していた。

　阿九斗はもういろいろとあきらめたはずだったが、さらに何かをあきらめることにした。

「……ところで、だ」

　カレーを選んで、それを口に運んでいた阿九斗は、ヒロシに聞く。
「はい？」
「一人きりになれる場所はないものかな？　どうにもやかましくてかなわない」
「そうっすねぇ……」
　ヒロシは箸(はし)を口にくわえて考え込んだ。
「……校舎の裏山にはほとんど人が入りませんね。少々危険ですが、兄貴なら問題ないでしょう」
「危険？」
「人が来ないのは、魔物(まもの)がうろついていることがあるからです。滅多(めった)に出ませんが、裏山に入るのは自己責任ってことになってます」
「なるほどね……」
　阿九斗は時計を見た。昼休みはまだ半分残っている。カレーを一気にかきこんで立ち上がった。
「じゃあ、僕はこれから行ってくる」
「兄貴、お供しますぜ！」
「いや、来るな。危ないんだろ？」
「だけど、あっしは兄貴について行くと決めたんですから」
「落ち着きたいだけだよ」
「ですけど自分がついていきますので、どうしても一人きりにはなれませんが？」

ころねが口を挟(はさ)んできた。

すると、ヒロシは「ああ！」と得心したように手を叩(たた)いた。

「すんません。気が利かなくて」

ヒロシはいやらしい笑いとともにペコペコ頭を下げた。

阿九斗もさすがにヒロシが何を考えているのか察する。

「だから、そうじゃない！」

「いやいやいや……」

ヒロシは阿九斗ところねの背中を押(お)して食堂から追い出そうとする。

「ちょ、ちょっと待て……」

「いやいやいや……」

ヒロシは完全に二人を食堂から押し出すと、ハンカチを取り出して「ごゆっくりー」と送り出す。

「そうじゃないってば……！」

阿九斗はまだ抵抗(ていこう)するが、その阿九斗の袖(そで)をころねが握(にぎ)る。さらにはわざとらしく頬(ほお)を赤らめてみせた。

「はじめてなので優しくしてくださいね」

「だからそういう冗談(じょうだん)はやめろ！」

阿九斗は怒鳴ったが、それを見ていた生徒達の反応は「さすがに魔王ともなると性欲が抑えられない外道なんだな……」とか「監視員のリラダンは暴走する魔王の性欲処理も兼ねてるのか。人造人間とはいえ可哀想に」とか「まったく魔王はうらやま……反吐が出る」だったので、もはや他人の目を気にして自分の行動を変えることがさすがに馬鹿らしくなってしまう。

「ああ、もう……」

阿九斗は歩きはじめた。

○

「何のつもりか知りませんが、行動が裏目裏目に出ていますね」

後をついてくるころねは平然と言い放つ。

「君……監視員と言いながら、ずいぶん僕に影響を与えていないかい？」

「そうでしょうか？」

「そうだよ……」

ぼやきながら校舎を抜けて裏に出ると、すれ違う生徒達の数が減ってきた。なるほどヒロシの言うとおりだったらしい。木々の間に作られた道をしばらく行くと、生徒達の声も聞こえなくなった。魔物が出るのかも知れないが、今は静かな公園の遊歩道のようにしか感じられない。

「ありがたいな。静かになった」
阿九斗は遊歩道脇の木に寄りかかって座った。
「そうですか。それはよかった」
ころねは他人事のように言って、阿九斗の脇に立った。
「君が来てからやかましいんだよ」
阿九斗はそう言ってころねを見上げた。ころねはどこか遠くを見ているのか阿九斗には注意を払っていない。下からのアングルで、短いスカートの中が下から見えそうになっている。
——尻尾がついているかどうかを確かめるチャンス……かな。
阿九斗は木に寄りかけた身体を少しずつずり降ろしていく。
アングルが段々と変わってきて、ころねのスカートの後ろ側から、ちらちらと白い下着が見えはじめる。
ただ、まだ尻の上側までは見えていないわけで、尻尾を確認するためにはかなり身体を沈めなければ駄目のようだ。
——も、もうちょっと……。
阿九斗はほとんど身体を横たえんばかりにずり下げた。阿九斗は自覚していないが、傍から見たらほとんど変態である。
——あと少し……。
と、その時……。

ごっ！

「あ痛！」

阿九斗は頭頂部を何者かに殴（なぐ）られた。その衝撃（しょうげき）で身体を完全に地面に横たえてしまう。しかも頭をころねのお尻の下に滑（すべ）り込ませてしまう格好で。

――な、何だ？

阿九斗は面食らう。が、周囲を見回しても誰もいない。

「どうしました？」

ころねが聞いてきた。

「だ、誰かに殴られた……んだけど」

阿九斗は、わけがわからない、と目をぱちぱちさせる。

「誰もいませんが」

「おかしいな……」

「おかしいのはあなたの格好ですが」

ころねが不思議そうに阿九斗に言った。

阿九斗の視線の先にはころねの顔がある。その手前に形の良い脚（あし）とお尻。阿九斗は完全にころねの脚の間に頭を突っ込んでいた。



「あ……」
「完全に変態ですね」
　ころねは冷静に言ったが、慌ててその場を移動する。「感情はある」と言っていたので、恥ずかしいのかもしれない。が、そのとき、スカートが翻って、確かに阿九斗は見た。腰の部分がかなり下がっている下着の上あたりに、うさぎのような小さな尻尾が生えているのを。
　――あ、尻尾。本当にあった。
　声には出さずに阿九斗は感嘆した。
「パンツを見るためにここに来たのですか？　わけのわからない人ですね」
　ころねの言葉で、阿九斗は恥ずかしくなって起きあがる。すると、さっき頭を殴ったのが誰なのかが気になってきた。周囲を見回すが、やはり誰もいない。
「それはそれとして……ホントに誰もいない？」
　阿九斗は聞く。
「誤魔化している……わけではないですね。誰かいたのですか？　マナは揺らいでいませんが？」
　ころねは周囲を光る目で見回しながら言った。
「いや……それなら、それでいいんだ」
　阿九斗は首をひねる。と、ころねが前言を撤回した。
「いえ、マナに乱れが。接近してくる生物があります。人間ではありませんね」

森の奥にころねが目を向けた。

次のころねの言葉と、その魔物が木々の間から顔を出してきたのが同時だった。

「魔犬です。体内に取り込んだマナにより変質した犬ですね。このあたりで繁殖しているのかもしれません」

魔犬は通常の犬の二倍ほどの大きさ。牙も長く、その間からよだれと荒い息が漏れている。目に凶暴な光をたたえて阿九斗の方を見据えていた。

「魔物の排除には政府の許可は必要ありません。駆逐します」

ころねがいつもぶら下げているポシェットに手を突っ込んだ。中からとてもポシェットに収まっていたとは思えぬサイズのいかつい銃が姿を現す。銃口のサイズからするに、一撃で魔犬の頭くらい吹き飛ばせそうだ。

それを見た阿九斗は慌てる。

「ちょ、ちょっと待って。魔犬ったって、元は犬だろ？　殺さずに済ませよう」

「しかし、凶暴ですよ？」

「マナにより変質したのなら、マナを抜けばいいんだろ？」

「そういった処置を行った魔術師はこれまでいません」

「誰もやったことがないのか。それなら試してみる価値はあるんじゃないのかい？」

阿九斗は両手を拡げて魔犬に歩み寄った。

「危険です」

　ころねが止めた。

「いや、出来そうな気がするんだ。どういうわけかわからないけど。それに、今日の授業でマナのコントロールの理論はわかったし」

　阿九斗は一歩、また一歩と魔犬に近づいていく。

「理論でなんとかなるなら世界は魔術師だらけです。危険を感じ次第、駆逐します」

　ころねは銃を構えた。

　今や魔犬はその身体を大きくたわめ、阿九斗に跳(と)びかからんとしている。その脚の筋肉の緊張(きんちょう)が解き放たれようとする刹那(せつな)――ころねが銃を撃(う)つよりも早く、阿九斗の拡げた手から白い光が放たれていた。

　――できた！

　阿九斗としても内心意外だった。だが、確かに掌(てのひら)から放出したマナにより体外のマナをコントロールすることに成功していた。魔犬の身体が同じ色の白い光を放っていた。その光は魔犬の体内からあふれ出ているのだ。

「マナが体内から抜き出されています。九十パーセント……八十パーセント……」

　ころねが報告する。

　そのカウント通りに魔犬の身体の中から出た光の量は減っていく。それにつられて魔犬の顔から凶暴さも消えていった。
「魔物の体内よりマナを抜き去る処置を行った魔術師がいないのは、それが不可能だったからです。今回のことは記録し、報告します」
　ころねはそう告げると銃をポシェットにしまった。
「そうすると、僕は何をしたってことになるんだい？　僕にとっては簡単にできたんだけど……」
　阿九斗はころねを振り返った。
　魔犬はただの犬になっていた。毛足の長いムク犬だ。驚いたようにくしゃみをすると、尻尾を振りながらその場で回転をはじめる。
「犯罪ではないので処分はないでしょう。ただ、データが研究対象にはなりますね。意外です……　それにしても」
　ころねは珍しく感情的な言葉を発した。相変わらず無表情ではあったが。
「意外？」
「あなたが犬を救ったということです。これまでの行動からすると、女性を傷つけたり、女性の下着を拾ったり、女性の下着を覗いたりしていたのですから、悪い行動をする人間だとばかり……」
「恣意的に行動をピックアップしてるだろ……」

阿九斗は呆れながらも、まだ回っている犬の尻をぺちぺちと叩いてやる。こうなると単なる野良犬であるから、学校の方に行けば誰かが拾ってくれるはずだ。犬は学校の方に走り出し……たと思いきや、途中でいきなり方向を変えた。なぜか何もない空間に向かって一直線に突っ込んでいく。

——？

阿九斗が不審に思ったその瞬間、いきなり悲鳴が木々の間に響いた。

「きゃあああ！　犬ぅう！　こっちに来ちゃ駄目ぇえええ！」

何も見えないが、確かに声はする。そして、確かに犬はじゃれついて何かを追い回している。

その声に阿九斗は聞き覚えがあった。

——曽我……けーな？

と、犬のじゃれついた先に、女の子の姿が浮かび上がった。赤毛が空間にふわりと拡がる。その毛の間から白い肌の色が見える。どうやら、けーなは全裸らしい。

——え？

驚く阿九斗の目の前で、けーなはゆらめいて見えなくなった。だが、犬は相変わらず何かを追いかけ回している。つまり……。

「まさかとは思ったけれど、やっぱり彼女は姿を消すことができるってことだったのか」

阿九斗はころねに確認するように言った。

「そのようです。自分も視認しました。彼女が姿を消すとマナもトレースできなくなるようです。リラダンの自分にも関知できないとなると、完全に透明（とうめい）、ということです」
　ころねはうなずいた。
「でも、犬が追いかけているということは……」
「微細（びさい）な臭（にお）いは残っているのでしょう。あとは洋服も……」
「身につけているものは消せないのか」
　阿九斗は犬の追いかけている先を目で追った。
——それなら、どうして僕を追いかけるような真似（まね）を？　透明になるためにはわざわざ服を脱（ぬ）がなくちゃいけないってのに……？
　すると、阿九斗は視線の先にきらりと光るものを見つけた。先日も見たあの光だ。この瞬間、阿九斗の中で何かが繋（つな）がった。
　つまり、あれはけーなの身につけている髪飾（かみかざ）り……。昨夜の夢のあの懐（なつ）かしい感覚……。髪飾りそのものに見覚えが……。
「あ！」
　阿九斗は過去を思い出していた。自分が全財産をはたいて買い込んだ宝石。そのときは〝これからは自分で金を稼（かせ）ぐ〟という決意の証だったが、今になってみると〝そんな自分のことを覚えておいて欲しい〟という意味合いも確かにあったのだ。

――そうなると、僕を追いかけるような真似をしていた意味もわかる……。

はっとして阿九斗は駆けだした。けーなは先へ先へと逃げ出している。犬はどこまでもついていく気なのか、学校の方へと走っていく。

阿九斗は飛んでいく小さな光を追う。普通なら見失いそうだが、犬は透明なけーなを追っているわけで、犬についていけば見失うことはない。

犬は昼休みの校舎に駆け込んだ。生徒達が何事かと驚き、犬と阿九斗を避ける。けーなは混乱しているのか、階段を駆け上がったり、また降りたり、めちゃくちゃに走り回っている。けーなは時折、悲鳴を上げているようだが、周囲の生徒達の喧噪にかき消されて野次馬たちはけーなの存在には気づいていないようだった。

――どうなってんだ、こりゃ……。困ったな……。どうやってこの場を収めたものか。あ、もしかして犬が嫌いなのか？　ええと、そうなると、ともかく犬をなんとかすればいいのか？　それから彼女と話ができれば……。

阿九斗は後ろから犬を抱え上げた。そして野次馬をしていた女子生徒の一人に「はい」と手渡す。もらった女子生徒は「え？　ど、どうしたら……」と混乱していたが、基本的に動物好きだったらしく、犬を抱きかかえたまま放すことはなかった。「あげる」と言って、阿九斗は、混乱して逃げていくけーなの追跡に戻った。

髪飾りだけが頼りで見失いかけたが、けーなはさすがに疲れたのか校舎の中をゆっくりと、だがどこか目的がありそうな気配で進んでいく。

——彼女から見えない方がいいのかな……？

阿九斗は廊下の曲がり角に姿を隠しつつ髪飾りを伺う。どうやらけーなは注意深い性質ではないらしく、犬も阿九斗も撒いたと思っているのか、校舎の地下へとのんきに髪飾りは漂っていく。

見つからないように追跡していくと、普段使われている形跡のない学用品倉庫の扉が開いた。髪飾りはその中に入っていく。ぱたりと扉が閉まる。

——あたりに人はいないな……。あそこに踏み込めば、ゆっくり話はできそうだ。いや、今すぐに踏み込むと、彼女は全裸なわけで……。あ、あそこに何か目的があるかのように入っていったということは、あそこに服が置いてあるんだろう。それなら、服を着る時間だけは待つか……。

阿九斗はそう考え、しばらく待ってから足音を忍ばせて学用品倉庫に近づき、素早く扉を開けて中に滑り込んだ。

「きゃあああ！」

悲鳴があがった。

阿九斗が見たのは、これから服を着ようとしていたのか、全裸で下着をぶらさげているけーなの姿だった。

——服着るのにそんなにかかるのか？

阿九斗は驚（おどろ）くが、けーなはそれよりもさらに驚いたらしく、姿を消すことも忘れて、学用品倉庫の唯（ゆい）一（いつ）の出口から逃げだそうと走り出す。もちろん全裸のままで。しかし、唯一の出口というのは、入り口でもあるわけで、もちろんそこには後ろ手に扉を閉めた阿九斗が立っている。

「うわぁあああ！」

阿九斗は慌（あわ）てた。阿九斗からすると、全裸のけーながいきなり突っ込んできたわけで、どうすることもできない。

ごち。

頭をぶつけて二人はごろごろと床（ゆか）に転がる。周囲に積み上げられていた教師用の大きな定規や予備の黒板消しやらが降りかかってきて、抱き合って転がった二人の身体の上に散らばる。

「あ、ご、ごめん……！」

阿九斗はけーなにのしかかるような格好、というか事実のしかかっていることに気づき、立ち上がろうとした。

「きゃ！　だ、駄目（だめ）！」

けーなは、すぐにはっとして阿九斗にしがみつく。下からしがみつくような格好だ。

「うわ！　ちょ、ちょっと離（はな）れてくれないか」

「だ、駄目……だって、離れたら、見えちゃう……！」

けーなは顔を赤らめ、さらに強く下から腕（うで）をからめてくる。

「だ、だけど、それじゃ、さらに恥ずかしくないかい……？」

「そ、それじゃどうしろって言うんですかぁ！」

うわーん、と泣きながら、けーなは阿九斗に身体を押しつける。

「だ、だから、目をつぶっているから、離れてくれ。その間に服を……」

阿九斗が言いながら目をつぶるが、けーなはいやいやと首を振る。

「信用できません！　きっとすぐに目を開けて裸体をなめ回すように見ながら、〝ぐへへねーちゃん良い身体してるやんけ〟って笑うつもりなんだわ！　ええ、どんなに真面目そうな男でも、そういうときだけはそうなるって昔から言われてますもの！」

「今の状況の方が、よっぽどまずいと思うんだが……」

「だって、今は今でしょう？　今、この状況から何も起こらないんだから、今は大丈夫なんです。あなたは優しい人だってわかってますし」

「優しい人だって思うなら、目をつぶっているという約束は守ると思うんだけど……」

けーなの言葉に阿九斗は首をひねる。

「それとこれとは別です。優しい人でも、嫌らしいことを考えると豹変するはずです」

「あのねぇ……」

　阿九斗は呆れるが、このどうしようもなく間抜けなやりとりがどこか可笑しくなって、少し笑ってしまう。
「な、なんで笑うんですか？」
　そう戸惑うけーなだが、やがて阿九斗につられて笑い出してしまう。
「え……えへへ……笑うと、なんか楽しいですね……」
　阿九斗は、そのへらへらしたけーなの顔を間近に見て、確かにあの孤児院のときの子だと思う。
「ねぇ、もしかして、だけど、僕ら昔に会っていないかい？」
　阿九斗が聞くと、けーなは意外そうに目を丸くした。
「え？　そんなことないと思いますよ」
「ちょ……じゃあなんで、はじめて出会った僕の監視員になろうとしたり、その後も追いかけてきていたの？」
　阿九斗は意外なほどショックを受けて、狼狽しつつ聞いた。けーなはその狼狽ぶりがどうしてなのかわからなかったようで、あれあれ？　と目を白黒させる。
「へ？　だって、もうそれは説明したじゃないですか？」
「説明されてないよ」
「だから、あたしは竹藪で休んでいるのが好きなんですよ」
「いや、そこ聞いてないんだけど……」

「普通わかるじゃないですか」
「え？」
どうにもずれているけーなに、阿九斗はぽかんとする。
「学校をさぼってまで？」
「そうですよ。だって、あたしは魔術の成績悪いですもの」
物わかりの悪い奴に教えてやる、という態度でけーなが言う。
「あたしが休んでいるところで、あなたみたいなのが来たら、それはもう何か二人の間には意味があると思うに決まってるじゃないですか」
「意味……？」
「出会いはすべて運命なんじゃないかって、そう思いません？　だから、その運命に抗うことも素敵だけど、やっぱりそれに流されてみないと素直に人生を楽しむことはできないと思うんです」
けーなは自分勝手にまくしたてはじめる。
「だから、あなたがあたしを監視員だと思ったから、あたしは監視員になろうと思ったんです。監視員っていうのが何かわからないけれど」
「わからないのかよ！」
思わず阿九斗は突っ込むが、けーなはその突っ込みの意味もわからないようで、むしろ阿九斗の物わかりの悪さに呆れている様子だった。

「わからなくても問題ないでしょう？　あたしが考えた監視員になると思ったんだから、あたしが考えた監視員にあたしはなるべきだし、それで問題ないじゃないですか」
「不思議な理屈だ……」
「理屈じゃないです。真実です。あたしは、昔から本物がわかる女として有名なんです。昔からおもちゃじゃなくて、本物の宝石の入った髪飾りをつけてるくらいなんですから」
　けーなはそう言って頭を振って見せた。その髪飾りは鳥の意匠で、本物の宝石がはめ込まれている。
　——やっぱり、あの髪飾りだと思うんだけど……。
「だから、本当に覚えていないの？」
「何をです？」
「その髪飾り、僕があげたものじゃないか」
　阿九斗はけーなが思い出してくれることを期待するが、やはりけーなは不審に思っただけの様子だった。
「そんなはずないですよ」
「じゃあ、それはどうやって手に入れたものなんだ？」
「それは……」
　けーなは考え込む。
「えーと……覚えてないです」

「ちょっと！」
「だって、覚えていないんですもの」
平然とけーなは言い放つ。
阿九斗が言葉を失っていると、けーなは自慢げにこう続けた。
「でも、あなたがあたしにくれたものだって思いたいってことはわかりました。つまり、あなたがあたしと出会ったことを、あたしがそう思っているように、運命だと思いたいわけですよね？」
「え……？」
——そういえば、なんで追いかけてきたんだっけ？　とはいえ、逃げると追いかけるよな？　それだけか？　いや、昔のことを確かめたかっただけで、そうじゃないとなったら、もう彼女はあまり関係ない人なわけで、だけど、自分にこういう対応をした子ははじめてだな……。って、僕は何を考えているんだ？
阿九斗は混乱してきた。
「そう思ったほうが楽しいでしょう？　きっと人間同士なんてそんなものです」
けーなはそう言って笑った。そのどちらかといえばだらしない笑顔を見ていると、どういうわけか阿九斗はけーなの言っていることを納得させられてしまった。
妙な沈黙が流れた。阿九斗がその気まずさから何か話しかけようとしたそのとき、いきなり頭上から声が振ってきた。
「あなたの行為は犯罪だと思われます」

ころねの声だった。
　ぎょっとして阿九斗は顔をあげる。
　ころねが自分を見下ろしていた。扉を開けた音はしなかったから、また例の瞬間移動を使ったのだろう。
「は、犯罪？」
「強制わいせつ罪の疑いが強いです」
「ちょ……そんなことしてないって……！」
「状況的に言い逃れはできませんが」
「事情はわかってるだろうに！　彼女が姿を消すには服を着ていちゃいけないわけで……」
「それとあなたが彼女を押し倒すかどうかは別問題です」
「あの……」
　言い争っているころねと阿九斗に、けーなが割って入る。
「犯罪だと、どうなるんですか？」
「未成年ですので、保護処分を行うか否かの審判が行われます。自分は審判を行う権利を有していますので、自分の判断により少年院に送致するかどうかを決定します」
　ころねは冷静に言ったが、けーなには何を言っているかがわからなかったようだ。
「は？　はぁ……そうなんですか」

「いや、そうなんですか、じゃなくて、僕が悪いことをしていないって言ってくれれば問題ないんだよ！」
　阿九斗は必死になった。
「え？　なんであたしが？」
「だから、偶然こうなったと認めてくれれば、それで僕は何もないわけ！」
　すると、それまでぼんやりとしていたけーなが、「そうか！」とにやりと笑う。
「じゃあ、あたしが嫌がってないなら、問題ないんですか？」
　けーなはころねに聞く。
「そうです」
「じゃあ……」
　けーなは阿九斗に顔を向けた。
「そう言ってあげますから、お願いを聞いてください」
「う……」
　阿九斗は言葉に詰まった。
　――こりゃあどうしたものか……。とはいえ、これ以上、トラブルを抱え込むわけにはいかないし……。
「さぁ、どうします？　さぁ、さぁ！」
　にやにやしながらけーなは迫る。

――こうなると、この女、最初から僕を罠(わな)にはめるつもりだったんじゃないのか？　そうでないなら性格が妙すぎる。過去のことも覚えていて、すっとぼけてるんじゃないだろうな？　もしかしたら、子供の頃(ころ)からずっと僕のことを監視(かんし)していた……。

　混乱しすぎて阿九斗はわけがわからなくなっている。

「さぁ、さぁ！」

　しかし、けーなは決断を迫ってくる。

　結局、阿九斗は折れた。

「わかった。だから……」

「ということですので、あたしがこの人に抱(だ)きつきました」

　けーなはころねに言った。

　ころねはあっさりと納得した。

「わかりました」

　ころねはけーなの服を持ってくる。

　阿九斗は顔をそらして立ち上がる。

「えらいあっさりしやがって……」

　けーなはころねの手を借りて服を着ているらしい。ごそごそいう音と、「はい、ばんざーいって手をあげて」などというころねの声が聞こえてくる。けーなが着替(きが)え終えたことを告げて、阿九斗は改めてけーな

の顔を見た。
無邪気(むじゃき)というか、馬鹿(ばか)そのものというか、ともかく阿九斗にとってはわけのわからない表情をしている。
——なんだ、この子は……。しかし、僕は、この子のお願いを聞かなきゃいけないわけで……。それがもし、僕の魔力(まりょく)を使って金を稼(かせ)いでこいみたいなものだった場合、どうしよう……。
悪人顔の割りには、そんなまるっきりド善人なことを阿九斗が考えていると、けーながにっこりと阿九斗にほほえみかけた。
「それで、お願いなんですが……」
「はい」
阿九斗は緊張(きんちょう)した。
「友達になってくれますか?」
「え?」
「友達になってください」
「……はい」
阿九斗は機械的にうなずいたが、それからしばらくしてから何を言われたかに気づいた。
——なんか意外なことになったな……。それだけといえばそれだけなんだけど……。それに僕にとっても望ましい結果になったような気もするけれど……一方、もしかして、生涯(しょうがい)はずせない重い荷物を背負ってしまったような気もするし……。

そのとき、昼休み終了のチャイムが鳴った。
午後の授業は、またもクラスメイトの注目が阿九斗に集まることになった。普段、かなりの割合で授業に出てこないけーなが、阿九斗と連れだって教室に現れたからだ。
「すげぇや！　さすが兄貴だ！」
ヒロシだけはやたらと興奮していた。
阿九斗は無理に平静を装うしかなかった。

○

その日の授業が終わって、寮に戻って夕食をとった阿九斗は、とにもかくにも気持ちを整理して大仕事に挑む決意をしなくてはならなかった。
――さて、これからが大変だ……。
毎度の無表情のまま部屋でくつろいでいるころねを横目で見る。尻尾があることは確認した。夜の自由時間には、あれを引っ張らなくてはいけない。
緊張の面持ちでころねを伺っていると、さすがに不審に思ったらしいころねが阿九斗に目を向けた。
「どうしました？　呼吸が異常です」
「い、いや、なんでもない」

「病気ではないようですが、心因性のものもあります。気をつけてください」

さりげなく失礼なことを言い、ころねは再び真剣（しんけん）に阿九斗のベッドでごろごろする作業に戻った。

――くそ、もうこの場で尻尾を引っ張ってやろうか……。

阿九斗はころねの隙（すき）をうかがうべく、腰掛（こしか）ける場所を椅子（いす）からベッドに移した。ここからならばころねの尻（しり）に手が届く。

――だけど、いざとなると緊張するな……。

ころねの尻をまじまじと見ていると、犯罪をしようとしている気持ちになってくる。ベッドに転がっているころねの下着ははっきりと阿九斗に見えているわけで、そちらにそろそろと手を伸（の）ばしていくと、これはもう自分が痴漢（ちかん）か強姦魔（ごうかんま）になったとしか思えない。

――も、もうちょっと……。

汗（あせ）があふれてくる。さとられまいと思うと、よけいに心拍数（しんぱくすう）が跳（は）ね上がる。

――あと少し……。

どんどんどんどん！

「ぎゃあああ！」

阿九斗はいきなりの物音に跳（と）び上がった。

窓が外から叩かれたのだ。悪事を発見されたときの犯罪者の顔で振り返ると、窓の外ににこにこ顔のけーなが窓を叩いている。

――そういえば、ここ一階だ……。

表情からするとけーなは何も気づいていないようだ。平静を装って阿九斗は窓を開けた。

「な、何？」

「友達が訪ねてくるのに理由はいらないでしょう？」

けーなはそう言って、よっこらしょ、と窓から入ってくる。

「あ、こら……」

「友達、友達。一緒に食べよ」

けーなは持っていたお菓子の袋を阿九斗に向かって突き出す。

「女子がこっちの寮に来ていいのかい？」

「みんなよくやってるよ。時間までに帰れば大丈夫」

けーなは勝手にベッドに座り込む。ころねも身体を起こして、片手を上げてけーなに挨拶した。

「ようこそ。それにしても彼に友達ができたのは、彼の精神衛生上よいことです」

「そーでしょ。うんうん。ころねちゃんはよくわかってる」

けーなはお菓子の袋を開けてベッドの上に置く。せんべいだった。

「あ、こら、カスを散らすなよ」

「あとで払えば大丈夫だよ」
けーなはせんべいをばりばりとやりはじめる。
「ころねちゃん、食べる？」
「食べることはできますが、廃棄物が出るのが面倒なので結構です」
「そっかー残念」
意味はわかっていないのだろうが、けーなは納得してうなずき、今度は阿九斗にせんべいを差し出した。
「あげるー」
「……はいはい」
阿九斗はせんべいを受け取って食べる。
――これでころねの尻尾を引っ張りにくくなったぞ……。
内心そう思っていると、けーながいきなりころねの尻に手を当てた。
「ころねちゃん、そうやって寝っ転がってると、パンツ見えるよ」
「部屋にいるうちはごろごろしていないと緊張すると彼が言うので」
「でも、さっき、お尻触ろうとしてたよ」
けーなが阿九斗を非難がましく見た。
阿九斗の心臓が跳ね上がる。
「リラダンの尻を触ることは犯罪ではないので」

ころねはずれたことを言う。

「駄目(だめ)だよ」

けーなが阿九斗を叱(しか)る。

――これは、さらにやりにくく……。

阿九斗は内心汗を流しながら曖昧(あいまい)に微笑(ほほえ)んだ。

「わ、わかった。というか、誤解だから……」

「誤解ならいいけど」

けーなはせんべいをバリバリと食べ続ける。阿九斗はひとつしか食べていないが、みるみるうちにせんべいは減る。

「ねー、あーちゃんはさー」

「あーちゃん？」

「そう呼んでいいでしょ？　あたしはけーちゃんでいいから」

答えは聞かずにけーなは話を続ける。

「あーちゃんは、ごはん好き？」

「ごはん？」

「ごはん」

けーなはうなずく。

「ごはんって言っても、食べ物一般の話じゃなくて、白いごはんね。お米」
「えーと……まぁ、普通に……」
　阿九斗が適当にうなずくと、いきなりけーなは身を乗り出してきた。
「好きなの！　ねぇ！　それじゃ、炊飯器を部屋においといてよ！　そしたらあたし毎日来るから！　あたしの部屋に炊飯器置くのは禁止されちゃったから。あーちゃんの部屋なら大丈夫だよね？」
「いや、大丈夫かどうかは……そもそも、なんで炊飯器を？」
「あたし、ごはんだけ食べたいときがあるの。だって、ごはんって素敵でしょ？　白くて、つやつやして、まるで宝石みたいでしょう？　宝石みたいなのに食べられるなんてさらに素敵！　まるで無数の真珠が口の中でころころと転がって、噛むとすぐに香りと甘さが拡がって……」
　けーなはなぜかうっとりとごはんの話をしている。
「炊飯器は……置かない」
　阿九斗がぼそりと言うと、けーなは食って掛かる。
「駄目だよ！　欲しい、欲しい！」
「なんで言うとおりにしないといけないんだよ……」
「そういうこと言うと、あーちゃんがエッチなのみんなにばらすよ？」
「僕はすでにもっとすごい次元で誤解されてるよ！」
「そなの？」

けーなが確認するようにころねを見る。ころねは無言でうなずいた。
「そっかー。大変だね。あーちゃん、ホントは真面目なのにねー」
けーなは何気なく言ったのだろうが、阿九斗にとってはありがたい言葉だった。絢子のときもそうだったが、内面をわかってくれる人にはとても弱いのである。
「そ、そうなんだよ……」
阿九斗が心底感動したようにうなずくと、けーなは不思議そうな顔をしていた。
「おせんべい、もいっこいる?」
阿九斗はもう一枚せんべいをもらった。
「ありがとう」
「あげたんだから炊飯器を……」
「駄目」
「えー、だってごはんはすごいんだよ……」
それからけーなは延々とごはんの素晴らしさを力説した。阿九斗は呆れたが、ころねはなぜか興味を持ったようで「炊きあげた米が人間の精神にそこまでの影響を及ぼすとは」などと感心したようなことを言っていた。
「ああ、みんなが一緒にご飯を食べられれば世界は平和になるのに」

けーなが無茶なことを言っていると、ころねが「ありますよ」とポシェットに手を突っ込んだ。取り出したのは、スイッチのついた筒状（つつじょう）のものだ。どう見てもバズーカ砲（ほう）としか思えない代物だ。

「軍用の薬物散布機です。広範囲（こうはんい）に薬物を散布し、敵部隊には毒物を、味方部隊には治療薬（ちりょうやく）を一斉（いっせい）に投与（とうよ）することができます。これにご飯を入れれば……」

「やめなさいって」

阿九斗は肩（かた）をすくめた。けーなは「どうしてー？」などと口を尖（とが）らせる。

馬鹿（ばか）な会話はそれからも続いた。それは阿九斗にとって心の和む時間ではあったが、夜が更（ふ）けていくと、段々と焦（あせ）りが心に生まれてくる。

――早く江藤先輩（せんぱい）に会いに行かないと……。

「えーと、そろそろ帰らないと駄目じゃない？」

ごはんの話を遮（さえぎ）って阿九斗は言った。

「え？　もうちょっといいでしょ？」

「いや、ほら、僕も勉強しなきゃいけないし……」

「もう、しょうがないな……。あたしを追い出して、なんかころねちゃんに変なことするつもりじゃないの？」

けーなは口を尖らせる。

阿九斗は、その妙（みょう）な勘（かん）の良さにどきりとするが、強ばった笑顔で否定する。

「ソンナコトナイヨ」
「えー……。むー、じゃあ明日ね」
　しぶしぶ、といった調子でけーなは立ち上がった。
「ホントに変なことしちゃ駄目だよ」
　念を押してから、けーなはよいしょ、と再び窓を乗り越えた。
　阿九斗はけーなの後ろ姿をしっかりと見送ってから窓を閉めた。
「ふう……」
　けーなが残していったゴミを片づけ、ベッドに座る。
　すると、その隣にころねが、すす、と身を寄せてきた。
「では、邪魔者もいなくなったところでしっぽりと」
　ころねは無表情のままで言った。
「いいかげん、そのタイプの冗談やめようよ……」
「いえ、性欲処理をしなかったがために性犯罪者になってしまったのだとすると不憫で」
「だから、曽我さんの件は誤解！」
「そういうことならそれでいいです。ですがお尻を触ろうとしたわけですよね？」
　ころねの言葉に、再び嫌な汗が流れはじめるが、阿九斗は「待てよ」と思う。

——チャンスはチャンスかもしれないぞ……。
「触ろうとして悪いか。犯罪じゃないんだろ？」
「リラダンに対してはそうです」
　ころねがうなずいた。
——このタイミングなら……。
「そんなに触られたいなら、やってやるさ」
——ああ、なんかとっても格好悪いなぁ……でも……。
　阿九斗は内心、死ぬほどびくびくしながら、ころねの尻に手を伸(の)ばした。人造人間とはいえ、人間とまるで変わらない柔(やわ)らかい感触(かんしょく)が掌(てのひら)にある。
「ん……」
　ころねは顔を赤らめて吐息(といき)を漏(も)らした。
　ぎょ、として阿九斗の手が止まる。
「あ、ご、ごめ……」
「なーんてね」
　ころねが再び冷静な表情に。
「……………………」
　阿九斗は絶句した。

──そ、そうだ、目的は……。
すばやく手を滑らせ、ころねの腰に指を持っていく。小さな尻尾に触れた。
「あ……」
ころねが何事かを言おうとした瞬間、阿九斗は尻尾をつまんで引っ張った。
ブン……。
小さく音が響いて、ころねが動きを止めた。
──だ、大丈夫なのか……？
阿九斗はころねの目を覗き込む。確かに目の色が消えている。
──ふう……本当に止まってくれた……。でも、冗談じゃあ……ない……よな？
これまでのころねの行動を考えれば、からかわれている可能性もある。阿九斗はころねの手を持ち上げたり、脚をつついたりして動かないことを確かめる。
──よし。じゃあ……。
阿九斗は窓を乗り越えて外に出た。

○

メモを見る。

《今日の夜、本校舎地下の旧作戦室に一人でいらして……》

　夜の校舎に潜り込むことに不安はあったが、幸い誰にも見られずに校舎に潜入することに成功する。あまり出歩いている者がいないのは、夜が危険だからかもしれないと阿九斗は思った。裏山に魔物が出るくらいであるから夜には校舎に何かがやってきてもおかしくはない。そして、その感覚は、地下に降りて確信に変わった。地下の一階から二階は普通の校舎だったが、旧作戦室はさらに下にある。そこへの扉は金属で作られており、通常は鍵がかかっているのではないかと思われたが、今はうっすらと開いている。その重い扉を引くと、先に薄暗い階段が現れた。そこから先は掘った穴に崩落防止の金属支柱が埋め込まれているだけの完全な地下迷宮だ。

――こいつは戦時中のものかな……。生徒達が勝手にこの中で活動しているとしたら、学校側も把握できないだろうな。

　確かに密会にはうってつけだろう。目的の旧作戦室は地下三階にあたる位置にあり、その金属製の扉は開けるまでもなく、開け放たれていた。中からは明かりが漏れている。ノックしてから覗き込むと、長方形の大きなテーブルの向こうに不二子が座っていた。

「いらっしゃい。待っておりましたわ」

　不二子は優しく微笑んでいる。マナ灯だけが明かりの地下に優雅な美女というのはよく似合う、と阿九斗は思った。

「わざわざありがとうございました。確かに機能が止まりました」

阿九斗は頭を下げる。

「もう一度引けば、再起動しましてよ。その前後の数秒の記憶は無くなりますから、困ったときはお使いなさいな」

不二子は阿九斗に椅子を勧めた。

「それでお話ししようとした件なんですが……」

「服部さんのことですわね。あなたと彼女のこと、いろいろと噂が流れておりますわね」

「ですから、それはすべて噂でして。実際のところは……まぁ、多少こじれた程度かと」

「ほほほ……」

不二子は笑う。

「あら、失礼。服部さん、頑固ですものね。でも、そのおかげで皆から信頼されておりますのよ。さて、そういうことならわたくしが便宜を計っても結構ですわ。明日には服部さんも身体が治るでしょうから、服部さんに連絡をして、放課後に引き合わせて差し上げますわ」

「あ、ありがとうございます」

「彼女、真面目ですものね。そうね、あなたも真面目なところをお見せすればきっと大丈夫でしてよ」

「いえ……そうしようとしたのですが、どうにもこの学校の委員会制度がわからなくて失敗を……」

「そうね、清掃委員になろうとしたことは、あなたのクラスの方から伺いましたわ。ではあなたがなるべき委員を紹介いたしましょう」

ぽん、と不二子は手を叩いた。
「あなた、風紀委員になられたらどうかしら？　この学園で最も真面目な役職と言えば風紀委員ですの」
「それはいいですね。ただ、その……いや、疑うのも失礼ですが、風紀委員って、普通の風紀委員のことでいいんですよね？」
「普通……ですけれども。生徒の風紀を正す役割ですわ。そうね、ただ普通と違うところは、風紀委員が現在は空位ということですわね」
「いないんですか？」
「悲しいことですけれど、風紀が乱れまくって……失礼、下品な言い方でしたわ。風紀の乱れのひどさにどなたも風紀委員になりたがらなくって……」
「そうでしたか」
――それなら確かに服部さんの気に入りそうなことだ。
「昼休みに生徒会に書類を提出なさってね。そんなところでよろしいかしら？」
「はい。ありがとうございました」
阿九斗は挨拶をして立ち上がった。
「困ったことがあったら、いつでもいらして。あ、そうそう、もしお話し合い、上手くいかなかったら……」
不二子は机の上に錠剤をふたつ置いた。

「薬……ですか？」
　阿九斗は手を伸ばして錠剤を目の前に持ってきた。何の変哲もない白い錠剤だ。
「わたくし、魔術薬の研究を専攻しておりますの。もし……いえ、そのもし、ですけれども、服部さんがお話にまったく耳を傾けないようなら、お使いになってもよろしいかと思います」
　不二子は続いて小さな拳銃のようなものを阿九斗に手渡した。掌に入るくらいに小さい。だが、銃口にあたる部分は大きくて平たくなっている。
「錠剤が魔法薬。そして、これは魔法薬を投与するための装置です」
　そういえば、似たようなものをころねが使っていたことを阿九斗は思い出す。
「これを一錠ずつこの装置で撃ち込めば、投与された二人の心が通い合うようになりましてよ」
　不二子は投与装置のグリップの部分を開いた。そこのくぼみに錠剤がちょうどふたつはめ込める。錠剤を込めてからそれを阿九斗に手渡した。
　阿九斗はそれを受け取り、掌に載せて眺めた。
「でも、薬の力を借りるというのは……」
「わかっておりますわ。もしも、もしも、のときのためですから。でも、わたくしも服部さんの頑固さはよく存じておりますし。もしも喧嘩になりそうでしたら撃ち込むということで」
「それでしたら、お借りするだけはお借りしておきます」
　阿九斗は投与装置をポケットに入れた。

——なんていい人なんだ……。

内心、感慨（かんがい）を抱（いだ）きつつ、「それでは」と阿九斗はその場を辞した。ともかく明日は問題がひとつ解決できそうだ。それから誤解を少しずつ解いていけばいい……。

旧作戦室の扉（とびら）を閉めるとき、何かに引っかかったような感触（かんしょく）があった。阿九斗は再確認する。どうやら扉がきしんでいただけのようだった。

「どうかいたしました？」

「いえ、別に。それでは失礼」

○

阿九斗が立ち去ったのを確認してから、不二子はにやりとした。

にやり、である。にこり、ではない。その邪悪（じゃあく）な微笑（ほほえ）みも、先ほどまでの優しい微笑みと等しく美しい顔にはよく似合ったが、やはり受ける印象はまるで違う。心の底から邪悪な悪党にしかできない笑顔である。

「さぁて、うまく行きましたわ！　くくくくく……」

笑いながら、ぱちりと指を鳴らす。すると、彼女の背後の壁（かべ）が、くるり、と回転した。さらに奥（おく）の隠（かく）し部屋があったわけだ。その壁をすり抜（ぬ）けて、奥へと不二子は歩を進める。その部屋は紫（むらさき）のベルベットと銀の装（そう）

飾(しょく)に覆(おお)われていた。黒を基調にした家具と、その上に置かれたガラスの実験器具が不気味さを醸(かも)し出している。

「わたくし、またろくろく行動せずに利益を手に入れられそうでしてよ」

　不二子はベルベット張りのソファに腰掛(こしか)け、独り言を言った。いや、独り言ではなかった。ソファの脇(わき)に置かれている大きめのガラス瓶(びん)の中には、液体が満たされており、不二子によく似た美青年の生首が浮(う)いている。

「またそういうことをしているのか」

　生首が口をきいた。

「嫌(いや)ですわ。お兄様ったら説教ばっかり」

　不二子はガラス瓶を撫(な)でる。

「俺の言うことなんか聞かないくせに。死んでからも心配ばかりかけるとはな」

「魂(たましい)はないのですから、心配なんて本心ではありませんもの。言うことを聞くのは難しいですわ」

　不二子は笑った。



死霊術(しりょうじゅつ)。神によって記憶(きおく)された個人の行動記録を受信して再構築することで、死者の生前のままの反応を引き出す魔術である。会話もできるし、生前の情報はすべて質問さえすれば引き出せるが、死者は新しい体験から魂を変化させるということはなく、その点で生者とは根本から違(ちが)う。ただし外見上は生者とまったく変わらぬ反応が返ってくる点から、一般(いっぱん)の者が使うと精神に混乱をきたす可能性が高いため、一級魔術師(まじゅつし)しか使用することを許可されていない、いわゆる『禁呪』のひとつである。

　そして『禁呪』を好んで使う、魔術法を破る者のことを黒魔術師と呼ぶ。

「ねぇ、お兄様。これで将来の魔王(まおう)がわたくしの下僕(げぼく)になりそうでしてよ」

「やれやれ。今度はどんな手を使ったんだい？」

「あの薬は投与された者を、わたくしの精神コントロール下に置けますの」

「だったら、すぐに飲ませればいいじゃないか」

「あら？　そんなの嫌ですわ。あくまで彼らを騙(だま)すのが好きですの。そうでなくては面白くありませんもの。そして、わたくしが嘘(うそ)をついていないということも重要です。二人がわたくしに忠誠を誓(ちか)えば、二人は仲良しですものねぇ」

「ああ、不二子は性格が悪くて困る……」

　生首は愚痴(ぐち)を言った。

「そんなことだから俺を話し相手にするくらい孤独(こどく)なんだ」

「わたくしの崇高(すうこう)さに誰もついてこないだけですわ。どうして魔術(まじゅつ)に資格が必要なものですか。この学校の者はみんな政府に諾々(だくだく)と従っている馬鹿(ばか)です」

「それについての見解は俺にはないな。生前に結論を出さなかった……。だけど、不二子の計画は失敗することを希望するよ」

「あら？　残念。きっと上手くいきましてよ。いろいろと仕込みはしてありますもの」

「仕込み？　それはなんだい？」

「秘密、ですわ」

　不二子は悪戯(いたずら)っぽく笑うと、生徒手帳とは別の黒い表紙の手帳を取り出した。

「でも、この恨(うら)み手帳に書いてある黒い計画を実行すれば、それはもう確実に……くくくくく……」

　不二子は『恨み手帳』をめくってにやにやと笑う。

「不二子……なんて暗い子に育ってしまったんだ……」

　もう死んでしまっている兄は嘆(なげ)く。

「ほっといてくださいませな。わたくし、あの人だけはどんなことをしても手に入れたいと思っていますの。あの人は黒魔術師たちの理想とする力を持っていますわ。将来は必ず世界を破壊(はかい)してくれる人……。どうしても手に入れたいんですの」

　不二子は愛おしげにガラス瓶を撫でて、唇(くちびる)を寄せた。ガラス瓶の中の死んだ兄の幻影(げんえい)は、困ったように顔をしかめた。

4　思いこみの激しいあの子

「風紀委員ってのは、いないの？」
　阿九斗(あくと)はヒロシに聞いた。
「今はいないっす」
　ヒロシは答えた。通学の途中(とちゅう)である。昨晩に機能を停止させたころねも、今は後ろについてきている。不二子(ふじこ)の言葉通り、再起動したところ前後の数秒の記憶を失っていた。つまり、自分が再起動されたことには気づいていないわけだった。
「風紀委員がいない理由はあるの？」
　不二子のことを信用しないわけではなかったが、この学園にはいろいろと過去の慣習がありそうだから、念のためにころねにも聞いてみる。
「過去の記録では、前任者は自主退任ですね。真相はわかりませんが、予測では風紀委員を快く思わない者との喧嘩(けんか)ですね」
「喧嘩？」
「ああ、不良に狙(ねら)われたって聞いたことあります」
　ヒロシもうなずいた。つまりはきついい仕事ということなのだろう。

——それならまぁ服部（はっとり）さんも気に入ってくれるかな。

阿九斗はそう思った。その日の授業にも絢子（じゅんこ）は来ていなかった。

昼休みになって、ヒロシを置いて生徒会室に行く。

生徒会役員は昼休みには生徒会室に集まっているらしく、入ってきた阿九斗をぎょっとしつつも迎（むか）え入れた。ただ、生徒会長だけは堂々としたもので、彼女だけは驚（おどろ）かずに用件を尋ねた。

小粋（こいき）な帽子（ぼうし）の生徒会長は、かなり小さな体格の割りには威厳（いげん）というか威圧（いあつ）感にあふれていて、その横柄（おうへい）な態度とあいまって、いかにも人の上に立つ者という印象がある。

「おお、あんた何の用事だい？　こんなところに有名人が来るなんてな」

「有名人というのはやめてください。ええと……実は、風紀委員になるつもりで来たんですが」

「風紀委員？」

ざわ、と生徒会の皆（みな）がうろたえた。生徒会の役員達は三人いたのだが、その皆が心配そうに生徒会長と阿九斗を見比べている。

「風紀委員ってのはさ」

生徒会長が言い、阿九斗を指さす。

「あれだよ。大変だよ。喧嘩強い？」

「さぁ？　わかりません。やったことないので」

阿九斗が正直に言うと、生徒会長は苦笑した。

「そう。まぁいいや。この学園の風紀委員は大変だよ。ま、すぐ辞めてもいいから、適当にやってみてよ。風紀委員会は生徒会の下部組織で独立してるから、あんたの好きにやれるよ」

「そうですか。よくわかりませんが真面目にやります」

「よくわからないけど真面目にやるってのはどうなの？　ともかく、よろしく。ま、面白くなりそうだから、いいんじゃない？」

　生徒会長は阿九斗よりも、周囲の生徒会役員たちに言い聞かせるようにそう言った。

　それから阿九斗は風紀委員会室の鍵（かぎ）を受け取った。生徒会室を去り際に、すぐに校内放送が響（ひび）いて、少なからず阿九斗は驚くことになった。

《生徒会からのおしらせです。新しい風紀委員長が決まりました。紗伊（さい）阿九斗さんです。相談は風紀委員会室まで》

　手回しのいい生徒会だ。だが、それ以上に手回しの良い者がいたことを阿九斗は知らなかった。そのことには昼休みの終わり頃（ごろ）に念話が入っても気づくことはなかった。

「いきなり申し訳ありません。よろしいかしら？」

　ちょうど食事を終えた阿九斗に不二子が生徒手帳から語りかけてきたのだ。

「はい」

　阿九斗は念話を返す。

「服部さん、授業には出ていませんでしたけれど、お会いする約束はしてくれましたわ。午後四時に、地下迷宮の三階、旧兵舎にてだそうです。よろしい？」
「わかりました。本当にありがとうございます」
阿九斗は感謝して念話を終えた。

○

一方、女子トイレで念話を切った不二子は、一人にやりと笑みを浮かべた。
「くくくく……。ああ、楽しい。陰謀って素敵ですわ……」
不二子は生徒手帳をしまわず、次に絢子の連絡先を入力する。念話がつながると、がらりと表情を変えて、お嬢様の顔になる。
「服部さんかしら？」
「あ……寮長！」
絢子は瞬間、背筋を伸ばしたような返事をしてきた。
「お体は大丈夫かしら？」
「あ……はい……もう大丈夫です！」

「そうね、それでも学校にいらしてないのは、あの編入生の件かしら？　答えにくい質問でしたらすいませんが」
「あ……ええ……はい……実は……そうです」
　言いにくそうに絢子は言った。その態度からは寮長としての不二子を信用していることが伝わってくる。
「じつはそんなことを聞きましたのは、その編入生があなたとの和解を申し入れているからですの」
「和解？　そんな何を今更……」
「ええ。多分、多分ですけれども、彼が風紀委員長になったからじゃないかしら？」
「風紀委員長に？　だって、あれは……」
「そうですわね。風紀委員長を倒すとランキングが上がるとか噂が流れて、大変なことになりましたものね。学校で一番強いのは誰かなんて、そんなことに血道を上げる人が多くて困りますわ」
「だからさすがになりたがる人もいなくて……それがどうして和解と繋がるんです？」
「それはわかりませんわ。でも、裏があってのことかもしれませんでしょう？　わたくし、そういう人の考えはわかりませんけれど、校内の勢力の統一を目指しているのかもしれませんわね」
「そうですね……そういうことなんでしょうね」
　先輩との念話であるというのに、絢子は不快感を声ににじませた。
　不二子はほくそ笑む。

「わたくし、寮長として仲介を頼まれはしましたけれど、ご注意あそばせとお伝えさせていただきますわ。午後の四時半に地下三階での待ち合わせと向こうが指定してまいりましたの……」
「暴れることもできそうな広めの場所ですね。気をつけて行きます」
「ええ。お気をつけて。午後の四時半ですわ」
　不二子は念を押してから話を切り上げた。
　あわただしく次の対象に念話をつなげる。出てきたのは乱暴な男の声だ。
「ああん？」
「あら？　いつからそんな態度が許されるようになったのかしら？」
　面白そうに不二子が言うと、狼狽した声が返ってきた。
「す……すいませんでした！」
「わたくしと面会していない期間が長くて、いろいろと忘れてしまったのかしら？　思い出させる手間をかけさせないでくださいませね」
「め、めっそうもない……それで、どのようなご用件でしょう、お嬢様」
「わざわざ情報を差し上げるのよ。感謝なさい。新しい風紀委員長はご存じ？」
「あ、あのふざけた奴が就任したって話ですよね？　事情を知らない方が普通ですが、俺たち裏の奴らに対する挑戦としか思えませんが。ですが、あいつはなんか特別な扱いみたいじゃないっすか。政府のリラダンがくっついているし、手を出すのは無理っすよ。放っておくのが一番かと……」

「おだまりなさいな」
　不二子はぴしゃりと言った。
「タケシ、それでも黒魔術師になろうという男ですの？　いいこと？　午後の四時に地下三階にあいつが行きますわ。しかも、リラダンは連れずに。人質をとるなりなんなり、せいぜいが卑怯な真似をして、絶対的な上下関係を教えて差し上げる事ね！　いくら魔力が強かろうが、腕力が強かろうが、人は精神的な暴力には屈服するものでしてよ。さ、頑張りなさいな」
　不二子は一方的に念話を打ち切った。
「さて……」
　それから不二子は一般生徒達から尊敬されるお嬢様の顔に戻った。しかし、内心は今も黒い思いに満ちていた。
「仕込みは完璧。どう転んでも、彼はあの薬を飲むことになりますわ」
　不二子はほくそ笑んだ。廊下ですれ違った生徒がいたが、不二子はいつも優しい微笑みをたたえている、と思っただけだった。

○

午後の授業を終え、なんとか人目に付かないようにころねを停止させて地下に降りる方法を考えないとな、と考えながら教室の椅子(いす)に座っていた阿九斗は、しかし周囲の妙(みょう)な空気にも気づいていた。距離(きょり)をとられているのはもちろんのことだが、どこか怯(おび)えている空気も感じる。

「なんか妙じゃないか？」

ころねに聞いてみた。

「どのような情報を分析(ぶんせき)して言っているのかわかりませんが、今が通常と違うという意味であれば、あの二人がいませんね」

ころねが言った。

「あの二人……」

阿九斗は周囲を見回した。そういえば授業が終わった教室には、けーなとヒロシがいない。けーなはどこかにふらりと行ってしまっていた。これはいつものことだ。だが、ヒロシはトイレに行くとか言ったっきりだったように思う。

――まぁ地下に行きやすくていいけど。

阿九斗は立ち上がった。

「ちょっと見てきたいところがあるんだけど」

「どこです？」

「地下」

「どうしてですか?」
「昔の戦争のときの史跡が見たいんだ」
　適当なことを言って教室を出る。ころねもついてきた。この調子だと誰もついてきていないから、地下に入ったところで機能を停止させればいい。
　地下迷宮ではない校舎の地下への階段を降りたところで、ころねが不意に言う。
「ところで」
「何?」
「監視員として言っておくと、自分は干渉しませんが、あなたが失敗することを望んでいるわけではありません」
　いきなりのことに、阿九斗は首をひねる。
「何を言ってる?」
「誰かがあなたに干渉しようとしたとき、それを見過ごすことはあるという原則を忘れないで欲しいのです。そこにおいて、この自分のあなたへの干渉が存在するということです。自分が何かを見過ごすとき、その結果について自分は責任を持ちます」
　ころねは相変わらずわけのわからないことを言った。
「つまり?」

「あなたは自分に向けられる周囲の視線について、正確に認識しているとは言い難いです。それを正確に認識できるようになることを一般に成長と呼ぶはずです」
「いらいらするようなことを言わないでくれよ」
阿九斗は数秒もころねと向かい合うことになってしまい、やや苛立つ。そのせいで近くでカタカタと不審な金属音が鳴ったのに、少し周囲を見回して何もなかったので空耳だとやり過ごしてしまった。
「と、ともかく行こう」
地下迷宮に入る金属の重い扉を開いた。
入ってすぐに後ろを向いて扉を閉める。すると、ころねが自分に背を向けていることに気づいた。まだ気後れするものの、二度目であることと、タイミングが今しかないことが後押しした。素早くころねのお尻に手を伸ばし、スカートの中に手を突っ込む。
「ひゃ！」
油断していたのか、素の声をころねは上げた。
一瞬、阿九斗はどきりとしたが、尻尾を引っ張ることに成功した。
ころねが直立したまま動きを止める。
「ふう……この機能停止方法に慣れることはなさそうだな……」
ぼやきながら扉の脇にころねを座らせた。

生徒手帳を開いて、地下迷宮の地図を表示させる。探検部という部活があるらしく、地図を販売していたのだ。もちろん正確性は怪しいが、評判では地下四階までは完璧、らしい。というのも、地下の浅いところは、部活に使っている者も多いとのことだ。確かに旧作戦室だって女子寮の運営により秘密会議室に使われていたわけだから、他に使っている者がいたとしてもおかしくはない。

それによれば、入り口は複数あるそうだ。阿九斗が入った入り口は、一番目立つものだけによく使われているかと思いきや、地下迷宮に数多くある施設から遠いのであまり人気はないらしい。寮や教室の掃除用具入れなどから地下に入る道もあるらしい。阿九斗はよく確認はしなかったが。

しかし、そういう地下迷宮であるから、一部区画は柄の良くない生徒のたまり場になっているというのも当然といえば当然だった。地下三階に入ると、通路の脇にしゃがみ込んでいる者や、部屋の開け放たれた扉の陰から覗いている者の目が、阿九斗をじっとりとした目で見据えていた。

――そういう風に敵視しているなら、こちらもいきなり彼らに襲いかかっても文句はないという理屈になるんだがな……。

阿九斗はそう考える。もちろん、これまで実行に移したことはない。善意からということもあるが、複数の人間を相手にするだけの力がないことがその主な理由だ。だが、この学園に入って、少々魔法なんてものの使い方を覚えてからは、その力がある。

――それに今は、ころねがいないし……殺さない限りはおとがめ無しってことになる。

そんなことに気づいて、阿九斗は自分の理性と心が乖離(かいり)していることに気づいた。不快感と快感が同時にある。理性では人を傷つけてはいけないことになっているが、ルールをはみ出して喜んでいる好戦的な連中を傷つけることは気持ちよいことのはずだった。

ともかく自分を怒(おこ)らせるようなことがないといいが、と思いつつ、阿九斗は旧兵舎へと向かった。

——何もないといいけどな……。だけど、こんな危険な場所を待ち合わせに指定してくるなんて、服部さんも困ったことを……あ、でも、学園で二番目なんだっけ……。

ぶつぶつとそんなことを考えているうち旧兵舎の扉にいきついた。そこの扉は横にスライドさせる方式の大きなもので、コンテナ倉庫のそれのように思える。今は閉じられていたが、鍵(かぎ)などはかかっていないらしい。

扉に手をかける。頻繁(ひんぱん)に開けられているのか、重いはずのそれはゆっくりと、だがスムーズにスライドした。

ひんやりとした空気が中からあふれてくる。暗いが、かなりの空間が拡がっているようだ。通路の明かりがあたっている手前の範囲(はんい)だけは見える。三段になったスチール棚(だな)のようなベッドが並んでいるだけの部屋らしい。

——ああ、兵舎だからか。それにしても、明かりのスイッチは……。

阿九斗は中に足を踏(ふ)み入れた。

いきなり頭に重い物を乗せられたような衝撃(しょうげき)があった。

一瞬にして地面になぎ倒(たお)される。

——ぐっ！

明かりがついた。阿九斗の視界に、複数の足が見える。囲まれていた。

見上げると、にやにやとした複数の顔。皆(みな)が手に武器を持っていた。ショック警棒や靴下(くつした)の中に四角い何かを入れたもの、いずれも殺すというよりは痛めつけるためのもの。

「こりゃあびびることもなかったか？」

あざけるような声とともに、中の一人が警棒を打ち下ろしてきた。

——！

腕(うで)を上げて防ぐことはできなかった。阿九斗は打ち下ろされる首筋にマナを集中させた。首の後ろに集まった光の流れが警棒を弾(はじ)く。

「うわっ！」

警棒を持ったそいつは、堅(かた)い物にぶつかった感触(かんしょく)に手をしびれさせていた。

——慣れたのかな？　いや……僕が集中してるのか。

阿九斗は自らの行為(こうい)に驚(おどろ)いていた。力を暴走させずにピンポイントで打撃(だげき)を防いだ。訓練をしたわけではないので、それが出来たことに対する疑念のような感覚が湧(わ)いてくる。が、それに対する答えも阿九斗の中に同時に生まれていた。漠然(ばくぜん)と身を守ろうとしていたわけでなく、明確に目的があったからに違(ちが)いない。

――こいつら、どうやってぶちこわしてやろうか。

そう思うと阿九斗は妙に冷静になっている自分を感じていた。

痛みは感じていたが、無理に立ち上がって周囲を観察した。体育館みたいな広さの旧兵舎の端に立っている。周囲を囲んでいるのは六人。とはいえ襲撃者はそれだけではなかった。反対側の奥には兵舎のベッドに腰掛けている男子生徒がおり、その周囲を十数人の取り巻きが囲んでいる。

阿九斗は彼らにかける言葉がみつからなかった。ともかく向こうが暴力を使ってくるならば、それに乗ってやるしかないと思った。

手をしびれさせている警棒の生徒に歩み寄った。彼は逃げずに警棒を再び打ち下ろしてきたが、阿九斗はそれを腕で受け止めた。そのまま警棒を掴んで引っ張り、バランスを崩した相手の顔を殴りつけた。

しかし、殴られた生徒は拍子抜けしたようだった。殴りつけた力がそれほど強いものではなかったからだ。

――そうか、格闘技とかやってるわけじゃないものな。

阿九斗は納得した。防御にはマナを使っていたからうまくいったわけで、身体が強くなったわけではない。

「こ、こいつ、意外と弱ぇぞ！」

かさにかかって警棒の生徒は再び打ちかかってきた。今度は殴るのでなく、集中したマナを放出することにした。警棒に右拳を打ち付け、警棒をねじ曲げる。その曲がった警棒を相手の顔面に叩きつけた。

声もあげずに警棒の生徒は床に崩れた。
残りの者は恐怖に顔を強ばらせた。阿九斗から少しずつ距離をとり、真っ先に阿九斗から攻撃を受けるのを避けるかのようにしている。
――どこまで不愉快な人間なんだろう。
阿九斗はそのうちの一人に向かって手を伸ばした。マナを手に集中させてから、一気に弾丸のように撃ち出す。
腹にマナを喰らった彼は、悶絶して床に崩れた。腹をおさえてうめき声をあげてごろごろと転がる。
「糞っ」
残りの四人が次々に阿九斗に向かって、阿九斗がしたのと同じようにマナを撃ち出してきた。阿九斗は避けずに身体の表面にマナを集めてはじき返す。その光景に明らかに四人は狼狽していた。
――まともに喧嘩したことがないからわからなかったけれど……生来のマナの差というのは、そういうことか……。そうだよな、そもそも殴る方が強いから最初は殴りかかってきてるんだろうし。
阿九斗は四人を無視して、奥へと歩を進めた。取り巻きに囲まれた奴がボスに決まっているだろう。話をつけるなら彼だ。
その生徒は大柄で、顔にも顎がたるむ程度に肉が付いている。顔立ちは控えめに言っても乱暴者というところで、第一印象だけとってみれば凶暴としか言いようがない。

「いきなり殴りかかってくる意味ってのを聞きたいんだけど」
　阿九斗が言うと、彼はあざ笑った。
「意味を聞いてどうするんだ」
「理解すると安心するんだ。僕は不安だってことらしい」
「じゃあ教えてやるぜ。風紀委員なんてものができちまうと、腕自慢が一斉に風紀委員をぶったおして名をあげようとするんだ。だから、そいつを警告してやろうと思ってな」
「……警告で殴られちゃたまらない。そういえば名前を聞いていないんだけど」
「木村タケシだ」
　第三位ことタケシが名乗った。そして馬鹿にするように阿九斗に向かって顎を振った。
「さて、わかったら黙って殴られてくれねぇかな」
「なんだって？」
「わからねぇかな？　風紀委員長なんてやめてくれってことだ。それとおめぇが俺様には頭が上がらないようになってくれると面白い」
「どうあっても喧嘩したいだけじゃないか」
　かなりの苛立ちを阿九斗は感じはじめていた。
「喧嘩なわけねぇじゃねぇか」

タケシが指示すると、取り巻き達が奥のベッドから三人がかりで誰かを引きずるようにして連れてきた。
　両手と足を引っ張られてぼろぞうきんのようになっている彼を見て、阿九斗の心臓が跳(は)ね上がった。ヒロシだった。目の周りは腫(は)れ上がってボールのようになっていた。腕(うで)にも殴られた青痣(あおあざ)がある。服に隠(かく)れている部分も傷だらけに違(ちが)いない。
「あ、兄貴……」
　ヒロシは気絶はしていなかった。苦しげな声をあげて阿九斗を見上げる。
「あっしのことはいいから、こいつらを……」
　その言葉にタケシとその取り巻き達は笑い声をあげた。
「マンガみたいなこと言うじゃねぇか、こいつは！」
　タケシは取り巻きに指示して、ヒロシを下がらせた。
「つまり、お前が抵抗(ていこう)しなければ、こいつもこれ以上痛めつけられることはないってわけだ。本当はお前につきまとってる女の方が良かったんだが、見あたらなくてな。だが、ここで抵抗したり、逃(に)げ出したりしたら、その女だってどうなるかわかってるだろうな？　学園生活長ぇんだ。怯(おび)えて暮らしたくはねぇだろ」
　タケシは自分がまるで物わかりが良さそうな大人であるかのように言った。
「実はまだ質問があるんだ」
　阿九斗は冷静な声で言った。

「あん？」
「マンガみたいなことって、言ってたけどさ……。それについて前からわからなかったことがあるんだ」
阿九斗はタケシとその取り巻き達に目をやった。
「マンガでも小説でもなんでもいい。それに出てくる主人公や悪役に自分を重ねる奴はいる。でも、いずれ現実を知ってあきらめるもんじゃないか。それで、そのあきらめた奴が自分なりの生き方を見つけるってのは納得できるんだ。だけど、マンガでもゲスな奴ってされている奴らの行動の真似をしている奴らってのは何を考えているんだ？」
「何をぶつくさ言ってやがるんだ」
タケシは面倒になったのか、取り巻き達に顎を振った。
取り巻き達は薄笑いとともに阿九斗に近づく。
「まいったな、これ以上ないくらい冷静なんだ。こういうときって我を忘れるものだと思ったけど……そうじゃないらしい」
阿九斗は腰の前で軽く手を振った。ホウキをもって周りの者の足下を払うような動作だ。
いきなり阿九斗に接近しようとしていた者の腰がくだけてしゃがみ込む。彼らは何が起きたのかわからない顔をしていたが、すぐに自分たちの膝が痛むことに気づいたのか、立ち上がることが出来ずにうめきだす。

「大気中のマナを動かして膝の骨を折っただけだ。そっちもマナを制御できる以上は、要するに力比べってことなんだろ？　ちゃんと抵抗してくれ」

　阿九斗はつまらなさそうに言って、手近な一人に手を伸ばした。そして、ひねるようにすると、そいつの腕がねじあげられた。

「僕が動かしてるのは、あんたの身体の近くのマナだぜ？　そっちの方が力が出しやすいんだから、僕に力負けするわけないよな？　それ、頑張れ、頑張らないと折れるぞ」

　関節が抜ける異様な音がして、そいつはようやく解放された。

「おい、自分の立場、わかってんだろうな？」

　タケシが慌てて取り巻き達にヒロシを引っ張り出させた。

「わかってるさ。僕は追い込まれてる。僕じゃなくて周囲の人間が危害を受けるってことで。それをわかってる人間がすることはひとつだ」

　阿九斗はまた一人手近な人間の骨をへし折った。

「な……何にもわかってねぇじゃねぇか！」

　タケシは叫んだ。

「わかってるからこうしてるんだ。計算してるよ。取り巻き連中は意識のあるまま動けなくして、これから起こることを見てもらう。見てもらうのは、ボスのあんたが残酷に痛めつけられるところだ」

阿九斗は手を伸ばす。と、タケシは素早く立ち上がって距離を取り、ポケットに手を入れるとチェーンを取り出す。喧嘩用のものらしい。マナを受けて光っている。
阿九斗はマナを操ってタケシの足をへし折ろうとしたが、タケシはさらに距離をとって〝力比べ〟に応じた。タケシは額に汗を流してはいるが、なんとか阿九斗の圧力に耐えている。
「どちらにせよあんたは最後だからな」
阿九斗はタケシが手強いことを覚ると、兵舎の扉をマナの遠隔操作で閉め切り、他の取り巻き達を見やった。取り巻き達の顔が青くなる。
「僕は怒ってるわけじゃないんだ。ただ完全に抵抗力を奪うにはどうしたらいいか考え、そう行動しているだけだ。恨まないでくれよ。いや、恨みなんて消えるくらいにしてやるから大丈夫」
阿九斗がそう宣言してから数分後には、立っている者は阿九斗とタケシだけになっていた。取り巻き達の大半が壁際で倒れている。逃げようとして果たせなかったのだ。
そしてタケシも壁際に追いつめられていた。阿九斗がマナによって圧迫してくる力を避けようとしたのだが、兵舎の角に背中をつけてしまい、それ以上下がれなくなっている。もやはこれまでと覚ったか、タケシはチェーンを渾身の力で阿九斗の顔面に向けて横なぎに振り回した。
迫ってくるチェーンを阿九斗はまったくかわさなかった。チェーンは阿九斗の顔面に打ち付けられ、頭部にぐるぐるとからみつく。
「やったか?」

タケシは顔をほころばせたが、その笑顔はすぐに凍(こお)り付いた。チェーンは阿九斗の顔から一センチほど離(はな)れて浮(う)いていたからだ。

「防いだ……？」

「驚(おどろ)くことはないだろうに」

　阿九斗はチェーンを奪い取ると、顔から外して背後に投げ捨てた。

「許してくれとか言わないでくれよ」

　阿九斗はタケシの右足の小指にマナを集中して、これを逆向きにねじ曲げた。小さな音がして、小指は折れた。タケシが悲鳴をあげてうずくまる。阿九斗はそのタケシの身体を自分の眼前の上空に持ち上げた。磔(はりつけ)にされたかのような姿で、タケシが宙に浮く。

　動けなくなっている取り巻きたちにも痛めつけている様子がはっきりとわかるように、阿九斗は今度はタケシの足首を逆側に回転させた。

　タケシの絶叫(ぜっきょう)が広い兵舎に尾(お)を引いて響(ひび)いた。

「やめろ！」



阿九斗の背後から声がかかった。反射的に阿九斗はそれに答えていた。
「やめるわけにいくか。もうちょっと怖がってもらわないとこちらとしても楽しくない」
そう言ってから、阿九斗はその声が女のものであることを不審に思った。
――しまった！
阿九斗は振り返った。阿九斗が閉じた兵舎の扉はねじ曲げて開けられていた。扉のところには絢子が立っていた。
「貴様！　結局、本性を現したな！　呼び出して何をするものかと思ったが！」
――うわわわ。どうしよう……。
「いや、これは、僕が脅かされて……」
そう言ってから、その言葉に死ぬほど説得力のないことに気づいて阿九斗は額から汗を流した。足なり肩なりを折られて、中には血を流している者までもいる二十人ばかりの不良の真ん中で、大柄な校内三位の暴れ者を磔にしていたぶっている目つきの悪い奴……そういうのが自分の今の姿なわけだ。
「嘘をつけ！　どちらがどちらを脅しているかなど見ればわかる！」
虐殺現場に踏み込んだ刑事の顔で絢子は身構えた。
「違うって！　これは身を守っただけで……」

「問答無用！　今、私にははっきりと貴様の意図がわかった！　風紀委員長になって、学内の乱暴者を全員支配下に置くと画策していたのだな！　そして学園の制覇に乗り出し、今後政府の要職につく生徒達に影響力を行使しようとしているのか！」

　絢子は阿九斗を指さして断罪した。

「そ、そんなこと考えてもいなかった。本当だ！」

　まさしく本当に考えてもいなかったことなので阿九斗はおろおろする。

「貴様！　私だけに媚びる態度をとるのはなぜだ！　そうか、私が学内でのランキング上位者の中では唯一、非合法な活動を嫌っているからだな！　私を味方に引き入れて真面目な生徒までたぶらかそうとは！」

　絢子の思いこみは激しい。

――このままじゃ埒があかない……。

　阿九斗は、あの不二子の言葉を思い出していた。ポケットに手を入れて、不二子からもらった薬物の投与装置を取り出す。これを投与された二人の心が通い合うと言われた薬だ。

――まずは僕から……。

　阿九斗は自分の腕に投与装置を当てて引き金を引いた。

　しかし、何も起こらなかった。

――え？

投与装置のグリップを開けて中を確かめる。そこに錠剤は入っていなかった。

――あれ？

勝手に投与装置が作動したということもないだろうし、錠剤が揮発するはずもない。また装置にも穴は開いていない。阿九斗は慌てるが、ともかく錠剤がない以上は、薬のことはあきらめるしかない。

「え、えーと……」

戸惑う阿九斗はとりあえずタケシを降ろした。「ぎゃん！」と短い声をあげてタケシは転がった。阿九斗が絢子の方に歩み寄ろうとするが、絢子は猛獣が近寄ってきたのと同じ表情で木刀を構えた。

「く、来るか！　来るならば私の命をかけても貴様を倒して見せよう！　たとえ私が敗れるとも、一太刀浴びせてやる！　人間の意地を見せてやるぞ、この魔王！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ……そんなに本気にならなくても……」

阿九斗は戦う意志のないことを手を広げて示しつつ、さらに前に進んだが、前に出た分だけ絢子は下がる。

「寄るな！　力が及ばないのはわかっているのだ！　こうなったら学内の有志を集め、正式に貴様を討伐してやる！」

「討伐？」

「討伐制度を知らんのか！　知らんだろうな！　知らんならそれでいい！　それを適応してやる！　正義は必ず勝つのだ！」

かなり怯(おび)えているのだろう。絢子は震(ふる)える手で懐(ふところ)から丸い玉を取り出した。それがスハラ信者の戦闘(せんとう)集団『忍者(にんじゃ)』の使う煙玉(けむりだま)であることは阿九斗にもすぐにわかった。

「あ、待って……」

阿九斗が絢子を止めようと前に出るが、そのことでさらに絢子は慌てた。

「ひぃいい！　ち、近寄るなというのに！」

煙玉を叩(たた)きつける動作と、後ろに下がる動作を同時に行おうとして、絢子は倒れた不良の手に足をひっかけて後ろ向きに倒れてしまう。

そして、絢子の手から煙玉が転がり落ちた。

「あ……いけない……」

絢子はうろたえたが、煙玉はぽとりと床(ゆか)に落ちて、数瞬(すうしゅん)後に、ブバン、と大音響(だいおんきょう)とともに爆発(ばくはつ)した。

「ひぃいい！」

絢子の悲鳴とともに白い煙(けむり)が一気に拡がる。

「うわ！」

さすがにこれには阿九斗も思わずその場を離(はな)れる。

視界が真っ白になり、刺激臭(しげきしゅう)が鼻を突(つ)く。

地下なので煙の流れは悪い。かなりあって煙がようやく薄(うす)れてみれば、当然のように絢子はそこにはいなくなっていた。

「まいったなぁ……」

阿九斗は頭をかいた。

周囲にはタケシとその取り巻き達、それにヒロシがごろごろしているばかりだ。ほぼすべてを阿九斗がやったわけだが。

――それにしても……。

それにしても気になるのは、自分がタケシを争っていたときに、決して〝我を忘れる〟という状態にはなっていなかったことだ。それなりにきちんと行動したつもりだったし、他の選択肢があったとはあまり思えない。

――まいったなぁ……。でも傍から見たら魔王……の行動なんだろうなぁ……。でも僕のせいになるんだろうなぁ……まいったなぁ……。

阿九斗はぼやきつつも地下迷宮の入り口まで戻って、ころねを起こす。ころねはスイッチを切られている間の記憶がないため、何の疑問もなく阿九斗に言った。

「さて、地下の史跡を見に行きましょう」

阿九斗は旧兵舎に行くと、ころねに告げた。ころねが怪我人の治療をしてくれるだろうが、真実は言わなければならないわけで、どう弁解したものかと阿九斗は困り果てた。

○

「つまり、機能停止させた間にいろいろと勝手をしていたと」
　ころねは阿九斗に言った。
「すいません」
　阿九斗は頭を下げた。
　寮の自室である。ころねはベッドの上、阿九斗は床で土下座。それまでの事情の大体の所は説明している。
「記録が残っていないので、謝られても裁くことはできません。しかし、一般論としてですが、服部絢子とのことはあなたが責任を取るべき問題だと思います」
　ころねが淡々と言った。
「責任を取る気はあるんだけど……」
「おとなしく討伐されるのが責任の取り方でしょう」
　学園に『討伐制度』というものがある。当然ながら阿九斗もはじめて知ったし、大半の生徒も知らなかったのだが、どうも現在も有効な大戦中の校則らしい。
　学園に対して著しく不利益な行動をとった者は、その罪状を公開され、複数人からの決闘を受け入れなければならない

おそらくは裏切り者やスパイの処分に使用された校則だろう。
「戦うチャンスが与えられているのは男らしい制度と言えなくもないけれど……」
「野蛮な時代の習慣ですね」
ころねも肯定したが、阿九斗に『討伐制度』が適応されたからには、明日、絢子と彼女が集めた生徒たちからの決闘――というか襲撃を受けなくてはならない。
「罪状は、まぁ……十分ですね」
タケシ達の怪我はころねにより記録されているし、記録されるまでもなく、絢子が教師達に報告はしている。
「それはいいんだけれど……勝っちゃったらどうしよう？　勝つ方がどうにもならないよね？」
阿九斗は真剣な顔でころねに聞いた。
「だからおとなしく討伐されなさいと言っているんです」
ころねも真剣な顔で言った。
「それしかないのかなぁ。先生にも相談したんだけど、効果がなかったし……」
もちろん事態が判明してすぐに美津子先生には相談していた。回答は単純だった。目を輝かせて美津子先生はこう言ったのだ。

「死ぬの？　ねぇ死ぬの？　そりゃあ大変だわ！　ああ、もうわくわくしちゃう！　明日は特等席で観戦させてもらうわ！　それで死んだらすぐに死霊（しりょう）術を使うからよろしくね！」

最初からそうだったといえばそうだったのだが、もはや黒魔術師（まじゅつし）と違（ちが）うのは、許可を得ているか得ていないかだけの問題である。

阿九斗はこれまでの人生において、これ以上はないくらい困り果てていた。

「結局、力が強ければ誰でも魔王（まおう）になっちゃうってことじゃないのか？　ああ、もう……運命を呪（のろ）うしかないのか……」

○

その頃（ころ）、運命を呪っていた者はもう一人いた。

絢子である。

自室に敷（し）いた畳（たたみ）の上に正座している。絢子が着ているのは白装束だ。半紙を前に筆を持って精神を統一している。

「お父様、お母様、お婆様（ばあさま）……先立つ不孝をお許し下さい。これも正義のため、お国のためです。ですが、その場に居合わせてしまった自分の運命を呪い……いえ、将来の魔王をまだ弱いうちに叩（たた）けることを喜ばなくてはなりません」

ぶつぶつと遺書の草稿を口にしている。だが、そう口にしているうちに感極まってきたのか、一人きりでいることも手伝って、段々と愚痴を独り言として吐き出しはじめる。

「ああ……まともな男だと思ったのに……まさか悪人だったなんて……。そうだ、最初はそれなりに気に入っていたのに……そんな男ははじめて見たっていうのに……。大体が魔王だと？　確かにそれにふさわしい性格をしてるじゃないか。それに、どうしてこうも私の痛いところばかりをついてくるのか……。それは私は喧嘩は強いにしても、ドジだし、心は弱いし、強がっているし、だいだいが喧嘩が強いのも嫌いだし、真面目にやってるつもりでも、結局は木村タケシだのなんだのを放置しているし、風紀委員長になる勇気もなかったわけだし……なんであいつはすんなりなれるんだ。それに強いし……。なんかこれじゃああいつのことを気にしているみたいじゃないか。馬鹿らしい。ああ、明日死ぬかもしれないんだ……遺書を書こう……。ええと……」

絢子は筆に墨を付けようと硯に手を伸ばした。硯は手の届かないところにあった。

「ああ、もう……」

手をめいっぱい伸ばして、そのせいで天井を見上げるような形になった。硯からは当然目が離れる。と、指先が硯に触れた。

「あ、あった……」

硯を持ってこようとしたが、絢子は違和感に気づいた。硯は思ったよりも近くにあった。

「あれ？」

絢子は首をひねった。
硯は明らかにさっき見たところとは違うところにあった。確実に手元に近づいていた。
「え？」
絢子はあたりを見回したが、もちろん誰もいなかった。
「あ……あれー？」
絢子はともかく遺書を書く作業に戻った。

○

旧兵舎でのことは不二子も『モニター』で見ていた。羽虫型の小形隠しカメラというところである。もちろん違法で、不二子の手製によるものだ。阿九斗の暴力と、その後に錠剤が無くなっていた顛末はすべて、不二子の隠し部屋に置かれた水晶玉に映し出されていた。阿九斗が薬を使おうとするところまでは計画通りだったのだが……。
「おかしいですわね」
不二子はガラス瓶の兄に語りかける。
「そうかい？」
「そうですわ。薬が無くなっていて……計画が狂いましたわ」

　不二子は思案げに顎（あご）に手を当てた。
「でも……あの冷静な暴れっぷり。そして自身の独善と過（あやま）ちに気づいていないところ……彼ったら、とても魔王にふさわしいと思いませんこと？」
　うっとりと、しかし誰に言うとでもなく不二子はつぶやいた。
「薬を使わなくても、彼がわたくしのものになってくれればいいのに……」

5　脅威の楽天家

阿九斗にとっては憂鬱な朝がやってきた。

その日は夜明け前から学園中がざわめいていた。前日の夜のうちから『討伐』の話は広まっており、その討伐がどう行われるかは、通信で、用紙でと様々な手段で周知のこととなっていた。

・討伐参加は届け出た何人でも可
・時間は昼休みの一時間のみ
・学園内から対象が逃亡した場合、対象の罪は不問
・対象が死亡しても討伐参加者の罪にはならない
・対象への助太刀は許可されるが、助太刀者は対象と同等の扱いとなる

「昼休みの間、全校生徒から逃げ切ればいいわけね」

阿九斗は夜のうちに肚を決めていた。朝食をとろうと食堂に行くと、モーゼも顔色を失う素早さで目の前の人波がまっぷたつに割れた。

――これまでで一番の嫌われ……いや、怖がられっぷりだ。

阿九斗はさすがにそれにショックを受ける。が、自分の席に着くと、後ろから親しみのこもった、というか、ほとんど崇拝に近くなっているうわずった声をかけられた。

「あ、兄貴！　助太刀します！　このヒロシ、命に代えても！」

怪我がまだ治っていないというのに、ヒロシが頭を下げていた。

阿九斗は振り返って微笑んだが、即座にその申し出を否定する。

「ああ、駄目駄目。よしたがいいよ。死ぬことはないさ」

「でも、自分は兄貴が実は自分を助けようとしたって知っていますし……」

ヒロシは心底申し訳なさそうに涙を流す。

「だからこそ死ぬことはないってのに。それに僕は逃げ切るくらい簡単だ。出来るから気楽に構えているんだよ」

阿九斗はできるだけ気楽に聞こえるように言った。

ヒロシもそう言われては引き下がるしかない。

しかし……。

――とはいえ、これは周りには挑発にしか聞こえないよなぁ……。

阿九斗は冷たくなった周囲の視線を見回した。

学校に出て、授業がはじまっても、皆はそわそわしていた。阿九斗もそれは同じだ。授業が進んでいくにつれ、緊張が高まっていくのを感じる。

——ヒロシからすぐに離れるようにしないとな……。

頭の中でシミュレーションを行う。

——教室の窓から飛び出すか……。クラスの人間に怪我はさせたくないしな……。あ、そういえば、けーなは今日も授業に出ていないな。薄情な……。

阿九斗はそんなことを考えながら周囲に目をやる。

終了五分前。

クラスメイトたちの視線が異様な緊張感に満ちている。大方の者は怪我したくない一心から阿九斗討伐に加わる気はないようだが、どうやら密かに絢子のファンだった者がいるらしく、何名かの男子は明らかに殺気立っている。

おまけに美津子先生までがわくわくした様子で、授業も教科書を読むだけのおざなりなものになってきている。

終了一分前。

クラスの出入り口の外側に別のクラスの生徒が集まりはじめた。早く授業が終わったか、昼休み前が休講だったらしい。やる気満々の上級生は、昨日は地下にいなかったタケシの友達か四位以下のランキングの者だろう。

――盛り上がりすぎだろう……。

阿九斗は苦笑いを浮かべるが、カウントダウンはすでにはじまっている。

「兄貴ぃ……」

心配そうにヒロシが声をかけてくる。

「大丈夫。すぐに逃げろよ」

阿九斗がそう言った時、美津子先生がろくでもないことを告げる。

「チャイムが合図だからねー。それ以前に動いちゃ駄目よー。五、四……」

美津子先生が時計を見ながらカウントをする。

チャイムが鳴った。

「それじゃあ、今日の授業は終わ……」

美津子先生が言い終わる前に、阿九斗に向かって投げナイフ、吹き矢、ダーツ、魔法弾、それらが一斉に飛んできた。阿九斗はマナのスクリーンを周囲に展開しつつ、自分の机を蹴って窓に向かって跳ぶ。

マナスクリーンは攻撃のかなりの部分を受け止めたが、純粋にマナを固めた魔法弾だけはスクリーンを破って阿九斗の足に当たる。阿九斗はバランスを崩して、窓ガラスに突っ込んだ。ガラスの破片とともに校庭に向かって落ちていく。

――昨日は攻撃を簡単に受け止められたのに……やっぱり精神の集中が出来ていないのか？　昨日みたいに怒っていないといけないのか？

阿九斗は戸惑う。が、考えている暇はなかった。背中から校庭に叩きつけられる。魔力は有り余っているが、使い方はまったく学んでいない阿九斗である。その未熟さを阿九斗は痛感することになった。校舎の窓から一斉に生徒達が阿九斗を目がけて飛翔魔法で飛んできたからだ。

——こっちは飛べないってのに！

阿九斗は裏山に向かって走り出す。そちらの方が逃げやすかろうと思ったのだ。だが、それは大きな間違いだった。やはり飛行するというのがどういうことかという感覚が阿九斗には欠如している。たちまちのうちに上空から位置を把握され、ありとあらゆる飛び道具を撃ち込まれてしまう。

——うわ、そうか、林の中に入ったくらいじゃ駄目か！

阿九斗は校舎にとって返そうと踵を返すが、追っ手は多数でそちらに向かって突っ込んでいくことになる。

——ちくしょうめ、野次馬が大半だろうにさ！

「怪我すんなよ！」

阿九斗は怒鳴って、マナを正面に向かって放ち、激しく爆発させる。数人が空中を舞ったが、爆発で吹き飛ばされたのか飛んで逃げたのか阿九斗には確認する暇がなかった。

爆発の中を突っ切って走り、校舎に飛び込むと、野次馬を含めて逃げまどう生徒の数も増えたが、廊下の幅にしか追っ手はいないと考えれば攻撃すべき目標は絞りやすかった。

「どけぇ！」

相手を吹き飛ばすことだけに注力しながら慣れぬ校舎を走り回る。まだ十分も経っていないが、さすがに息が切れてきた。姿を隠す場所を探すが、どこに逃げようと誰かが見ている。大半が野次馬だが味方というわけではない。

走ることが無理になり、早歩き程度で移動していると、さすがに追いつめられてくる。校舎内を家に帰れなくなった猫のようにフラフラと移動する羽目になっていた。

――組織立って動いているのか？

ふらふらと歩きながらも、阿九斗はそんな疑念を抱いた。何人かの追っ手は強く、攻撃のツボも心得ていたが、阿九斗を深追いはしてこない。どうやら誘導されているらしい。

やがて阿九斗は屋上に出ていた。芝生の広い運動場があるが、いくら広くとも屋上は屋上だ。必ず端はある。

――追いつめられたというわけか。

阿九斗は覚悟を決めなければならないらしかった。校舎の端について振り返ると、人垣がぐるりと自分を囲んでいた。阿九斗が飛べないことを利用して、ここまで追いつめた相手は戦略家としても優れているに違いなかった。そして、その人物とは……。

人垣の中から絢子が歩み出てきた。殺意、というよりは決死の覚悟の宿った目をしている。手には真剣。木刀ではない。

「一対一で、と言いたいところだが、貴様の力を見るに、助力を受けるは恥ではない。私の剣をかわしても後に続く者があると知れ」

　真剣を絢子は八双に構えた。

「やめようよ……といっても、もうどうにもならないよな」

　阿九斗は力なく笑った。

　絢子はうなずく。

「ああ、もうどうにもならん」

　そして絢子は口の中で呪文を唱えはじめた。絢子の身体がぶれて、例の分身が生まれはじめる。だが今度は二体に分裂しただけでなく、さらに二体が生み出される。

　合計で四人の絢子が阿九斗に向かって前進を開始した。

──四人はかわせない……それにはじき飛ばそうにも……。

　無意識のうちにマナを暴走させていたとき、怒りに震えていたとき、そのどちらの場合かであれば攻撃は防げるような気がする。だが今の感覚では真剣はとても防ぎきれまい。そう阿九斗は感じていた。

「きぃえええええ！」

　四体の絢子が同時に飛んだ。まさに四方から斬撃が襲ってくる。



――ちぃ！

阿九斗は一体はかわし、残りをマナで切っ先をそらすように受け止める。

だが、阿九斗の予想通り完全にかわすことはできなかった。制服の切れ端と血が飛び散る。一本の刀が阿九斗の身体の表面を滑(すべ)っていた。

「うっ！」

「これでおしまいだ」

阿九斗はよろけて屋上のフェンスにもたれる。その喉元(のどもと)に四本の切っ先がぴたりと突きつけられた。

四体の絢子は冷たい声で同時に言った。

「僕はいまだにそんなにひどいことをしたとは思えないんだけどな」

阿九斗が苦しみにうめきながら言う。絢子の表情が曇(くも)った。

「その考えを改めろ。いや、改めるチャンスはもうないが。私は貴様が暴力によって他人を支配しようとしたところを見た。それがどれほどの罪かわかっていないのか？」

「ああ……そういうことか」

阿九斗は納得した。

そこに疑問を抱かないとすれば、確かに自分は魔王(まおう)向きの性格をしているということになる。もっと単純に怒りにまかせて殴(なぐ)るなりなんなりしていれば、どれだけ力が強くとも魔王などと呼ばれることはあるまい。

「だけど、どうやら僕はそういう性格なんだな」
「ならば、悲しいが死ね」
絢子は言った。阿九斗も「まさか」とは思いつつも、もしかしたら死ぬかもしれない、と覚悟するしかなかった。
しかし――
「性格は変わらないけど、考え方は変えられますよ」
いきなり脳天気な声が頭上でした。
四体の絢子も、阿九斗も、ぎょっとして上を見た。
そこには、けーなが浮（う）いていた。下から阿九斗が見上げていることに気づくと、慌（あわ）ててスカートをおさえて屋上に降り立った。そして、けーなは後ろ手を組んで、この場の空気にそぐわぬ微笑（ほほえ）みをみせた。
「けーな?」
「な、なぜここにいる、貴様!」
阿九斗らの驚（おどろ）きも無視して、けーなは両手を拡げた。そして詩でも読むかのようにうっとりとした調子でこう声をあげる。
「お二人こそ本当の親友です。傷つけあう必要なんてありません」
「何を馬鹿（ばか）なことを言っている?」
「そうだ、現に僕たちは……」

「いいえ。だって、本当はとってもお互(たが)いのことを気にしていたじゃないですか」
けーながあまりに大声で言うので、阿九斗も絢子も面食らう。

「え……？」

「ちょ、ちょっと待て……」

「いいえ！　あたしは知ってます。あーちゃんが本当はとっても真面目で、他人にとって善いことをしようと真剣(しんけん)になれる人だってことを。ただ、そのためにちょっといいところを人に見せたがるところがあって、それが仇(あだ)になっているだけだって」

「おい……」

阿九斗はどきりとする。

「そして、絢子ちゃんが、実はあーちゃんのそんな面を見抜(みぬ)いていて、本当は仲良くしたいんだけれど、やっぱり真面目だから体面が気になっていること。そして絢子ちゃんはあーちゃんが正しいことをしようとすぐに行動に移すところと、力が強いことをとてもうらやましく思っていること。そんなことをあたしは知っています！」

「ちょ、ちょっと……！」

絢子は四体とも顔を真っ赤にした。

「だから、二人ともドジなだけで、きっと親友なんです。そうなったら、もう喧嘩(けんか)なんてすることはありません！」

けーなは屋上中に響き渡るような声で言った。

阿九斗と絢子は完全に毒気を抜かれていた。とくに絢子は顔を真っ赤にしてうつむいている。

「ちぃ……やる気がそがれた。私は剣を退くぞ」

絢子は分身を消した。そして阿九斗から顔をそらす。

「けーなの言うことなど聞くな。いい加減なことしか言わん」

阿九斗は傷を押さえたまま苦笑いを浮かべた。

「そうする……というか、最初からそうするつもりだ。そもそも、根本的な解決には何にもなっていないしな」

阿九斗は周囲を囲んでいる生徒達の方を見た。

激しく殺気立っている何人かがいる。

「そうだな、そもそも私が退いたところで皆の怒りがおさまるわけではないな」

絢子は言った。

だが、絢子は気づいていなかった。殺気立っているのは、主に絢子の隠れファンとおぼしき連中だ。

――どっちにしろ殺されそうだ。まったく……。

阿九斗は内心ぼやく。けーなの演説程度で収拾がつくはずがないのだ。

「助太刀、するか?」

絢子が阿九斗の方を少しだけ振り返って言った。

阿九斗は首を横に振った。
「冗談。君が仕掛けた喧嘩じゃないか」
「だから、それはやりすぎたと思っている！」
一転して絢子は阿九斗にからむ。
「だから素直に助太刀を受けろ！」
「君が殺されたらそれこそ本末転倒だろうが」
「そうはさせないと言っているのだ！」
「だって、君、僕より弱いんだから……」
「それが私を怒らせるんだ、その言葉が！」
絢子と阿九斗は言い争うが、その様子がまた周囲をヒートアップさせたらしい。じりじりと怒りの群衆が間を詰めてくる。
すると――
「大丈夫です！」
けーなが声を張り上げた。
「え？」
さすがに策があるはずもないだろう、と阿九斗と絢子はけーなを見る。けーなは自信満々だった。腰に手を当てて、こう言い放つ。

「みんながご飯を一緒に食べれば解決するんです！」
　さすがに阿九斗も絢子も頭を抱えた。
「それはもういい……」
「この馬鹿をなんとかしろ……」
　それでもけーなはめげない。
「いいえ！　ご飯がこの世界で最高のものなのです！　さぁ、ころねちゃん！」
　けーなはいきなりそう言って手をあげた。そして下の方に目をやる。バズーカ状の道具を構えたころねが校庭に立っていた。
「え？」
　阿九斗は驚く。と、ころねが構えたバズーカ状の道具から、いきなり砲弾のようなものが撃ち出された。それは煙の尾を引いて上昇し、屋上付近で、ドン、と炸裂する。



――あれは周囲に薬品を拡散させると言っていた……。

阿九斗は以前の馬鹿話におけるころねの言葉を思い出す。

「あれに米を込めたっていうのか？」

けーなはうなずいた。

「これで学校のみんなでお米をとったことになります！　これで仲良し！」

けーなは断言する。

阿九斗と絢子は暗い顔になった。

「こりゃあ……駄目だね」

「ああ、もう駄目だな」

二人して覚悟を決めた顔になり、いきり立つ群衆に顔を向けた……はずだった。

「あれ？」

群衆は明らかに鎮まっていた。皆、上空から降り注ぐ光――つまり米――を全身に浴びてうっとりとしている。

「まさか……」

「そんな馬鹿な……」

阿九斗も絢子も呆然とする。喜んでいるのはけーなただ一人だ。

「やった！　やった！　やっぱりご飯で仲良しなんです！」

――いや、仲良しってよりも……。
阿九斗は周囲の異常な様子に気づいていた。ころねのバズーカの影響下にある者たちは、誰も彼もが薬物の影響下にあるようにしか見えなかった。
「あ、あはははは……」
「何か気分が良くなってこないか?」
「ああ……最高だ!　いい気分だ!」
皆、口々にそんなことを言っている。
「こ、こりゃどうなって……」
阿九斗は咄嗟にマナの障壁を張った。絢子とけーなも障壁の中だ。
呆然として群衆の様子を見ていると、彼らはやがてゾンビの集団のようにふらふらと移動しはじめた。
屋上からぞろぞろと下へと向かって行く。
「ついて行ってみるか?」
絢子が阿九斗の肩に手を回して助け起こす。阿九斗は傷を押さえて立ち上がった。
群衆達を追っていくと、彼らの数は段々と増え続けた。どうも全員が女子寮を目指しているらしい。
「どういうことなんだろう?」
阿九斗は首をかしげた。だが、その答えはすぐに出ることになった。

群衆は女子寮を取り囲んでいた。女子たちはもちろんずかずかと寮の中に入り込んでいく。そして中に入れない男子たちは、口々にこう叫んでいたのだ。

「江藤不二子様！　その姿を見せてください！　少しでもいいので、そのお姿を！」

女子達は当然、不二子の部屋を取り囲んでいるのだろう。中からは「不二子さまー！」と嬌声が響いてくる。

「な、なんだ……？」

阿九斗と絢子が戸惑っていると、その背後にころねがやってきた。

「これは確かに薬物ですね。けーなさん、ご飯以外に何か入れましたか？」

「うん。拾った薬も入れたよ」

けーなは素直にうなずいた。

――拾った薬って……まさか、江藤先輩からもらった……！

「拾ったって、どこで？」

阿九斗が聞くと、けーなはまたも素直にうなずいた。

「あーちゃんの部屋」

へらへらしたけーなの様子を見ていると、それ以上の質問は出来なくなる。だが、もし、けーながすべてわかっていて、阿九斗のポケットから薬を抜いたのだとしたら？

——薬を抜いたとしたら、階段でころねが僕に注意をしたときか？　もしけーなが姿を消してついてきていたんだとしたら……。

「この薬の効果は何なんだい？」

阿九斗はころねに聞く。

「散布用の薬ではありませんので、推測でしかありませんが、特定の対象を好きになるようにする効果が現在は発揮されています。散布で薄まっていますので、元の薬の効果という意味ではわかりませんが」

——そうなると、僕は江藤先輩に騙されてたってことか？　いや……確証はないけれども……気をつけないといけないのかな……。

阿九斗の頭に様々な疑いが湧いてくる。もしかしたら、絢子と自分があの薬の影響をもっと強烈に受けていたら、不二子の支配下に入ってしまっていたのではないか？　そしてそれが本当だとしたら、けーなは何もいわずに事態を好転させようとしてくれていたわけで……。

「ど、どうして薬をそこに入れたんだよ」

「えー？　だって、仲良くなれる薬だって聞いたよ？」

「僕についてきてた？」

「うん。ごめんねー。黙ってたけど。怒らないでね」

「じゃ、じゃあ、江藤先輩が僕を騙そうとしてたってことはないの？」

「なんで？　江藤先輩はいい人だよ？」

阿九斗はどこまでけーなが知っているのか、どこまで意図的に行動しているのかさっぱりわからなくなってしまった。

——あー、もういいや。ともかく……。

「この事態って、いつ収まるの？」

阿九斗はころねに聞いた。

「夜には効果が切れると予測されます」

ころねの予測通り、夜まで女子寮は囲まれていた。中で何が行われているかは阿九斗には想像もできなかった。ただ中からは不二子の悲鳴が聞こえ、その声がするたびに外を囲んだ男子生徒が歓喜の涙を流していたのを見ただけだった。

もちろん、阿九斗の件はうやむやになった。薬が生徒達の精神に影響を少なからず与えたらしく、皆、その日の記憶の大半はぼやけてしまっていたらしい。阿九斗としてはひどく恨まれる前の状態に戻ったわけだ。

○

一方、不二子が自分の計画の失敗を覚ったのは、すでにかなりの数の生徒達に女子寮を囲まれてからだった。もちろん阿九斗の様子はモニターしていたので、原因は理解できる。つまり自分の薬がころねによ

ってばらまかれたというわけだ。
「あの人はわたくしの計画を見破っていたんですのね！」
それは誤解なのだが、不二子としてはそう信じるのも当然のことだった。
「さすがは魔王ということですのね！　わたくしの正体が見破られたからには、これからはなりふり構ってはいられませんわ！　きっとあの人をわたくしのものにして、すぐにでもこの世界の破滅を……」
不二子は『恨み手帳』を取り出して阿九斗への恨み言とこれからの計画を書き付けようとしたが、水晶玉から聞こえてくる外の騒ぎに我に返る。
すでに女子生徒達は女子寮の中まで進入してきている。水晶玉から目を離して振り返ると、自室の扉がぶち破られんばかりに叩かれてたわんでいた。
「不二子様ぁ！　不二子様ぁ！　不二子様ぁ！」
「抱いてぇ！」
女子生徒たちの嬌声が聞こえてくる。どうやら散布したせいで薬が妙な方向に変化しているらしい。
「こ、ここはとりあえず騒動はおさめないといけませんわね……」
不二子は扉の鍵に手をかけた。自分の言うことを聞くように仕向ける薬なのだから、変質したとはいえ、この群衆を鎮めることは自分にはできるはずだと不二子は思っていた。
しかし、扉の鍵を外した瞬間、一気に雪崩を打って女子生徒たちが部屋に入り込んできたのである。

「ああぁれぇえええ！」
不二子はあっというまに女子生徒達にもみくちゃにされる。
「ああ不二子様ぁ！」
「お慕(した)い申しております！」
「ずっと前からこうしたかったんです不二子様ぁ！」
周囲から伸(の)びてくる手が不二子の全身をまさぐる。そして、少しでも身体に触(ふ)れようとするあまり、不二子の洋服をはぎとりはじめた。
「いやぁああああ！　おやめになって！」
不二子は叫(さけ)ぶが、なぜかその悲鳴が逆効果になっていた。
「あああ、なんて美しいお声！　もっとお泣きになって！」
周囲の女子生徒たちのボルテージは上がり続ける。
「やぁめえぇてぇえ！　そんなところおさわりにならないで！」
「ああ！　いい！　いい！　最高ですわ！」
「ひぃいいいい！」
全裸(ぜんら)になってもみくちゃにされるという不二子の地獄(じごく)は夜まで続いた。
「いやぁああああああああああああああああああああああああああ！」

○

「それにしても、だ」

騒ぎが収まった後、阿九斗は自室で腕組みをして考え込んでいた。わからないことは、やはりけーなが何を考えているか、だ。

「君は何を考えているんだ？」

阿九斗はけーなに直に聞いた。

「ご飯おいしい」

けーなは答えた。彼女の身体の前には炊飯器が置いてある。そして、けーなはそこから直接、白米をしゃもじでかきこんでいる。

炊飯器は新しく阿九斗が買ったものだ。けーなが何を考えているか知るための投資だと割り切っての行動だが、結局のところ効果があるかどうかはまだわからない。

と、窓がどんどんと叩かれた。

勝手に窓を開けて、顔を突っ込んできたのは絢子だった。

「女子が男子寮に入るな！」

けーなを指さして怒鳴る。

「絢子ちゃんも入ってきたじゃん」

　けーなはぼやく。
「まだ入ってない！　外に立ってるだけだ！」
「えー？　じゃあそもそもなんで絢子ちゃんはここに来たの？」
　けーなが口を尖(とが)らせると、絢子はいきなり顔を真っ赤にして口ごもる。
「う、うるさい！　私は仕方ないからこいつを更正(こうせい)させることに決めたのだ！　これからは悪いことをしないように鍛(きた)え直してやる！　覚悟(かくご)しろ！」
　絢子は阿九斗を指さした。そして、その勢いで今度はけーなに顔を向けた。
「そんなことより、けーな！　私の部屋に透明(とうめい)になって入ったことがあるだろう！」
「なんで？　証拠(しょうこ)とかないでしょ？」
　けーながしゃもじでご飯をすくって口に運ぶ。
「証拠？　それならば、何故、お前が私の独り言を知っている！」
「独り言って、あーちゃんのことをぶつぶつ言ってたこと？　聞いてないよ？」
　そのけーなの言葉で、絢子は顔をさらに真っ赤にした。
「聞いてる！　聞いてるじゃないか！　いや、繰(く)り返さなくていい！　黙(だま)れ！　わかった、私もこれ以上追(つい)及(きゅう)しないから！」
　絢子は大声で騒(さわ)ぐ。けーなもそれに答えて大声を出し、二人は阿九斗のすぐ近くでぎゃあぎゃあやりはじめた。

阿九斗は頭を抱える。
「ああ、どうなるんだ、これから……」
「それがわかるようになれば、まさに魔王になれると思いますが、いかがか」
ころねが阿九斗の独り言に答えた。
「兄貴ぃ！　ゲームでもしませんか、兄貴ぃ！」
ドアの向こうからヒロシの声がした。
阿九斗の学園生活ははじまったばかりだが、これからもさらにやかましいことにはなりそうだった。

○

そして、そんな阿九斗の学園生活を気にしていた者は、阿九斗以外にもいた。
教員室の応接スペースで向かい合っているのは美津子先生と生徒会長その人である。背が低いながらも堂々とした態度の生徒会長は、美津子先生相手でも態度を変えなかった。
「ええと、これで江藤不二子も正体が紗伊阿九斗に割れたと自覚しているので、黒魔術師どもを学内に入れてくると思うんですよ」
生徒会長はぼやくように言った。
「百年前のことは直接には知らないけれど、同じようなことになるのかしらね」

美津子先生は口を尖らせる。
「ボクも知らないですけれど、なんとかなるんじゃないっすかねぇ？」
生徒会長はからからと笑った。
「ともかく、魔王といっても善悪がはっきりしているものじゃないですものね。どっちの陣営にもつかないようになんとか善処してね」
「先生、そんなに簡単にいかないっすよぉ。服部さんの親が出てきて黒魔術師と対立しだしたら、彼は服部さんの方につくんじゃないですか？」
「その辺の感覚も調整してよ」
「生徒会長は万能じゃないっすよ！　それに気になることもあるんですが」
「何？」
「曽我けーな、彼女、何者なんすか？」
生徒会長がいわくありげに聞いた。が、美津子先生は首をかしげた。
「さぁ？　普通の生徒よ。本当に普通の生徒」
そう言って、美津子先生はにやりとした。

あとがき

毎度！　とご挨拶していいのか、はじめまして！　というべきなのかわかりませんが、ともかく水城正太郎です。生きてる？　俺は、まぁ、普通。

　ところで突然ですが、昔、お世話になった人が不味い店を見つけるのが天才的にうまい人でした。天才的というからには、ただひょっこり入った店がまずかったってことを後々まで記憶しておいていざって言うときに他人に勧める――それはそれですげぇな――ってなわけでなく、彼に「美味しい店があるんだ！」と連れて行ってもらった高級店、構えは豪華で銅像なんて置いてあり、さらにはお値段も結構なモノ……なんて店で出てくるものが不味い。
　味覚なんて人それぞれですが、その人物に連れて行ってもらった誰もが「不味い。高い」と口を揃えるのだから大したもの。ただし当人は美味しいと思っているので、それはそれで味覚は人それぞれってことでもあるのが不思議といえば不思議ですが。
　で、まぁ、それだけならそれだけの話なのですが、そこで学んだことがひとつ。
「不味い店だからって気にしていても仕方ない！」
　ということです。

そう知ってからは色々と楽になりましてというのも、外食になるとどこに入るか迷いまくったあげくに、入ったところでサービスやら味やらに怒りまくる人がよくいますが、そういう人は外食に特別なものを期待しているのでしょうけれども、そんな期待が一切なくなってしまったら、これはもう気楽なものです。しまいには、むしろ不味いものを歓迎するような心になります。

これは不味い……！　どうやって作ったんだか、むしろ感心する！

そんな心持ちになり、積極的に不味い店を探し続けることになります。チェーン店とか安い店じゃないとポイント高いです。レトルトをそのまま出す喫茶店みたいなのもNG。「ちゃんと料理しててこれ？」という驚きをこそ求めているのです。甘口スパゲッティのように狙っているものや、癖が強くて人を選ぶってのもなるべく外したいところ。そうすると意外と世の中に多くはないものです。

例えば俺が見つけた店は……って、おおっぴらに書けるわけないじゃん！

ちなみに店はそれぞれ違うけど、食べた後に俺があまりの感動に勝手に名付けた料理名だけ発表しておきます。

『不思議なチーズパイ』
『地獄の釜で作られたモツ鍋』
『死因は交通事故死の太刀魚』

が三巨頭と言えるでしょう。

彼らは今も来客を待っているのです。

あなたもそんな店を見つけたらこっそりとお手紙ください。関東圏なら尚結構。いつの日か食べに行こうと思います。

えー、ここに来て作品の話。
お気楽な感じで楽しんでいただきたいかと。深読みは無用ですよ。
とはいえ、書いてる方はどーんと気合い入っていますので、もろもろよろしくです。
割とこちらが言葉を並べる必要のない作品ですので、この辺で。お買いあげいただけたら嬉しいですよ。
予定は未定といえど、シリーズ化してガンガンやりたいところ。それには皆様のお力が必要です。こちらも裏切らないように頑張りますぜ。

皆様に謝辞を。
イラストの伊藤宗一さん。すごいイラストをありがとうございます。ラフを見た関係者の間でも評判で、すでにけーなは人気です。
担当のO橋さん。今回は仕事が年末年始にかかりお疲れ様でした。今度は少々楽が出来る時期に仕上げたいです。
そして関係者の方々にも感謝を。
さて、それじゃ楽しんでいきましょう！

◆ご意見、ご感想をお寄せください……ファンレターのあて先◆

〒151−0053

東京都渋谷区代々木2−15−8

(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部

水城正太郎先生／伊藤宗一先生

PROFILE

水城正太郎 みずきしょうたろう

『東京タブロイド』シリーズ（富士見ミステリー文庫）、『せんすいかん』シリーズ（ＨＪ文庫）。『ホビー・データ』を経て、現在ライター集団『Ａ－ＴＥＡＭ』主催。暇だ暇だと思っていたら、年末になって一気に忙しくなりました。どんな職業であろうと誰であろうと年末には忙しくなるものなんだなぁ！　と意味のわからない感動を味わっています。なんだかんだで忙しいのは楽しいものなのです。毎日十二月希望。

伊藤宗一 いとうそういち

兵庫県在住のイラストレーター兼漫画家。
一般向けから成年向けまで幅広く活動中。
好物は、熱血・筋肉・萌え・エロ・爺。
＜近況＞ジェット・リーの蹴り技を真似したら、足の小指をタンスに。

HJ文庫

いちばんうしろの大魔王

2008年2月1日　初版発行

著者―― 水城正太郎

カバーイラスト―― 伊藤宗一　　装丁―― 西村 大

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン　〒151-0053　東京都渋谷区代々木2-15-8